

熊本大学文学部
における組織評価
自己評価書

平成 26 年 9 月 30 日
1.文学部

目次

I 熊本大学文学部の現況及び特徴と目的	2
II 教育の領域に関する自己評価書	4
1. 教育の目的と特徴	5
2. 優れた点及び改善を要する点の抽出	7
3. 観点ごとの分析及び判定	8
4. 質の向上度の分析及び判定	63
III 研究の領域に関する自己評価書	65
1. 研究の目的と特徴	66
2. 優れた点及び改善を要する点	67
3. 観点ごとの分析及び判定	67
4. 質の向上度の分析及び判定	81
IV 社会貢献の領域に関する自己評価書	83
1. 社会貢献の目的と特徴	84
2. 優れた点及び改善を要する点の抽出	84
3. 観点ごとの分析及び判定	85
4. 質の向上度の分析及び判定	105
V 国際化の領域に関する自己評価書	106
1. 国際化の目的と特徴	107
2. 優れた点及び改善を要する点の抽出	107
3. 観点ごとの分析及び判定	108
4. 質の向上度の分析及び判定	120
VI 男女共同参画の領域に関する自己評価書	122
1. 男女共同参画の目的と特徴	123
2. 優れた点及び改善を要する点の抽出	123
3. 観点ごとの分析及び判定	124
4. 質の向上度の分析及び判定	130
VII 管理運営の領域に関する自己評価書	131
1. 管理運営の目的と特徴	132
2. 優れた点及び改善を要する点の抽出	132
3. 観点ごとの分析及び判定	133
4. 質の向上度の分析及び判定	160

I 熊本大学文学部の現況及び特徴と目的

1 現況

(1) 学部等名：熊本大学文学部

(2) 学生数及び教員数（平成 26 年 5 月 1 日現在）：学生数 770 人、専任教員数（現員数）：62 人、助手数（0 人）

2 特徴

文学部は、旧制第五高等学校の伝統を踏まえつつも、日々進歩する学問研究、また社会情勢の変化や社会の要請に応えるべく、これまで改革改組を行い、現在、総合人間学科、歴史学科、文学科、コミュニケーション情報学科の 4 学科を設置し、さらに、総合人間学科は人間科学コース、社会人間学コース、地域科学コースの 3 コース、歴史学科は世界システム史学コース、歴史資料学コースの 2 コース、文学科は東アジア言語文学コース、欧米言語文学コース、超域言語文学コースの 3 コース、コミュニケーション情報学科はコミュニケーション情報学コースの 1 コースからなり、合わせて 9 つのコースという領域上の指導体制を取り、人文社会科学系をほぼ網羅する教育・研究体制を取っている。

また、上記 9 つのコースの中の専門分野に応じて、22 の模範履修モデルが『学生便覧』において示されるとともに、年次ごとの積み上げ式・段階的学習カリキュラム体制が取られている。

そのほか、文学部の教育上及び組織上の特徴としては、

- ・学生約 10 人に対して教員 1 人の割り当てとなる少人数教育
- ・人文社会科学系の組織とはいえ、理論だけにとどまらない、演習、実習、実験、フィールドワーク等の実践的教育の展開
- ・現代社会の要請に応えるべく、人文社会科学分野の基礎的能力・知識、論理的思考力の育成に加え、実践的英語運用能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力の育成
- ・日々進歩する社会のデジタル化に対応した、コンピュータや情報機器の操作能力の育成

などが挙げられる。具体的には、総合人間学科の認知心理学領域では、十分な実験設備が配備され、コミュニケーション情報学科では、情報技術メディアのコンテンツ制作のための設備が導入され、フィールドワークのある領域分野では資料や設備が整った研究室が用意されている。このような教育的・組織的体制は今後も絶えず改革を図っていく。

また、研究面では、各学科の長所を生かした研究がなされており、多くの特色ある業績が報告されている。具体的な報告は III の研究の領域で述べるが、特に社会的にも注目を浴び、かつ非常に高い評価を得ている「文学部附属永青文庫研究センター」の活動をあげたい。その一部が国の重要文化財にも指定されている細川家の永青文庫資料の内の数万点に及ぶ歴史資料や写本が、同センターで整理・研究され、数多くの出版物の刊行、セミナー・シンポジウム・展示会の開催ほか、様々な活動及び成果が提供されている。その総合的研究を通して、拠点的研究の組織、また地域文化振興への貢献など、人文社会科学系分野における研究と文化振興への多大なる貢献をなしている。

3 組織の目的

熊本市という地方中核都市に位置する、伝統ある総合大学の文学部として、人文社会科学の基礎的分野に関する教育と研究を担いつつ、国内外で高い評価を得ることができる研

研究成果を挙げてこれを広く発信していくとともに、真理の探究を図り、わが国における人文社会科学分野の普遍的役割、及び熊本県を中心とした九州地域における課題解決の役割を果たすべく、さらに地域文化の継承と創造への貢献を目指し、教育研究を推進する。

また、人文社会科学という学問分野における教育・研究を通して、幅広く豊かな教養と、人文社会科学に関する確かな専門的知識を有し、創造的知性を持って自らの課題を発見し、解決する実践的な能力、及び 21 世紀に生きる人間に必要なグローバルな視野と市民的公共心を備え、広く社会に貢献できる人材の育成を目指す。

特徴及び目的は、平成 25 年度の文部科学省との「ミッションの再定義」においてまとめられている：

資料 I-3-A：平成 25 年度「ミッションの再定義」（抜粋）

【総論】

熊本大学における人文社会科学分野においては、真理の探究を図るとともに、我が国における人文社会科学分野の普遍的役割及び熊本県を中心とした九州地域における課題解決の役割を果たすべく、教育研究を実施してきた。

引き続き、上記の役割を果たしながら、国立大学改革プランを踏まえ、教育及び研究において明らかにされる強み・特色・役割等により、学内における中長期的な教育研究組織の在り方を速やかに検討の上、実行に移す。

【教育】

○ 人文社会科学の学問分野の教育研究を通じて、学士課程においては、幅広く豊かな教養と人文社会科学に関する確かな専門的知識を有し、創造的知性を持って自らの課題を発見し解決する実践的な能力及びグローバルな視野と市民的公共心を備え、広く社会で貢献できる人材を養成する。

○ このため、情報処理や英語コミュニケーションといった専門基礎教育の推進、文章作成能力や課題発見・解決能力を養う課題研究に取り組んでいる。特に、コミュニケーション情報学分野においては、授業の約 3 分の 1 を英語で実施し、スピーチやディスカッションにより、英語運用能力の向上に取り組んでいる。

○ 今後、コミュニケーション力及び企画立案能力、課題解決能力を含め、卒業時に必要とされる資質や能力を可視化しつつ体系的な教育課程を編成するとともに、熊本県地域インターンシップや海外フィールドスタディなどを推進し、学生の能動的学習を促す教育の実施や組織的な教育体制等を整備する。また、これらの取り組みの実施だけではなく、可視化した資質や能力に応じた取り組みの成果や効果等を適切に把握していくことにより、学士課程教育の質的転換に取り組む。

【研究】

○ 日本史学や考古学など人文社会科学分野における研究実績を活かし、永青文庫研究センターを設置し、細川家文書などの大名家文書の目録作成やアーカイブ化に取り組んでいる。また、交渉紛争解決学や先端倫理学などの新たな学問分野を開拓している。

○ これらの取り組みを通じて、平成 25 年に 266 通の細川家文書が国の重要文化財に指定されている。また、より広域的なものとしては、東日本大震災後の福島県内での住民同士の対話を通じた地域の合意形成や紛争解決に貢献している。

○ 今後、分野横断的かつ総合的な研究の組織的な推進や、国連大学など海外研究機関との連携を通じた研究成果の国際的な発信を推進するとともに、我が国・社会の課題解決・文化の発展に貢献することを目指す。

【その他】

○ 全学的な機能強化を図る観点から、18 歳人口の動態や社会ニーズを踏まえつつ、学部・大学院の教育課程及び組織の在り方、規模等の見直しに取り組む。

（出典：「平成 25 年度文学部ミッション再定義」）

Ⅱ 教育の領域に関する自己評価書

1. 教育の目的と特徴

文学部では、平成 22 年度の教育目的、

資料 II-1-A：教育目的（平成 22 年度）

教養教育を踏まえ、人文・社会科学の幅広い専門教育をとおして、理論的および実践的能力と社会性を備えた人材を養成します。

（出典：『平成 22 年度 学生便覧』 p. 1）

を改め、平成 23 年度から新たに以下の教育目的を策定した：

資料 II-1-B：教育目的（平成 23 年度）

幅広く豊かな教養と人文・社会科学に関する確かな専門的知識を有し、創造的知性を持って自ら課題を発見し解決する実践的な能力、及び 21 世紀に生きる人間に必要なグローバルな視野と市民的公共心を備え、社会に貢献できる人材を育成する。

（出典：『平成 26 年度 学生便覧』 p. 1）

これは、平成 20 年度の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を踏まえて、文学部の学士課程教育で身につけさせる力及び人材像をより具体的に明示するためである。

この改訂を受けて平成 24 年度からスタートした新カリキュラムでは、文学部における「人づくり」教育をさらに充実させることを目的に、以下のような具体的方針が掲げられている：

資料 II-1-C：教育の具体的方針（平成 24 年度～）

1. 1 年次で市民力、2 年次で社会人力、3 年次で職業人力を養成する段階的なキャリア支援教育を実施する。
2. 情報処理や英語コミュニケーションといった専門基礎教育の促進、文章作成能力や課題発見・解決能力を養う課題研究に取り組む。特にコミュニケーション情報学分野においては、授業の約 3 分の 1 を英語で実施し、スピーチやディスカッションにより、英語運用能力の向上に取り組む。
3. 今後、コミュニケーション力及び企画立案能力、課題解決能力を含め、卒業時に必要とされる資質や能力を可視化しつつ、体系的な教育課程を編成する。
4. 熊本県地域インターンシップや海外フィールドスタディなどを推進し、学生の能動的学習を促す教育の実施や教育体制等を整備する。

（出典：「平成 23 年 7 月教授会：学士課程検討委員会説明資料」及び「平成 25 年度文学部ミッション再定義」を基に作成）

2.～4.は、平成 25 年度の「ミッションの再定義」で掲げられた、文学部の教育面での強み・特色に基づいている：

資料 II-1-D：ミッション再定義（平成 25 年度）

○ 人文社会科学の学問分野の教育研究を通じて、学士課程においては、幅広く豊かな教養と人文社会科学に関する確かな専門的知識を有し、創造的知性を持って自らの課題を発見し解決する実践的な能力及びグローバルな視野と市民的公共心を備え、広く社会で貢献できる人材を養成する。

○ このため、情報処理や英語コミュニケーションといった専門基礎教育の推進、文章作成能力や課題発見・解決能力を養う課題研究に取り組んでいる。特に、コミュニケーション情報学分野においては、授業の約 3 分の 1 を英語で実施し、スピーチやディスカッ

ションにより、英語運用能力の向上に取り組んでいる。

○ 今後、コミュニケーション力及び企画立案能力、課題解決能力を含め、卒業時に必要とされる資質や能力を可視化しつつ体系的な教育課程を編成するとともに、熊本県地域インターンシップや海外フィールドスタディなどを推進し、学生の能動的学習を促す教育の実施や組織的な教育体制等を整備する。また、これらの取り組みの実施だけでなく、可視化した資質や能力に応じた取り組みの成果や効果等を適切に把握していくことにより、学士課程教育の質的転換に取り組む。

(出典：「平成 25 年度文学部ミッション再定義」より)

これらの目標を実現するための組織として、平成 20 年 1 月に「文学部学士課程教育検討委員会」を設置し、検討を継続してきている。

前掲資料 II-1-B の新たな教育目的に沿って、各学科・コースは次のような教育目標を設定している：

資料 II-1-E：各学科・コースの教育目標

<総合人間学科>

「人間」について、理論的・実証的に考察し、また様々な地域事象や社会文化現象を体系的に捉えることで、現代社会が直面する諸問題に対応しうる能力を持った人材を育成する。

・人間科学コース：

人間や人間関係についての知見を持ち、目先の利害にとらわれず、教養ある批判的判断のできる人材を育成します。具体的には、それぞれの履修モデルの特性を活かして、論理的判断力（認知哲学）、感受力・美的判断力(芸術学)、実証的判断力(認知心理学)を養うことで、問題解決への柔軟で大胆な発想と状況に応じた行動が可能な人材の育成を目指します。

・社会人間学コース：

「社会的存在としての人間」という認識から出発し、現代における人間と人間を取巻く社会的現象に積極的にかかわる人材の育成を目指します。

・地域科学コース：

「地域社会の生活主体としての人間」という観点から、人間とその地域的環境（社会文化的・自然的環境）について多面的・有機的に理解を深め、現代の地域社会が抱える諸問題の解決に実践的に取り組む人材の育成を目指します。

<歴史学科>

歴史資料を確かな専門知識・理論・技術に基づいて分析し、過去の歴史や思想を読み解くとともに、地域や時代を横断的かつ総合的に俯瞰することを通して、人間や社会、異文化に対する理解を深め、現代社会が抱える諸問題に対応し、発言できる人材を育成する。

・歴史資料学コース

文献史料や考古資料を的確な手法・技術で調査・分析する作業を通じて過去の歴史を読み解き、さらに人間や社会について真摯に考察するとともに、現代を含めた時代の本質を正しく理解したうえで現代社会の諸問題に対応し、発言できる人材を育成します。

・世界システム史学コース

アジアと欧米の歴史展開や社会思想を、確かな専門知識・理論をもとに地域横断的かつ統合的に分析・討論することを通じて、異なる社会や文化に対する理解を深め、広い視野と柔軟な思考方をもって現代社会の諸問題に対応し、発言できる人材を育成します。

<文学科>

様々な言語に習熟するとともに、鋭い感受性、柔軟な思考力、的確な表現力を培い、言語と文学を通して人間を探求し、国際交流を推進する人材を育成する。

・東アジア言語文学コース

東アジアの伝統文化や現代的課題に対して幅広い目配りのできる豊かな専門的知識と理解力を習得し、東アジアの言語や文学、文化に関する諸問題について、新たな課題を発見して解決しその成果を的確に表現できる人材を育成します。

・欧米言語文学コース

英語、ドイツ語、フランス語の運用能力を高めるとともに、各言語圏の文学、文化、社会についての知見を幅広く獲得し、自国の文化や社会制度に対する相対的な視点を持つことができる人材を育成します。

・超域言語文学コース

人類の言語文化及びその精華である文学作品の多様な諸相に対する理解力と、その相互作用を複眼的・国際的に考察する視野を持ち、人類の言語や文学に関する専門的な諸問題について新たな課題を発見して解決し、その成果を的確に表現できる人材を育成します。

<コミュニケーション情報学科・コース>

高次のコミュニケーション能力、外国語運用能力、そしてメディア運用能力を涵養することで、情報を読み解き、発信できる能力を高め、グローバル化・情報化が進む社会において先導的役割を担い、自発性と創造性に優れた人材を育成する。

(出典：『平成 26 年度学生便覧』 pp. 1-2)

教員個人が具体的に取り組むべき教育活動の指標としては、以下の 7 項目が掲げられている：

資料 II-1-F：教員個人が具体的に取り組むべき教育活動指標

1. 学生による授業改善のためのアンケート結果等を踏まえた授業の質の向上のための取り組み
2. 学生への研究指導の充実
3. 学生への学習支援の充実
4. 学生への生活・メンタル面での支援の充実
5. 教養教育への貢献
6. 就職指導の充実
7. 学生への安全衛生教育

(出典：『平成 25 年度文学部規則集』 p. 40)

[想定する関係者とその期待]

想定する関係者は、受験生、在學生、保護者、卒業生の受け入れ先となる組織や企業である。受験生からは、様々な関心に対応する受け入れ体制・学習環境が、在學生からは、基礎学力の養成・専門知識の深化・学習環境・就職の支援体制が、保護者からは、情報提供が、卒業生の受け入れ先となる組織や企業からは、文学部としての特色ある教育研究、社会で通用する教育研究が期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

<教育体制・活動>

1. 平成 23 年度以前の『学生便覧』には学部の教育目的のみ、平成 24 年度には、学部

及び学科・コースの教育目的のみが明示されていたが、平成 25 年度から、大学としての学位授与方針、学部・学科・コースの学位授与方針及びカリキュラム編成方針、それらに対応させた学業の成果が記載されている。

2. 平成 24 年度から実施した新カリキュラムでは、「21 世紀市民学入門」、「文学部入門」、「実践英語」を 4 学科共通の専門基礎科目として新設することで、実践的・社会対応的科目を、それ以前の 6 科目から 10 科目に増やしている。

3. コミュニケーション情報学科では、授業の約 3 分の 1 を英語で実施し、スピーチやディベートを取り入れた授業によって、英語運用能力の向上に取り組んでいる。文学科においても、外国人教員及び日本人教員による英語の授業が行われている。

4. 今後「地域インターンシップ」や「海外フィールドスタディ」など、大学のキャンパスを越えた授業科目の設定も視野に入れ、学生の社会人力、コミュニケーション力、地域貢献力を養う教育体制の展開に取り組んでいる。

5. 「学部長と学生代表による懇談会」で出される学生の要望をよく汲み上げ、改善にいたっている。

6. TA 制度が活発に運用されている。

7. 障害のある学生への支援の奨励がなされ、文学部学生が積極的に支援活動に参加している。

8. 奨学制度が活発に運用されている。

<教育の成果>

1. 学生の単位取得状況、成績評価状況、学年進級状況、学位授与数、学位論文、資格取得状況等は十分な数値を示しており、学部における学業の成果が見られる。

2. 「卒業生による満足度アンケート」の結果から、文学部への満足度が高いという結果が出ている。

3. 平成 22～25 年度の、卒業後の就職あるいは進学割合は、平均して 85.1%という高い水準にある。平成 24 年度の就職率は、『サンデー毎日』（2013 年 8 月）の調査によると、全国 549 大学中、文・人文・外国語系学部で全国 46 位、九州では 1 位となっている。

【改善を要する点】

1. 交流協定大学への留学生数がいづらか低調である。平成 26 年度は 10 名を超え、改善の兆しが見えるが、今後、改善すべき余地がある。

2. 女性教員の割合が平成 26 年度現在で約 13%にとどまっており、学部の目標である 15%以上を達成するよう努力の必要がある。

3. 44 歳以下の若手教員が全体の 25%と、3 割に満たないことは、文学部の活性化の上で今後改善を必要とする。

3. 観点ごとの分析及び判定

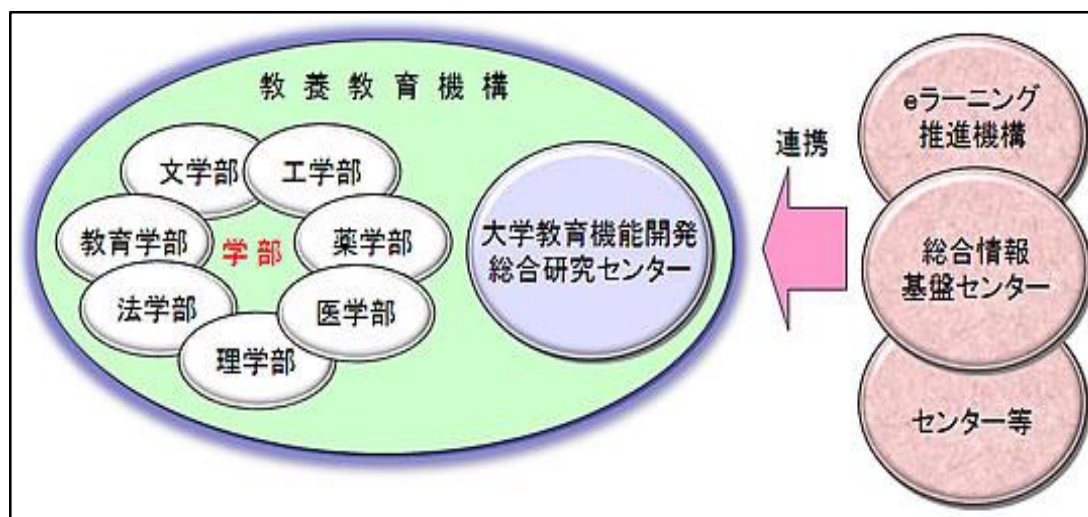
分析項目 1 教育活動の状況

観点 1-1 教育実施体制

(観点に係る状況)

教養教育機構の体制及びセンター等との連携を図示すると以下のようなになる：

資料 A-1-1-1-1：教養教育機構の体制



(出典：「熊本大学HP：＜教育＞→＜教養教育の実施体制＞」)

教養教育を構成する教科集団における文学部教員の所属状況、教養教育と専門教育の体系、教養科目における部局ごとの担当教員数は以下のとおり：

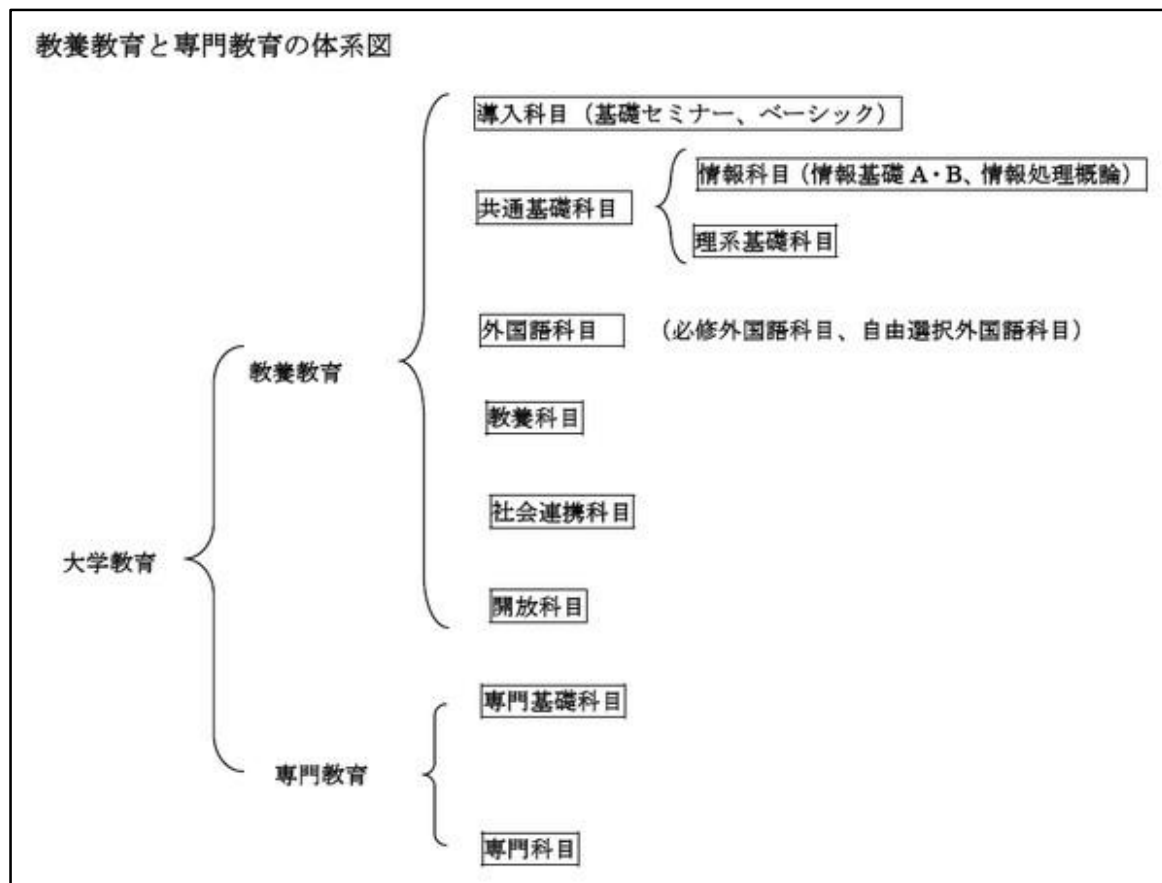
資料 A-1-1-1-2：教科集団における文学部員の所属状況

教科集団名	担当コマ数(1コマ=90分)		教科集団を構成する教員の所属部局名	人数(人)
	専任教員	非常勤教員		
哲学	6	4	文学部、教育学部、社会文化科学研究科	7
教育学	11	3	教育学部、国際化推進センター、大学教育機能開発総合研究センター	20
心理学	3	2	文学部、教育学部、生命科学研究部(医学)	17
芸術	3	2	文学部、教育学部、自然科学研究科(工学)	15
文学・言語学	9	3	文学部、教育学部、社会文化科学研究科、国際化推進センター	19
法学	7	0	教育学部、法学部、社会文化科学研究科、法曹養成研究科	37
政治学	2	2	法学部、社会文化科学研究科、政策創造研究教育センター	7
経済学	2	1	教育学部、法学部、社会文化科学研究科	7
歴史学	6	5	文学部、教育学部、社会文化科学研究科、国際化推進センター、五高記念館	17
社会学	7	3	文学部、教育学部、社会文化科学研究科、大学教育機能開発総合研究センター	12
地理学	3	1	文学部、教育学部、自然科学研究科(理学)、生命科学研究部(医学)	5
数学・統計学	45	29	教育学部、自然科学研究科(理学)、生命科学研究部(医学)、自然科学研究科(工学)	28
物理学	23	4	教育学部、自然科学研究科(理学)、生命科学研究部(保健学)、自然科学研究科(工学)、衝	28

			撃・極限環境研究センター	
化学	23	5	教育学部、自然科学研究科（理学）、生命科学研究部（保健学）、自然科学研究科（工学）、環境安全センター	37
生物学	21	1	教育学部、自然科学研究科（理学）、生命科学研究部（医学）、生命科学研究部（保健学）、生命科学研究部（薬学）、自然科学研究科（工学）、自然科学研究科、沿岸域環境科学教育研究センター、発生医学研究所、エイズ学研究センター、生命資源研究・支援センター、バイオエレクトロニクス研究センター	57
地学	18	4	教育学部、自然科学研究科（理学）、沿岸域環境科学教育研究センター	19
環境造形・科学	12	0	自然科学研究科（工学）、大学教育機能開発総合研究センター、沿岸域環境科学教育研究センター、政策創造研究教育センター、環境安全センター	33
科学技術・情報	7	0	文学部、教育学部、自然科学研究科（理学）、自然科学研究科（工学）、社会文化科学研究科、法曹養成研究科、総合情報基盤センター、沿岸域環境科学教育研究センター、衝撃・極限環境研究センター、生命資源研究・支援センター、バイオエレクトロニクス研究センター	103
医科学	8	0	自然科学研究科（理学）、生命科学研究部（医学）、生命科学研究部（保健学）、生命科学研究部（薬学）、発生医学研究所、エイズ学研究センター、生命資源研究・支援センター、政策創造研究教育センター	228
薬科学	2	0	生命科学研究部（医学）、生命科学研究部（薬学）、薬学部、自然科学研究科（工学）	56
健康・スポーツ科学	21	7	教育学部、生命科学研究部（医学）、生命科学研究部（保健学）、政策創造研究教育センター	28
既習外国語	172	233	文学部、教育学部、生命科学研究部（保健学）、生命科学研究部（薬学）、自然科学研究科（工学）、社会文化科学研究科、大学教育機能開発総合研究センター、衝撃・極限環境研究センター	54
初修外国語	170	120	文学部、教育学部、法学部、自然科学研究科（工学）、社会文化科学研究科、国際化推進センター	42
情報教育	48	16	教育学部、自然科学研究科（工学）、社会文化科学研究科、総合情報基盤センター、eラーニング推進機構	16
合計	629	445		892

(出典：『2013 熊本大学データ集』 p. 47)

資料 A-1-1-1-3：教養教育と専門教育の体系図



(出典：『2014 年度教養教育の案内』 p. 10)

資料 A-1-1-1-4：各種類の授業科目要旨

- <基礎セミナー>
 ・大学の教育環境を肌で感じ、大学での学習スタイルを身につける。
- <ベーシック>
 ・「学習」「社会」「自己」に対する考え方の転換を図る大学教育のオリエンテーション科目である。
- <情報基礎 A・B>、<情報処理概論>
 ・コンピュータによる電子情報の取扱い方を教える。
- <理系基礎科目>
 ・理系学部での数学・理科の基礎科目である。
- <必修外国語科目>、<自由選択外国語科目>
 ・グローバル社会を生き抜くためのコミュニケーション能力と海外事情に関する基礎知識を提供する。
- <教養科目>
 ・古典世界の事物から現代社会の事件まで、また科学のエッセンスから複雑な現象世界の解読まで、様々な興味深いテーマに即して、現代社会の流動性とそれに関わる学問的实践に触れる。
- <社会連携科目>
 ・社会的実践活動に関するテーマや複数の学問領域にまたがる話題を提供する科目群からなる。
- <開放科目>

・ 学生が所属する学部以外の専門教育科目の一部に触れることを目的とする。

(出典：『2014年度教養教育の案内』 p. 10)

資料 A-1-1-1-5：教養授業科目における部局ごとの担当教員数

学部等名	専任/ 非常勤	共通基礎科目					外国語科目										教養科目	社会連携科目	開放科目 ※2	合計
		導入科目		情報科目			英語 (右記以外)	英語 (C-3・C-4)	英語 (D-1・D-2)	独語	仏語	中国語	コリア語	スペイン語・ロシア語・ラテン語・イタリア語	日本語					
		基礎セミナー	ベーシック ※1	情報基礎 A・B	情報処理 概論	理系基礎科目														
文学部	専任	27					63			27	28	16	10			24	5	200	214	
	非常勤															14		14		
教育学部	専任	15				2	54					4				19	5	2	101	114
	非常勤															13			13	
法学部	専任	11							20							8	2		41	43
	非常勤															1		1	2	
理学部	専任	21				72										21	2	4	120	128
	非常勤															8			8	
医学部医学科	専任	1						4								2	1	1	9	9
	非常勤																		0	
医学部保健学科	専任	6					8									12	1		27	27
	非常勤																		0	
薬学部	専任	1						2								2		3	8	8
	非常勤																		0	
工学部	専任	11				10		8								17	1	5	52	66
	非常勤							14											14	
社会文化科学研究科	専任						9				18								27	27
大学教育機能開発総合研究センター	専任	4					9	20								5	6		44	44
国際化推進センター	専任													42	3	1			46	68
	非常勤													22					22	
教養教育機構	非常勤			14		35	185	2		17	16	36	26	12				3	346	308
保健センター	専任															1			1	1
総合情報統括センター	専任			38	6											1	1		46	46
環境安全センター	専任															1			1	1
五高記念館	専任															1			1	1
合計	専任	97	12	38	6	84	143	20	14	47	28	38	10	0	42	117	25	15	736	
	非常勤	0	0	14	0	35	185	2	14	17	16	36	26	12	22	36	0	4	419	
	計	97	12	52	6	119	328	22	28	64	44	74	36	12	64	153	25	19	1,155	

※1 ベーシックは複数部局によりオムニバス形式で実施(クラス数:12)
 ※2 放送大学との教育協力型単位互換制度により3科目開講(教養教育機構に計上)
 ◆ 詳細は「教養教育の案内」参照 https://kuss.kumamoto-u.ac.jp/binran/data/2013_kyoyo.pdf

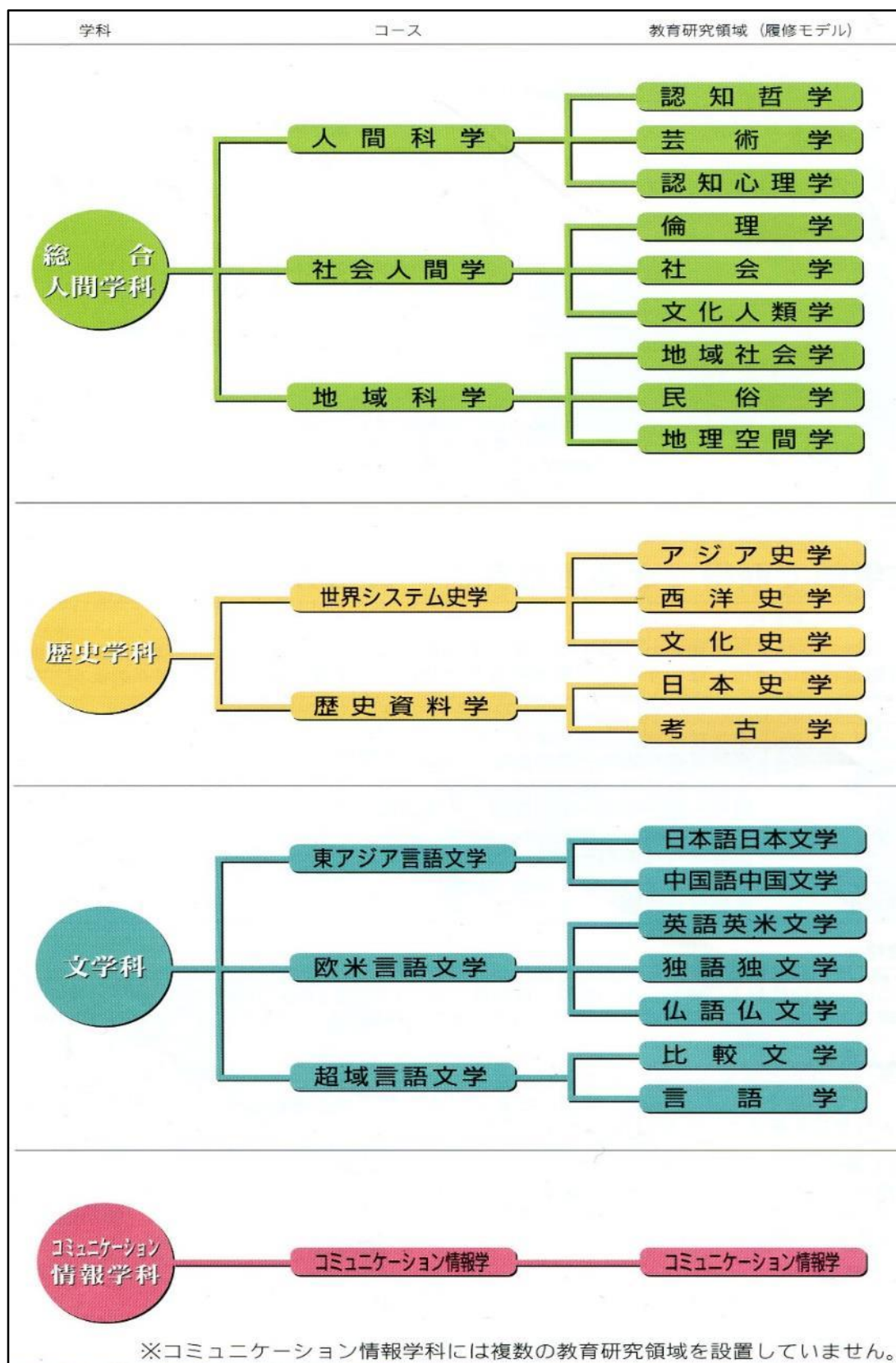
(出典：『2014 熊本大学データ集』 p. 48)

教養教育に対する文学部の貢献度は非常に高いことが分かる(計 214 コマを担当)。とりわけ、「基礎セミナー」に関しては、全体の 4 分の 1 以上を文学部教員が担当している。

教養教育の実施体制に関しても、文学部は積極的な協力を惜しまなかった。全学の学士課程教育推進委員会の求めに応じて、理系学部に対して文学部が提供できる教養科目(その逆も)を回答し、「教養教育実施体制(案)に関する文学部の意見」(平成 23 年 1 月)を提出し、平成 24 年度には、リベラルアーツ部会に当時の学部長・副学部長・教務委員長が参加し、答申の作成に尽力した。また、「文学部が負担する教養科目について」の合意を形成するなど、教養教育を中核的に担う学部としての努力を継続してきている。(中期計画番号:K18)

学部の教育実施体制は、4 学科・9 コースからなる：

資料 A-1-1-1-6：文学部の教育実施体制



（出典：『2014 年度文学部案内』 p. 6）

文学部における教員の選考は、教養教育、専門教育、大学院教育、年齢構成などを考慮した上で行われる：

資料 A-1-1-1-7：平成 26 年度現在の文学部構成教員数

学科	教授	准教授	講師	計
総合人間学科	9 (1)	9 (1)		18 (2)
歴史学科	5 (1)	5 (1)		10 (2)
文学科	10 (1)	11 (2)	2 (1)	23 (4)
コミュニケーション情報学科	4	6		10
永青文庫研究センター	1			1
計	29 (3)	31 (4)	2 (1)	62 (8)

* 括弧の中の数値は女性教員数

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

* 平成 26 年 4 月 1 日現在

資料 A-1-1-1-8：年齢別文学部構成教員数

年齢区分	教授		准教授		講師		助教		助手		合計
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
～24 歳											
25～34 歳			1	2%							1
35～44 歳			13	21%	1	2%					14
45～54 歳	11	18%	10	16%	1	2%					23
55～64 歳	18	29%	7	11%							24
65 歳～											
合計	29	47%	31	50%	2	3%					62

(出典：『2014 熊本大学データ集』 p. 18 より)

44 歳以下の「若手教員」が 25%と、3 割に満たないことは、文学部の活性化の上で、今後改善を必要とする。

各学科・コースの専門領域の概要は以下のとおり（中期計画番号：K19）：

資料 A-1-1-1-9：各学科・コースの専門領域の概要

＜総合人間学科（教員 18 名）＞
 知識論、言語哲学、経済地理学、産業地域論、音楽史、文化人類学、社会人類学、人間形成論、深層心理学、民俗学、口頭伝承論、心理学、認知神経科学、発達心理学、応用倫理学、社会問題論、現代社会論、古代ギリシャ哲学・倫理学、現代倫理学、規範倫理学、応用倫理学、地域社会学、農山村振興論、医療社会学、臨床社会学、環境地理学、気候学、軽量地理学、環境社会学、コミュニティ論、理論社会学、文化社会学、国際社会学、実践民俗学、文化行政論、ドイツ語圏文学、写真論、視覚心理学

<歴史学科（教員 10 名）＋永青文庫研究センター（教員 1 名）>

中国政治・経済史、中国政治・社会史、中世ヨーロッパ社会経済史、近現代アメリカ社会経済史、近世・近代イギリス社会史・都市史、日本近代思想史、ヨーロッパ近代思想史、日本近世政治経済史、日本中世社会経済史、日本近代政治社会史、環中国海地域の考古学、東北アジア先史学・植物考古学、日本考古学

<文学科（教員 23 名）>

日本近代文学、近代の日本語、中国古典文学、中国演劇、上海史、日中比較文学、中国語学、英国小説、文学批評、英語学、中世英文学、現代アメリカ詩、日米俳句比較研究、20世紀アメリカ小説、ドイツ言語学、ドイツ語史、19・20世紀ドイツ文学、ドイツ文化・文学、比較思想、フランス語学、19世紀フランス詩、16世紀フランス文学、フランス語教授法、中国近現代文学、大衆文化論、ドイツ語圏文学・文化、旧約聖書学、ヘブライ思想、韓中比較文学、日中比較文化、インドの諸言語、対照言語学、パプア諸語、朝鮮語

<コミュニケーション情報学科（教員 10 名）>

言語学、心理言語学、精神測定学、言語思想史、一般言語学、社会言語学、マーケティング、経営戦略、現代文化・メディア研究、eラーニング、言語コミュニケーション論、コミュニケーション情報学、行為論、価値論、18・19世紀英国小説、現代文化史学批評論、コミュニケーション理論、修辞学、異文化間コミュニケーション論、情報メディア倫理、メディア・コミュニケーション論、地域ブランディング、談話分析、コミュニケーション学、応用言語学、英語教育、教員教育、コミュニケーション方法論、質的調査方法論、ビジネス・コミュニケーション論、プロジェクト・マネジメント、エージェント・ベース・シミュレーション

*括弧の中の教員数は文学部所属教員数であるが、専門領域は社会文化科学研究科所属の教員のものも一部含まれている。（出典：『2014年度文学部案内』pp. 8, 18, 24, 32を基に作成）

上記資料 A-1-1-1-1、A-1-1-1-3、A-1-1-1-6、A-1-1-1-9 に示されるような、教養教育と専門教育の連携及び専門教育の実施体制の詳細から分かるように、年次ごとに専門性を高めていく教育体制、また人文社会科学分野の多様性に十分に対応しうる約 60 名の各専門の教員による少人数授業、大講義、個別的論文指導等により、学生の教育の質は十分に保証されている。

『一般入試学生募集要項』において、各学科の入学者受け入れ方針が記載されている（中期計画番号：K12）：

資料 A-1-1-1-10：各学科の入学者受け入れ方針

<総合人間学科>

現代における人間のあり方や社会のあり方を、「人間」「社会」「地域」という三つの角度から、論理的に考えたり、実験によって分析したり、大学の外に出て調査や実習をしたりしながら学んでいく。それによって現代社会や現代に生きる人々が直面するさまざまな問題をどのように分析したらよいのか、それに対処するにはどうしたらよいのかを自分自身で考え、その考えに基づいて行動できる能力を育むことを目標としている。以上のような観点から、本学科は次のような人を求めている。

1. 人間や人間関係への関心と探究心を持ち、人間に関わる問題に実際に取り組んでいきたいと考えている人。
2. 現代社会の抱える諸問題や日本及び世界各地の社会や文化に関心を持ち、それらを自分で分析する力をつけたいと考えている人。
3. 地域社会や地域文化に関心を持っていて、それらが抱える問題に実際に取り組んで

いきたいと考えている人。

<歴史学科>

本学科の教育理念は、自らの生きる「現実」との緊張関係の中で「過去」の歴史を読み解き、混迷する現代社会にあって、常に「人間」や「社会」、そして「時代」の本質を根底から思考する能力を持った人材を育成することにある。こうした観点から、本学科は次のような人を求めている。

1. 歴史を学ぶことを通じて、「人間」の本質と可能性を探求し、新しい時代と社会とを切り開いていこうとする意欲を持った人。
2. 国際交流や国際協力等の実践的活動に関心を持ち、歴史という長期的視点から、異文化社会の本質を理解したいと考えている人。
3. 遺跡発掘調査や史料解読といった高度の技能を身につけ、より高い専門性を持って、文化財行政や歴史教育に携わりたいと考えている人。

<文学科>

本学科では、言語及び文学をはじめとするさまざまな言語文化を研究し、学ぶ。あるいは、言語と文化を生み育ててきた人間の諸活動の考察を通して、人間の「生」のありようを研究する学科であるとも言える。そのような視点から、日本語を含む多様な言語の習得を目指すとともに、鋭い感受性、柔軟な思考力、論理的な理解力を持ち、私たちを取り巻くさまざまな事象を適切に分析し、明快に表現できる人材を育成したいと考えている。以上のような観点から、本学科は次のような学生を求めている。

1. 日本を含むいろいろな国の言語、文学、文化に強い関心を持ち、それらを学ぶことを通じて人類の文化や現代社会に対する理解を深めたいと考えている人。
2. 英語をはじめとする外国語の運用能力と異文化を正しく理解する能力を身につけ、国際的な舞台で活動したいと考えている人。
3. 言語や文学に対する幅広い知識と的確な分析・表現能力を活かし、教育・研究の仕事に従事したいと考えている人。

<コミュニケーション情報学科>

高度な実践的英語力と情報コミュニケーション能力・スキルを習得して、高度情報社会で求められている、実践で力を発揮する情報コミュニケーションのエキスパート兼リーダーを養成したいと考えている。一人ひとりの学生が、自ら問題を発見し、自分の頭で知恵を絞り、言葉を紡ぎ、自主独立でありながらも他人を尊び、そして、互いに協力してアイデアを形にしていく教育を目指す。このような観点から、本学科では次のような人を求める。

1. 理論だけでなく、自らの体験を通して、新聞・放送・広告といったマスメディア、インターネットに代表される情報技術の仕組みと運用など、コミュニケーションと情報に関するさまざまな事象について考えたい人。
2. オーラルコミュニケーションを中心に、英語によるディスカッションやディベート等に対応できる高いレベルの実践的英語運用能力を習得したい人。

(出典：『平成 26 年度一般入試学生募集要項』 pp. 2-3)

文学部の入学試験の時期、募集人員、志願者数、志願倍率は以下のとおり：

資料 A-1-1-1-11：試験時期・募集人員

入試	試験時期	募集人員	計 ¹	計 ²

一般入試	前期日程	2月	117名	147名	170名
	後期日程	3月	30名		
特別入試 (推薦入試Ⅰ: 大学入試 センター試験を課さない)		11月	23名	23名	
私費外国人留学生入試		2月	各学科若干名		
文学部第3年次編入学入試		10月	4学科合計10名		

* 推薦入試と私費外国人留学生選抜試験は面接試験を課している。

* 留学生選抜試験は学部「国際交流委員会」がその業務を担当。

(出典: 『平成26年度文学部案内』 p. 41 を基に作成)

資料 A-1-1-1-12: 「一般入試」と「特別入試」の志願者数・志願倍率

学科	日程	募集人員	22年度		23年度		24年度		25年度	
			志願者数	志願倍率	志願者数	志願倍率	志願者数	志願倍率	志願者数	志願倍率
総合人間学科	前期	38	119	3.1	99	2.6	93	2.4	81	2.1
	後期	8	81	10.1	75	9.4	79	9.9	61	7.6
	推薦	9	37	4.1	26	2.9	24	2.7	25	2.8
歴史学科	前期	24	83	3.5	58	2.4	77	3.2	57	2.4
	後期	7	81	11.6	73	10.4	66	9.4	58	8.3
	推薦	4	25	6.3	11	2.8	16	4.0	25	6.3
文学科	前期	35	81	2.3	78	2.2	104	3	79	2.3
	後期	10	60	6.0	87	8.7	83	8.3	74	7.4
	推薦	5	21	4.2	27	5.4	14	2.8	26	5.2
コミュニケーション情報学科	前期	20	49	2.5	57	2.9	51	2.6	61	3.1
	後期	5	35	7.0	46	9.2	38	7.6	33	6.6
	推薦	5	31	6.2	31	6.2	26	5.2	26	5.2
学部計・平均	前期	117	332	2.8	292	2.5	325	2.8	278	2.4
	後期	30	257	8.6	281	9.4	266	8.9	226	7.5
	推薦	23	114	5.0	95	4.1	80	3.5	102	4.4

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

今後の 18 歳人口減少への対策として、倍率の高いコミュニケーション情報学科を軸とする学科編成・学科定員の改変を現在検討中である。

入学者の充足率、地域分布は以下のとおり：

資料 A-1-1-1-13：入学者の充足率

年度	入学者数	充足率
22 年度(定員 170)	187	110%
23 年度(定員 170)	177	104%
24 年度(定員 170)	182	107%
25 年度(定員 170)	177	104%

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

資料 A-1-1-1-14：入学者の九州内県別の分布

	九州地方								計
	熊本	福岡	佐賀	長崎	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	
22 年度	45	43	17	24	9	14	19	1	172
23 年度	49	52	6	16	11	14	15	0	163
24 年度	37	53	4	21	18	14	15	3	165
25 年度	38	31	16	23	15	9	26	3	161
平均	42.3 (25.6%)	44.8 (27.1%)	10.8 (6.5%)	21.0 (12.7%)	13.3 (8.0%)	12.8 (7.7%)	18.8 (11.4%)	1.8 (1.1%)	165.3 (100%)

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

資料 A-1-1-1-15：九州内外の分布

	九州地方	四国地方	中国地方	近畿地方	中部地方	関東地方	東北地方	北海道	その他	合計
22 年度	172	1	8	0	1	2	0	0	3	187
23 年度	163	1	6	2	3	0	0	1	0	177
24 年度	165	1	9	1	0	0	0	0	6	182
25 年度	161	2	5	1	1	2	0	0	5	177
平均	165.3 (91.4%)	1.3 (0.7%)	6.8 (3.8%)	1.0 (0.6%)	1.3 (0.7%)	1.0 (0.6%)	0	0.3 (0.2%)	3.5 (1.9%)	180.8 (100%)

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

すなわち、大部分は九州各県からの学生で、半数以上が県外からとなっている。これは九州内における文学部の位置づけを示唆しており、今後の受験対策を図る上でも重要である。

(中期計画番号：K13)

各学科の年次別学生数、男女別数、女性比率、定員充足率は以下のとおり：

資料 A-1-1-1-16：各学科の年次別学生数・男女別数・女性比率・定員充足率（26年5月現在）

学科・課程	入学定員	総定員	現員							女性比率
			1年次	2年次	3年次	4年次	計			
			計	計	計	計	男	女	計	
文学部全体	170	700	186	175	204	214	220	559	779	71.8%
総合人間学科	55	220	60	56	66	70	61	191	252	75.8%
歴史学科	35	140	40	35	39	38	74	78	152	51.3%
文学科	50	200	53	52	62	65	57	173	230	75.2%
コミュニケーション情報学科	30	120	33	32	36	41	26	116	142	80.7%
(学部共通)		20								

(出典：『2014 熊本大学データ集』 p. 26)

平成 22～25 年度における海外からの留学生の受け入れ状況は以下のとおりである（各在籍状態の詳細については「国際化の領域」の資料 V-1-1-2-2、V-1-1-2-3、V-1-1-2-4、V-1-1-2-5、V-1-1-2-6、V-1-1-2-7 を参照）：

資料 A-1-1-1-17：留学生受け入れ状況

在籍形態	22年度	23年度	24年度	25年度	計
私費外国人留学生（学部正規生）	3	1	4	4	12
政府派遣外国人留学生（学部正規生）			1		1
特別聴講学生（交換留学生、大使館推薦国費留学生）	36	38	46	56	176
科目等履修生	2				2
研究生（熊本県費留学生を含む）	9	9		2	20
計	50	48	51	62	211

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

教員の教育指導力向上のための体制として、個人活動評価がある。評価領域は教育、研究、社会貢献、管理運営の4領域で、教員の計画・達成状況に関して、3年目の年度末に、学部長による評価判定がある。（中期計画番号：K82）

教育のためのFD活動として「授業改善のためのアンケート調査」が実施されている。これは平成16年度から毎年実施されていたが、平成23年度から3年に1回の実施となった。結果はFD委員会の委員長によって分析がなされ、全学の委員会へ報告される。

平成21年2月に実施した「文学部の専門教育に関する調査」の「分析結果報告書」が22年1月に教務委員会ですまとめられている。主な目的は「平成17年度の文学部改組によ

り新たに構築された専門教育課程の教育効果を検証すると同時に、教育効果の面で不要と思われる科目を洗い出して、教員の負担軽減と教育の質的向上につなげることにあった。この調査結果が、文学部における第II期中期目標期間中の教育内容を検討するベースになった。

さらに FD 活動のひとつとして、教員間の授業参観を実施している。(中期計画番号：K16)：

資料 A-1-1-1-18：授業参観報告

今回の授業公開によって、教員の授業法の向上という意図は十分に達せられたものと考えられる。今回の公開授業は、学生アンケート（2012年実施）にもとづく学生の評価の高い授業の一つであった。以前教養で実施された同様の選択方式による授業公開においても評価されたように、教員の目から見ても、学生の満足度の高さは授業法及び授業内容の良さと一致することが確認できた。・・・今回のような形式の授業公開は教員にとってもさほど負担とはならず、授業法の良い点を学ぶという点で FD に資する点は大きいと考えられることから、今後も継続的に実施していきたい。

(出典：「文学部 2013 年後期授業参観実施報告」2014 年 2 月文学部 FD 委員会実施)

その他：

- ・学内で転部を希望する学生に対して門戸を開いている。
- ・「学部長と学生代表による懇談会」が毎年行われ、学生の要望を聞き、可能な限りそれに対応する体制をとっている。
- ・TA 制度がある。
- ・障害のある学生への支援体制がとられている。
- ・学生のための奨学制度がある。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 学部の教育目的を達成するための適切な教育体制がとられている(教養教育への係り度、教養教育と専門教育の連携、多様な専門領域の区分設定、年次ごとの段階的教育課程の設定など)。
 2. 学部の教育実施体制が明示・周知されている。
 3. 教員構成が明示されている。
 4. 各学科の専門領域が明示されている。
 5. 各種入試体制が整備されている。
 6. 入学者の状況が明示されている。
 7. 「文学部の専門教育に関する調査」を実施し、平成 17 年度の文学部改組により新たに構築された専門教育課程の教育効果を適切に検証している。
 8. 個人活動評価、授業改善のための FD 活動など、教員の教育指導力向上のための適切な体制がとられ、分析もなされている。
 9. TA 制度がある。
 10. 障害のある学生への支援体制がとられている。
 11. 学生のための種々の奨学制度がある。
- 以上の観点から、文学部の教育実施体制は、十分に期待される水準にあると判断する。

観点 1 - 2 教育内容・教育方法

(観点に係る状況)

卒業要件単位数及び科目区分は以下のとおり：

資料 A-1-1-2-1：文学部学生の卒業要件単位数及び科目区分

区 分		単 位 数	
教養教育	共通基礎科目（4：基セミ、ベーシック、情報 A・B） 必修外国語科目（12）	16	
	自由選択外国語科目 教養科目 社会連携科目 開放科目	18 以上	
専門教育	専 門 基 礎 科 目	14 以上	
	専 門 科 目	基盤科目	70 以上
		展開科目	
選択科目		6 以上	
計		124 以上	

(出典：『平成 26 年度学生便覧』 p. 13 の卒業要件単位数の表を基に作成)

外国語科目では 12 単位を必修とし、「初修 8+既修 4」と、「初修 6+既修 6」の 2 つの履修パターンを設定している。法学部と並んで全学で最も多い単位数を必修としているのは、文学部が多言語多文化教育を志向しているからである。また、教養科目等の必修単位数も、工学部の 22 単位について 18 単位と多い（最大で 24 単位まで可能）。そして、学系<自然>及び<生命>の授業科目から、3 授業テーマ 6 単位以上を履修することを義務づけており、文系科目だけに偏らない履修を指導している。

上掲表（資料 A-1-1-2-1）の中の「専門基礎科目」は、全学科共通の「文章作成演習」や「英語コミュニケーション」のほか、各学科の専門教育への導入になる「概論」、「概説」の授業で構成され、段階的に学習が積み上げられる構成になっている。平成 24 年度からスタートした新カリキュラムで、それまでの卒業要件単位数（教養教育 40 単位以上、専門教育 84 単位以上）を改め、教養教育 34 単位以上、専門教育 84 単位以上、残りの 6 単位以上は、教養教育、専門教育どちらの科目も選択できる「選択科目」としている。教養科目と専門科目のバランスを重視し、かつ学生の柔軟な選択を可能にするというのが趣旨である。これに合わせて、教養科目に設定していた CAP 制を廃止した：

資料 A-1-1-2-2：段階的な学習構成

教養教育		段階的に学ぶ	専門教育	
1年次	共通基礎科目(導入科目, 情報科目)／ 外国語科目 教養科目／社会連携科目／開放科目		専門基礎科目 (文学部入門, 21世紀市民学入門, 文章作成演習, 概論・概説)	
2年次	外国語科目／教養科目／ 社会連携科目／開放科目		専門基礎科目 (英語コミュニケーション／実践英語／情報処理／ キャリア支援) 基盤科目 (基礎演習／概論・概説／演習・講読) [教員免許関連科目／学芸員資格科目／ 社会調査士資格科目／認定心理士資格科目]	
3年次 4年次			展開科目 (演習・講読／特殊講義／実習・実験／課題研究／ 卒業論文作成)	
文章作成演習 概論・概説、基礎演習 演習・講読 課題研究 特殊講義 実習・実験		学術的な文章を作成する技能を育成する授業 学科およびコース単位の基礎的な講義およびゼミナール形式の授業 各コースで扱う文献・資料の解説・処理・分析方法などを習得するゼミナール形式の授業 個々の学生の関心を教員がサポートし、研究テーマの具体化を考えていくゼミナール形式の授業 教員の最新の研究成果を講義する専門性の高い授業 フィールドワークを要する領域や心理学領域で行われる実習や実験		

(出典：『2014年度文学部案内』p. 5)

学生は2年次に進級する際にコースを選択し、さらに3年次で「課題研究Ⅰ」を選択することで、卒業論文作成を目指した自分の専門分野を決め、4年次の「課題研究Ⅱ」へと継続される（平成24年度より「課題研究Ⅲ」が新設された）。

このような段階的学習体制に則って、2年次及び4年次への「進級基準」が設けられている：

資料 A-1-1-2-3：進級基準

- ・2年次への進級基準—教養教育の授業科目 16 単位以上（必修外国語科目 4 単位以上を含む）を履修していなければならない。
- ・4年次への進級基準（すなわち、卒業論文作成資格）—教養教育の授業科目 32 単位以上、専門教育の授業科目 44 単位以上（計 76 単位以上）を履修していなければならない。

(出典：『平成26年度学生便覧』p. 15)

平成25年度から各コースのカリキュラム・ポリシーが明示されている：

資料 A-1-1-2-4：各コースのカリキュラム・ポリシー

＜総合人間学科人間科学コース＞

体系性：人間科学（認知哲学・芸術学・認知心理学）の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3, 4年次には人間科学（認知哲学・芸術学・認知心理学）の専門的な授業科目と卒業論文にいたる課題達成型の授業科目を配置し、進学あるいは専門職への就職の進路に即した科目履修を保証するよう編成している。

＜総合人間学科社会人間学コース＞

体系性：社会人間学（倫理学・社会学・文化人類学）の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3，4年次には社会人間学（倫理学・社会学・文化人類学）の専門的な授業科目と課題達成型の授業科目を置き、将来の進路に即した科目履修を保証するよう編成している。

＜総合人間学科地域科学コース＞

体系性：地域科学（地域社会学・民俗学・地理空間学）の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3，4年次には地域科学（地域社会学・民俗学・地理空間学）の専門的な授業科目と卒業論文にいたる課題達成型の授業科目を配置し、進学あるいは専門職への就職の進路に即した科目履修を保証するよう編成している。

＜歴史学科歴史資料学コース＞

体系性：日本史学・考古学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：2年次より、コースを構成する履修モデルに即した基礎的な専門科目を、3・4年次には、より高度な専門的な授業科目を置き、コース内での横断的科目履修に配慮しつつ、将来の進路に即した科目履修を保証するよう編成している。

＜歴史学科世界システム史学コース＞

体系性：アジア史学・西洋史学・近現代社会思想史学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：2年次より、コースを構成する履修モデルに即した基礎的な専門科目を、3・4年次には、より高度な専門的な授業科目を置き、コース内での横断的科目履修に配慮しつつ、将来の進路に即した科目履修を保証するよう編成している。

＜文学科東アジア言語文学コース＞

体系性：日本語日本文学及び中国語中国文学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3・4年次には、日本語日本文学及び中国語中国文学の専門的な授業科目と卒業論文にいたる課題達成型の授業科目を配置し、進学あるいは専門職への就職の進路に即した科目履修を保証するよう編成している。

＜文学科欧米言語文学コース＞

体系性：欧米言語文学（英語英米文学・独語独文学・仏語仏文学）の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3・4年次には、欧米言語文学（英語英米文学・独語独文学・

仏語仏文学)の専門的な授業科目と課題達成型の授業科目を置き、将来の進路に即した科目履修を保障するよう編成している。

<文学科超域言語文学コース>

体系性：比較文学及び言語学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3・4年次には、比較文学及び言語学の専門的な授業科目と卒業論文にいたる課題達成型の授業科目を配置し、進学あるいは専門職への就職への進路に即した科目履修を保障するよう編成している。

<コミュニケーション情報学科コミュニケーション情報学コース>

体系性：コミュニケーション情報学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：コースを構成する各教育分野の専門的な授業科目を置き、将来の進路に即した科目履修を保障するよう編成している。

(出典：『平成26年度学生便覧』pp. 4-12)

各学科開講の授業科目と単位数、各コースの卒業要件単位数、履修モデルが明示されている：

資料 A-1-1-2-5：総合人間学科の授業科目及び単位数

授 業 科 目 名	単 位	授 業 科 目 名	単 位	授 業 科 目 名	単 位
専 門 基 礎 科 目	哲学概論	2			
	芸術学概論Ⅰ	2			
	心理学概論Ⅰ	2			
	倫理学概論	2			
	深層心理学概論	2			
	社会学概論Ⅰ	2			
	文化人類学概論Ⅰ	2			
	地域社会学概論Ⅰ	2			
	民俗学概論Ⅰ	2			
	地理学概論	2			

人間科学基礎演習	2	心理学特殊講義	2		
論理学 I	2	認知心理学演習 I	2		
論理学 II	2	認知心理学演習 II	2	地域科学特殊講義A	2
認知哲学概論 I	2	心理学基礎実験	2	地域科学特殊講義B	2
認知哲学概論 II	2	心理学総合実験	2	環境社会学	2
認知哲学演習 I	2	倫理学演習	2	地域環境論演習	2
認知哲学演習 II	2	人間科学上級演習	2	地域科学演習 I A	4
認知哲学特殊講義	2	倫理学応用演習	2	地域科学演習 I B	4
芸術学概論 II	2	応用倫理学概説 A	2	地域科学演習 I C	4
芸術学演習 I	2	応用倫理学概説 B	2	地域科学演習 II A	4
芸術学演習 II	2	社会学概論 II	2	地域科学演習 II B	4
芸術学特殊講義	2	社会調査法概説	2	地域科学演習 II C	4
芸術学実習 I	2	社会人間学演習	2	地域科学応用演習	2
芸術学実習 II	2	社会調査実習 I	2	民俗学概論 II	2
心理学概論 II	2	社会調査実習 II	2	地理調査法概説	2
心理学研究法 I	2	社会人間学特殊講義	2	人文地理学 I	2
心理学研究法 II	2	社会人間学応用演習	2	自然地理学 I	2
		社会学演習	2	人文地理学 II	2
		現代社会分析演習	2	自然地理学 II	2
		文化人類学概論 II	2	地理調査実習 I	2
		文化人類学演習	2	地理調査実習 II	2
		文化人類学応用演習	2	地誌学	2
		基礎統計学	2	課題研究 I	2
		地域社会学概論 II	2	課題研究 II	2
		地域社会分析演習	2	課題研究 III	2
		基層文化論演習	2	卒業論文	8
		地域文化論演習	2		

(出典：『平成 26 年度学生便覧』 p. 20)

資料 A-1-1-2-6：総合人間学科・人間科学コースの卒業要件単位表

科目区分	科目名	単位数	合計	備考
専門教育	※文章作成演習 ※英語コミュニケーション 哲学概論 芸術学概論I 心理学概論I 倫理学概論 深層心理学概論 社会学概論I 文化人類学概論I 地域社会学概論I 民俗学概論I 地理学概論 文学部入門 21世紀市民学入門 実践英語 情報処理A 情報処理B ギリシア語 ラテン語 キャリア支援 A キャリア支援 B	14	84~90	※ 必修科目 ※※ 単位互換により 他の大学又は短期 大学において修得 した単位を含むこ とができる。

専 門 科 目	基盤科目	※人間科学基礎演習 論理学I 認知哲学概論I 認知哲学概論II 認知哲学演習I 芸術学概論II 芸術学演習I 心理学概論II 心理学研究法I 心理学研究法II 認知心理学演習I	10	
	展開科目	認知哲学特殊講義 認知哲学演習II 論理学II 芸術学特殊講義 芸術学演習II 芸術学実習 I 芸術学実習II 心理学特殊講義 認知心理学演習II 心理学基礎実験 心理学総合実験 基礎統計学 人間科学上級演習 社会人間学特殊講義 ※課題研究I ※課題研究II ※課題研究III ※卒業論文	30	
	選択科目	※※ 教職科目・学芸員資格科目（一部を除く）を除く専門教育の科目及び他学部の専門科目（教職科目を除く）	30~36	

（出典：『平成 26 年度学生便覧』 p. 25）

資料 A-1-1-2-7：総合人間学科・人間科学コース・認知哲学履修モデル

科目区分	科目名（開講年次）	単位数	合計	備考
専 門 教	必修科目	文章作成演習 (1年) 英語コミュニケーション (2年)	2 2	※ 単位互換により、他の大学又は短期大学において修得した単位を含むことができる。
	専門基礎科目 (14) 選択必修科目	哲学概論を含む総合人間学科 1年次開講の概論科目 (1年)	6	
		文学部入門 (1年) 21世紀市民学入門 (1年) 実践英語 (2年) 情報処理A (2年) 情報処理B (2年) ギリシア語 (2年) ラテン語 (2年) キャリア支援A (2年) キャリア支援B (3年)	4	

育 専 門 科 目	基盤科目(10)	必修科目	人間科学基礎演習 (2年) 2
			認知哲学概論Ⅰ (2年) 2
	展開科目(30)	必修科目	認知哲学概論Ⅱ (2年) 2
			論理学Ⅰ (2年) 2
展開科目(30)	選択必修科目	認知哲学演習Ⅰ (2年) 2	
		認知哲学特殊講義 (2年/3年) 4	
展開科目(30)	選択必修科目	認知哲学演習Ⅱ (3年) 6	
		課題研究Ⅰ (3年) 2	
展開科目(30)	選択必修科目	課題研究Ⅱ (3年) 2	
		課題研究Ⅲ (2年) 2	
展開科目(30)	選択必修科目	卒業論文 (2年) 8	
		芸術学特殊講義 (2年/3年)	
展開科目(30)	選択必修科目	論理学Ⅱ (3年)	
		芸術学演習Ⅱ (3年)	
展開科目(30)	選択必修科目	芸術学実習Ⅰ (3年)	
		芸術学実習Ⅱ (3年)	
展開科目(30)	選択必修科目	心理学特殊講義 (2年/3年)	
		人間科学上級演習 (4年)	
展開科目(30)	選択必修科目	基礎統計学 (2年)	
		6	
選択科目 (30~36)	※ 教職科目・学芸員資格科目（一部を除く）を除く専門教育の科目及び他学部の専門科目（教職科目を除く）		

(注)

教養教育の単位数との合計が124単位以上になるように履修すること。

(出典：『平成26年度学生便覧』p. 39)

各年度の全授業科目の情報を提供する『授業計画書』が学生に配布される。そこでは、各授業の目標・内容・使用テキスト・参考文献・評価方法・履修上の指導・事前指導・事後指導などが明示され、厳格で一貫した成績評価の徹底が図られている（中期計画番号：K17）：

資料 A-1-1-2-8：日本語授業用サンプル

授業科目	時間割コード	単位数	担当教員	開講年次	学期	曜日・時	授業形態
西洋史概説	60040	2	中川順子	1年	後期	月・3	講義
講義題目 テーマで学ぼう西洋近代の歴史							
授業目標 1. 西洋近世・近代史に関する一般的な知識を深めます。 2. いくつかのテーマをてがかりに、西洋史研究において重要な概念や研究テーマに関連した研究動向や方法論を学びます。 3. 高校までの暗記型の世界史から考える世界史への転換を目指します。							
授業内容 本講義では、西洋史研究上の重要なまたは最新のトピックスをいくつか取り上げ、その問題についての学説史を紹介しながら、研究の現状について講義する予定です。 第1回 インTRODクシヨソ 第2回 西洋歴史学の歩み (1) 第3回 西洋歴史学の歩み (2) 第4回 大航海時代と環境史 (1) 第5回 大航海時代と環境史 (2) 第6回 大航海時代と環境史 (3) 第7回 宗教改革と民衆文化 (1) 第8回 宗教改革と民衆文化 (2) 第9回 宗教改革と民衆文化 (3) 第10回 絶対王政と儀礼 (1) 第11回 絶対王政と儀礼 (2) 第12回 接待王政と儀礼 (3) 第13回 環大西洋革命 (1) 第14回 環大西洋革命 (2) 第15回 まとめ 各テーマ3回程度に分けて講義する。受講者の理解度や授業の進捗状況によって、順番の入れ替え、内容の変更することもあります。							
キーワード 史学史、社会史、大航海時代、環境史、宗教改革、心性史、魔女狩り、民衆文化、ソシアビリテ、絶対王政、政治文化史、儀礼、市民革命、フランス革命、アメリカ独立革命、産業革命							
テキスト 講義中にプリントを配布します。 江川温『新訂 ヨーロッパの歴史』日本放送出版協会、2005年。小山哲他編『大学で学ぶ 西洋史「近現代」』ミネルヴァ書房、2011年。 中井義明他編『教養のための西洋史入門』ミネルヴァ書房、2007年。							
参考文献 各テーマの最初に適宜指示します。							
評価方法 成績評価・・・小テスト15～20%、学期末試験80～85%の総合評価。 評価基準・・・シラバスの「履修手続き要領・注意事項」「8. 成績評価」を参照してください。 評価結果の説明方法・・・授業中もしくは掲示にて日時・場所等を告知します。							
履修上の指導 世界史を既習している必要はありませんが、西洋近代史の概観について自習することが望ましいです。そのため の参考文献等は紹介します。 講義中の私語には厳しく対応します。注意が3回目に達した学生は除籍することもあるので注意してください。							
事前指導 各テーマの終了時に小テストをしますので、各自それにあわせて準備をしてください。							
事後指導 小テストを返却するので、必ず各自回収して学期末試験に活用してください。							

(出典：『平成26年度授業計画書』p.79)

資料 A-1-1-2-9 : 英語授業用サンプル

授業科目	時間割コード	単位数	担当教員	開講年次	学期	曜日・時	授業形態
米文学演習	72501	2	ギルバード・リチャード	2年	前期	木・3	Seminar.
講義題目 Melville, the Whale, and the Age of Sail I							
授業目標 Melville's novel "Moby-Dick; or, The Whale" (1851) is a remarkable work, whose stature in American literature continues to grow. "Melville challenged the form of the novel decades before James Joyce and a century before Thomas Pynchon," writes New York Times critic Kathryn Harrison. The opening line of the book, "Call me Ishmael" is among the most recognizable in Western literature. This novel is quite unique in style, containing various literary devices such as soliloquies, stage directions, asides, and a most surprising sermon (Jonah and the Whale). Due to its range of topics and sprawling style, "Moby-Dick" has a contemporary feel. Nonetheless, readers are able to view a world that remains radically different from our own, in its views of nature, culture and society. In this course, through Melville's prose, and with the addition of multimedia presentations, we will explore these perspectives and examine Melville's intentions and novelistic aspirations.							
授業内容 Key terms and concepts covered include: the significance of the sea, seafaring and seafaring technology, human rights, social consciousness, the exploitation of natural resources, and the evolution of American literature. Weekly syllabus. Weeks 1-2: Introduction to Melville's era from a seafaring perspective. Weeks 3-6: Reading of chapters 1-9. Week 7: Preparation for student presentations, reading of chapters 10-12. Week 8: Mid-term presentations, reading of chapters 13-15. Weeks 9-13: Reading of chapters 16-23. Week 14: Preparation for student reports, reading of chapters 24-26. Week 15: Report completion and final examination, reading of chapters 27-29.							
キーワード American Literature, American Romanticism, Cultural studies, Ecocriticism, Literary criticism, Literary studies.							
テキスト A printed copy of "Moby-Dick," available through Amazon (the Dover Thrift Edition is inexpensive; the Norton Critical Edition is recommended), and is required. The e-book can be downloaded freely here: gutenberg.org/ebooks/2701 .							
参考文献 Supplementary materials include "Why Read Moby-Dick?," by Nathaniel Philbrick (2011), and documentary media from various sources, including online presentations.							
評価方法 Grades will be determined by 35% class participation and quizzes, 40% homework, 25% completion of final report.							
履修上の指導 Regular attendance is important to this class.							
事前指導 Readings and audio/video media given as homework need to be thoroughly studied prior to each class; this includes a comprehensive understanding of new vocabulary.							
事後指導 Please review all materials presented in each class, and engage in self-directed independent study, in order to further comprehend class material.							

(出典 : 『平成 26 年度授業計画書』 p. 179)

文学部将来構想委員会が、平成 20～24 年度卒業生を対象に「熊本大学文学部への満足度に関する卒業生調査」を行っている :

資料 A-1-1-2-10 : 文学部への満足度に関する卒業生調査

<ul style="list-style-type: none"> ・ 報告書名 : 「熊本大学文学部への満足度に関する卒業生調査」 報告書 (2014/2/12) ・ 調査対象者 : 熊本大学文学部卒業生 (2008 年度~2012 年度卒業) (2005 年の改組以降に入学し、卒業した学生) ・ 調査票配布・回収期間 : 2013 年 8 月 13 日~9 月 30 日 ・ 調査票配布数 : 80 部/680 部 (回収率 11.8%) ・ 質問項目 : (1) 文学部への満足度 (2) 文学部で身についた能力 (3) 文学部が目指すべき方向性 (4) 大学生時代に打ち込んだもの (5) 文学部で学んだことの意義・価値 (自由記述) (6) 文学部の改善案 (自由記述)

(出典 : 平成 26 年 2 月 12 日付文学部将来構想委員会資料 : 「熊本大学文学部への満足度に関する卒業生調査」より抜粋)

質問項目の(3)と(6)は教育内容・方法と関わるので、その結果及び委員会の分析を挙げる：

資料 A-1-1-2-11：熊本大学文学部への満足度に関する卒業生調査の結果及び分析

(3) 文学部が目指すべき方向性

文学部が目指すべき方向性として、以下の二つについて尋ねた。

A. グローバル化や情報化など、時代の変化への対応力を高めるようなカリキュラムを、文学部に積極的に導入するべきだ。

B. 時代の変化に左右されず、文学部は社会的・文化的に意義のあることを追求するべきだ。結果は、

「Aに近い」及び「ややAに近い」6割強

「Bに近い」及び「ややBに近い」4割弱

と意見が分かれたが、AがBよりも多少多い。二つの方向性のバランスを取りつつ、新しい時代の要請に応える授業や教育体制をいっそう充実させる必要がある。

(6) 文学部の改善案（自由記述）

回答は、

「授業の方法及び内容」（11件）

「研究室・学科の内外での交流」（10件）

「設備（図書含む）」（6件）、「就職支援」（4件、反対意見2件）

に大別される。以下、順に主な回答内容を見ていく。

まず「授業の内容及び方法」のうち、授業方法については、実習・フィールドワーク・グループワーク・プレゼンテーション・ディベート・新聞などのメディアを使ったゼミなど、従来の講義と演習形式以外の多様な授業方法を求める声が見られた。

授業内容については、「グローバル化に対応した授業」「英語」「漫画・アニメ」などに関する授業を求める声が見られた。今後、学生の多様なニーズに柔軟に対応する教育体制が求められるだろう。

「研究室・学科の内外での交流」については、学科・コース内での交流や教員との交流を求める声もあったが（3件）、多かったのは研究室・学科の垣根を超えた交流を求める声である（7件）。これは設問が「文学部をより良くするため」のアイデアを求めるものであったために、このような結果になったと思われる。たしかに学生が学部全体への帰属意識を感じる機会は今ではあまりなく、文学部全体に対する満足度を高めるためには、学部への帰属意識を高める取り組みが有効と考えられる。

「設備（図書含む）」及び「就職支援」は、問1でも低い評価が比較的多かった項目である。設備に関しては、大学施設の夜間使用を求める声が3件見られた。とくに工学部との比較で、使用時間が異なることに納得していない人がいることがわかる。本調査の調査結果は、人的交流が満足度の重要な要因であることを示唆している。そのことを踏まえて、文法棟の22時閉館について再考してみる意義はあると思われる。また、蔵書の不足を指摘する声も見られた（2件）。

「就職支援」については、すでに熊本大学にも就職支援体制（キャリア支援課）が整備されているが、回答を見ると、学生は教員や学部事務など、より身近な人からの支援（ガイダンスや相談）を求めているようである。

(出典：平成 26 年 2 月 12 日付文学部将来構想委員会資料：「熊本大学文学部への満足度に関する卒業生調査」より抜粋)

平成 24 年度から実施の新カリキュラムで、学部共通科目の中の実践的・社会対応的科目を 10 科目に増やし、学生の実践力・社会適応力、あるいは卒業後の進路方針と関わる科目を増設した。これは、結果的に、上掲のアンケート結果・分析に対応するものとなった：

資料 A-1-1-2-12：学部共通科目の中の実践的・社会対応的科目

23 年度以前	24 年度以降
文章作成演習 I (1 年) 文章作成演習 II (2 年) 英語コミュニケーション I (2 年) 英語コミュニケーション II (2 年) 情報処理 A (2 年) インターンシップ (3 年)	文章作成演習 (1 年) 文学部入門 (1 年) 21 世紀市民学入門 (1 年) 英語コミュニケーション (2 年) 実践英語 (2 年) 情報処理 A (2 年) 情報処理 B (2 年) キャリア支援 A (2 年) キャリア支援 B (3 年) インターンシップ (3 年)

(出典：『平成 23 年度学生便覧』及び『平成 26 年度学生便覧』を基に作成)

「キャリア支援 A」は、仕事と育児を両立させている、あるいは仕事を続けながら親を介護している卒業生を講師として招いてその克服体験を語ってもらったり、弁護士にブラック企業から自分を守る法律の知識を講義してもらったりするなど、大変評判がいい授業である(「毎日新聞」2014 年 3 月 9 日付)。「キャリア支援 A・B」は「インターンシップ」へと継続される形になっている。

「インターンシップ」は、「学部協定型インターンシップ」、「大学コンソーシアム熊本インターンシップ」、「公募型インターンシップ」の 3 タイプあり、いずれを選択しても構わない：

資料 A-1-1-2-13：インターンシップ実施データ

年度	参加人数	インターンシップ先
21 年度	10	熊本市役所、熊本大学、NTT 西日本熊本支店、マイナビ熊本支店、朝日新聞社、日本生命、地域経済センター、ニュースカイホテルなど
22 年度	不開講	
23 年度	不開講	
24 年度	33	
25 年度	5	
計	48	

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

文学部将来構想委員会が平成 25 年度に実施した「卒業生調査」の中の質問項目「(2) 文学部で身につけた能力」に対する卒業生の回答で、あまり身につけなかったと思うものとして、以下のような結果が出ている：

資料 A-1-1-2-14

「リーダーシップ」(57,5%)
「市民感覚・倫理観」(40,1%)
「確かな専門知識」(30,1%)
「情報リテラシー」(28,8%)

(出典：平成 26 年 2 月 12 日付文学部将来構想委員会資料：「熊本大学文学部への満足度に関する卒業生調査」より抜粋)

このアンケートの対象となっている卒業生の在学中は、文学部の授業科目の中に上掲資料 A-1-1-2-12 の「文学部入門」、「21 世紀市民学入門」、「情報処理 B」、「キャリア支援 A・B」、がなく、「リーダーシップ」や「市民感覚・倫理観」があまり身につけなかったと感じているのは頷ける。平成 24 年度以降のそれらの科目の新設は、まさにこのマイナス面の結果を埋めるものとなっている。

平成 25 年度から「日本語教育課程」を設置した。国内外で日本語を母語としない人に日本語を教えたい人、日本を世界に発信する意欲を持っている人、国際化が進む地域社会の中で外国人との共生を考える人などを対象としている。

12 単位を超えない範囲で、他学部の授業科目履修を認めており、専門科目の中の「選択科目」として卒業要件単位に入れることができる。

より柔軟かつ学生の学習ニーズに対応した制度のひとつとして、転学部、転学科、転コースの制度がある。他学部から文学部への転部とその受け入れは毎年数件ある（文学部から他学部への転部は過去 4 年間では見られない）。学部内の転学科、転コースの例は過去 4 年間で 2 件あるのみである：

資料 A-1-1-2-15：転部・転学科・転コース

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
転部（文学部へ）	3	2	1	2	8
転学科			1		1
転コース				1	1
計	3	2	2	3	10

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

資料 A-1-1-2-16：転部の内訳

元の学部	22 年度(受け入れ学科)	23 年度(受け入れ学科)	24 年度(受け入れ学科)	25 年度(受け入れ学科)	計
工学部		2 (総合人間学科、文学科)	1 (総合人間学科)	2 (コミュニケーション情報学科)	5
法学部	2 (文学科、コミュニケーション情報学科)				2
教育学部	1 (歴史学科)				1

計	3	2	1	2	8
---	---	---	---	---	---

(出典：「文学部教務委員会資料」を基に作成)

過去4年間における転学科、転コースは2件のみで、現状の学科・コースに対する満足度の高さが分かる。全学の『第8回学生生活実態調査報告書』(平成25年)では、「学科等を代わりたい」と考えている文学部学生が7.9%となっているが(p.5)、それが実際の数値には出ていないのは、学年が進む中で、学科に対する満足度が高くなっていると考えられる。

第3年次編入学制度は平成10年度から始まったが、ここ数年の入学者数は大きく減少している：

資料 A-1-1-2-17：第3年次編入学入学者数

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
総合人間学科	4	1	0	0	5
歴史学科	0	1	0	0	1
文学科	1	0	1	0	2
コミュニケーション 情報学科	2	1	0	2	5
計	7	3	1	2	13

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

学生の主体的学習のための学習環境としては、履修モデルごとに学生研究室が設置されている。その他学生が利用できる実習室、実験室、メディア演習室、ロビー学生室、文学部図書室・閲覧室がある。学生研究室には無線LANが整備され、十分な数のパソコンが設置されている：

資料 A-1-1-2-18：各学科・履修モデルのパソコン台数

学科(学年定員)	履修モデル	台数	計 ¹	計 ²
総合人間学科(55)	認知哲学	1	49	
	芸術学	4		
	認知心理学	10		
	倫理学	3		
	社会学	5		
	文化人類学	5		
	地域社会学	4		
	民俗学	5		
	地理空間学	12		
歴史学科(35)	アジア史学	1	10	118
	西洋史学	4		
	文化史学	2		
	日本史学	2		
	考古学	1		

文学科 (50)	日本語日本文学	4	26
	中国語中国文学	4	
	英語英米文学	2	
	独語独文学	3	
	仏語仏文学	3	
	比較文学	2	
	言語学	8	
コミュニケーション情報学科 (30)	コミュニケーション情報学	33	33

(出典：「文学部自己評価委員会資料」として作成)

文学部図書室は平成 23 年度に開設され、各履修モデル専用の書架が設置され、合計約 7 万冊に及ぶ図書が配架されている。学生は専門領域の基本的な文献から専門的な文献まで、必要なときに身近に、迅速に利用することができる。

メディア演習室は平成 25 年度に 2 室に増設され、視覚教材を利用した自主学習の場として利用度が高い。ロビー学生室も、平成 26 年度に平日・休日ともに開放されるようになった。(中期計画番号：K27)

『授業計画書』には、その年度の文学部行事予定表、教員名簿、文学部カレンダー、開講授業時間割が掲載され、便宜が図られている：

資料 A-1-1-2-19：平成 26 年度文学部カレンダー

() は各曜日の授業等回数 (試験含む) —— 印は授業日
 9 月 26 日(金)から後学期授業を開始する。 ---- 印は補講日
 10 月 13 日(祝)は授業日とする。
 11 月 24 日(祝)は授業日とする。

<p>【4 月】 (16) (16) (16) (16) (16)</p> <table border="1"> <tr><td>日</td><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td></tr> <tr><td></td><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td></tr> <tr><td>⑥</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td></tr> <tr><td>⑬</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td></tr> <tr><td>⑳</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td><td>26</td></tr> <tr><td>㉗</td><td>28</td><td>㉙</td><td>30</td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>	日	月	火	水	木	金	土			1	2	3	4	5	⑥	7	8	9	10	11	12	⑬	14	15	16	17	18	19	⑳	21	22	23	24	25	26	㉗	28	㉙	30				<p>【10 月】 (16) (16) (16) (16) (16)</p> <table border="1"> <tr><td>日</td><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td></tr> <tr><td>⑤</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td></tr> <tr><td>⑫</td><td>⑬</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td></tr> <tr><td>⑱</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td><td>25</td></tr> <tr><td>㉖</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td><td>31</td><td></td></tr> </table>	日	月	火	水	木	金	土				1	2	3	4	⑤	6	7	8	9	10	11	⑫	⑬	14	15	16	17	18	⑱	20	21	22	23	24	25	㉖	27	28	29	30	31								
日	月	火	水	木	金	土																																																																																						
		1	2	3	4	5																																																																																						
⑥	7	8	9	10	11	12																																																																																						
⑬	14	15	16	17	18	19																																																																																						
⑳	21	22	23	24	25	26																																																																																						
㉗	28	㉙	30																																																																																									
日	月	火	水	木	金	土																																																																																						
			1	2	3	4																																																																																						
⑤	6	7	8	9	10	11																																																																																						
⑫	⑬	14	15	16	17	18																																																																																						
⑱	20	21	22	23	24	25																																																																																						
㉖	27	28	29	30	31																																																																																							
<p>【5 月】</p> <table border="1"> <tr><td>日</td><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td><td>2</td><td>③</td></tr> <tr><td>④</td><td>⑤</td><td>⑥</td><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td></tr> <tr><td>⑪</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td></tr> <tr><td>⑱</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td><td>23</td><td>24</td></tr> <tr><td>㉕</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td><td>30</td><td>31</td></tr> </table>	日	月	火	水	木	金	土					1	2	③	④	⑤	⑥	7	8	9	10	⑪	12	13	14	15	16	17	⑱	19	20	21	22	23	24	㉕	26	27	28	29	30	31	<p>【11 月】</p> <table border="1"> <tr><td>日</td><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>1</td></tr> <tr><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td><td>8</td></tr> <tr><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td><td>15</td></tr> <tr><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td><td>22</td></tr> <tr><td>23</td><td>㉔</td><td>25</td><td>26</td><td>27</td><td>28</td><td>29</td></tr> <tr><td>⑳</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table>	日	月	火	水	木	金	土							1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	㉔	25	26	27	28	29	⑳						
日	月	火	水	木	金	土																																																																																						
				1	2	③																																																																																						
④	⑤	⑥	7	8	9	10																																																																																						
⑪	12	13	14	15	16	17																																																																																						
⑱	19	20	21	22	23	24																																																																																						
㉕	26	27	28	29	30	31																																																																																						
日	月	火	水	木	金	土																																																																																						
						1																																																																																						
2	3	4	5	6	7	8																																																																																						
9	10	11	12	13	14	15																																																																																						
16	17	18	19	20	21	22																																																																																						
23	㉔	25	26	27	28	29																																																																																						
⑳																																																																																												
<p>【6 月】</p> <table border="1"> <tr><td>日</td><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td></tr> <tr><td>①</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td><td>7</td></tr> <tr><td>⑧</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td><td>14</td></tr> <tr><td>⑮</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td><td>21</td></tr> </table>	日	月	火	水	木	金	土	①	2	3	4	5	6	7	⑧	9	10	11	12	13	14	⑮	16	17	18	19	20	21	<p>【12 月】</p> <table border="1"> <tr><td>日</td><td>月</td><td>火</td><td>水</td><td>木</td><td>金</td><td>土</td></tr> <tr><td></td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td></tr> <tr><td>⑦</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td>13</td></tr> <tr><td>⑭</td><td>15</td><td>16</td><td>17</td><td>18</td><td>19</td><td>20</td></tr> </table>	日	月	火	水	木	金	土		1	2	3	4	5	6	⑦	8	9	10	11	12	13	⑭	15	16	17	18	19	20																																			
日	月	火	水	木	金	土																																																																																						
①	2	3	4	5	6	7																																																																																						
⑧	9	10	11	12	13	14																																																																																						
⑮	16	17	18	19	20	21																																																																																						
日	月	火	水	木	金	土																																																																																						
	1	2	3	4	5	6																																																																																						
⑦	8	9	10	11	12	13																																																																																						
⑭	15	16	17	18	19	20																																																																																						

②②	<u>23</u>	24	25	26	27	28	②①	<u>22</u>	②③	<u>24</u>	25	26	27
②⑨	<u>30</u>						②⑧	29	30	31			
【7月】							【1月】						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
			<u>1</u>	<u>2</u>	<u>3</u>	<u>4</u>	5				1	2	3
⑥	<u>7</u>	<u>8</u>	<u>9</u>	<u>10</u>	<u>11</u>	12	④	5	6	7	<u>8</u>	<u>9</u>	10
⑬	<u>14</u>	<u>15</u>	<u>16</u>	<u>17</u>	<u>18</u>	19	⑪	⑫	<u>13</u>	<u>14</u>	<u>15</u>	16	17
⑳	㉑	<u>22</u>	<u>23</u>	<u>24</u>	<u>25</u>	26	⑱	<u>19</u>	<u>20</u>	<u>21</u>	<u>22</u>	<u>23</u>	24
㉗	<u>28</u>	<u>29</u>	<u>30</u>	<u>31</u>			⑲	<u>26</u>	<u>27</u>	<u>28</u>	<u>29</u>	<u>30</u>	31
【8月】							【2月】						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
					<u>1</u>	2	①	<u>2</u>	<u>3</u>	<u>4</u>	<u>5</u>	<u>6</u>	7
③	<u>4</u>	<u>5</u>	6	7	8	9	⑧	<u>9</u>	<u>10</u>	⑩	12	13	14
⑩	11	12	13	14	15	16	⑮	16	17	18	19	20	21
⑰	18	19	20	21	22	23	⑳	23	24	25	26	27	28
㉔	25	26	27	28	29	30							
⑳													
【9月】							【3月】						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6	①	2	3	4	5	6	7
⑦	8	9	10	11	12	13	⑧	9	10	11	12	13	14
⑭	⑮	16	17	18	19	20	⑮	16	17	18	19	20	21
㉑	22	㉓	24	25	<u>26</u>	27	⑳	23	24	25	26	27	28
㉘	<u>29</u>	<u>30</u>					㉑	30	31				

(出典：『平成 26 年度授業計画書』 p. 299)

授業時間外の学習を促す制度としてオフィスアワー制度があり、各教員の名簿と一緒にその時間帯が明示されている。

ほかに、以下のようなガイダンスが行われている：

資料 A-1-1-2-20：文学部におけるガイダンス

- | | |
|----|----------------------------|
| 1月 | 各学科のコース分けガイダンス（1年次生対象） |
| 4月 | 入科式・新入生ガイダンス（新入生対象） |
| | 各コース履修ガイダンス（新2・3年次生対象） |
| | 各履修モデル履修ガイダンス（新2・3・4年次生対象） |

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

「学部長と学生代表による懇談会」が毎年実施され、学習環境その他に関して学生からの要望を直接聞く場となっている：

資料 A-1-1-2-21：学部長と学生代表による懇談会（平成 25 年度）

【要望】：建物内での携帯電話の電波を改善してほしい。

<回答>

本年度中に全学教育棟の屋上にKDDIのアンテナを建てることになっている。また、NTTドコモ

についても近い将来、同様の措置をとることになっている。

→実際に、アンテナの設置を行った。

【要望】：Wi-Fi(無線 LAN)の環境を改善して欲しい。

<回答>

学部内で調査中。全学的にも調査・対応中である。

→業者に調査を依頼し、改善の対応をした。

【要望】：オーパック検索システムで民俗学研究室が文化表象研究室と表示してあるのを訂正してほしい。

<回答>

図書館を確認する。

→図書館に問い合わせ、処理をお願いした。(その後、処理済の連絡が図書館からあった。)

【要望】：文学部図書室の本を充実してほしい。特に専門の雑誌類をお願いします。

<回答>

文学部図書室はスペースが限られているので、各学科・コース・履修モデル(分野)で選定した本を入れている。主な雑誌類は各履修モデルの学生研究室に配架してあるはずである。それを利用するように。そのほかについては、中央図書館を利用してほしい。なお、さらに追加してほしい専門雑誌等があったら、それについては、各・コース・履修モデル(分野)の担当教員へ要望を出していただきたい。

【要望】：自販機のレパートリーを増やしてほしい。

<回答>

業者に確認し、可能であれば対処したい。

→業者に頼み、対応してもらった。

【要望】：教員免許取得のための法学部開講科目と文学部開講科目が重複しないようにしてほしい。

<回答>

原則、重複しないよう時間割を作成しているが、もし重複がある場合は、担当教員へその旨連絡していただきたい。

【要望】：文学部国際奨学事業の選考では高学年が優先されているように思われる。GPA などを判断基準に、低学年も公平に選考してほしい。

<回答>

国際交流委員会で、計画書、学業成績及び面接により総合的に判断しており、高学年を優先しているということはない。(国際交流委員会に確認済み)

【要望】：メディア演習室のメディア機器をもっと充実してほしい。

<回答>

現在、メディア機器の補充を進めている。

→1室しかなかったメディア演習室を2室に増設し、各室の暗幕カーテン、スクリーン、大型モニターなどを補充、充実させた。

【要望】：1階玄関横のロビー学生室を土日も開けてほしい。

<回答>

検討します。四部局が関わる問題なので、四部局で検討するのに多少時間がかかると思う。また、ロビーの中に設置されているコピー機の問題もあるのでその対応もしなければならないが、検討のうえ、できるだけ開放するようにしたい。

→平成26年度5月から土・日・祝日開放することが決まり、現在開放している。

【要望】：就職相談室を玄関の近くに設置してほしい。現在の位置は目立たず、活用されていない。

<回答>

現在、検討中である。

→3階の奥にあった就職相談室を、学生が利用しやすい場所として、正面玄関近くの2階の応接室に移した。

【要望】：男子トイレを各階に配置してほしい。

<回答>

検討します。

→現在、なお検討中。

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)：「学部長と学生代表による懇談会」平成 25 年 12 月 5 日付)

文学部における TA 制度の実績状況は以下のとおり：

資料 A-1-1-2-22：TA 制度実績状況

年度	TA (ティーチング・アシスタント)	
	雇用者数(人)	従事時間総計
22 年度	16	574
23 年度	19	659
24 年度	18	490
25 年度	15	308
計	68	2031

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

TA を利用した具体的な授業科目は演習科目、実習科目、実験科目が中心である：

22 年度：心理学基礎実験、社会学演習、言語学演習、基礎統計学、芸術学実習、文化人類学応用演習、心理学総合実験、課題研究Ⅱ、歴史資料学演習 A、歴史資料学実習 AⅠ、社会調査実習Ⅰ、社会調査実習Ⅱ、英作文Ⅰ

23 年度：心理学基礎実験、心理学総合実験、言語学演習、文化人類学演習、課題研究Ⅰ、課題研究ⅠⅠ、基礎統計学、地域科学演習 A、日本文学演習、歴史資料学演習 A、歴史資料学実習 AⅠ、歴史資料学実習 AⅠⅠ、歴史資料学演習 BⅠ、世界システム史講読、世界システム史基礎演習、社会調査実習Ⅰ、独語学概論Ⅱ、倫理学応用演習

24 年度：心理学基礎実験、心理学総合実験、言語学演習、芸術学実習、基礎統計学、社会調査実習Ⅰ、社会調査実習ⅠⅠ、地域科学演習Ⅰ A、歴史資料学実習 AⅠⅠ、歴史資料学実習 BⅠ、世界システム史演習 C、総合演習Ⅰ、課題研究Ⅰ、課題研究ⅠⅠ、仏語学演習

25 年度：心理学基礎実験、芸術学実習、言語学演習、基礎統計学、地域科学演習Ⅰ A、日本文学演習、社会調査実習Ⅰ、社会調査実習Ⅱ、歴史資料学演習 A、歴史資料学実習 AⅠ、歴史資料学実習 AⅡ、世界システム史学演習 D、世界システム史購読 D、心理学総合実験、課題研究Ⅰ

障害のある学生への支援としては、学生から支援者を募っている。平成 23 年度に入学した聴覚障害を持つ学生 (1 名、文学部) のノート・テイカー及びパソコン・テイカーは以下のとおり：

資料 A-1-1-2-23：ノート・テイク及びパソコン・テイク学生数 (学部別)

	平成 23 年度			平成 24 年度			平成 25 年度		
	前学期	後学期	実人数	前学期	後学期	実人数	前学期	後学期	実人数
文学部	6	4	6	5	5	9	3	6	6
教育学部	6	5	6	7	6	7	7	6	9
法学部		1	1	1	1	1	3	8	8
理学部		2	2	1	1	1			
医学部									

薬学部									
工学部		1	1	2	1	2	1		1
専攻科				1	1	1			
教育学研究科							1	1	1
社会文化科学研究科									
自然科学研究科							1	1	1

(出典：「学生支援部・学務ユニット・学生支援チーム・学生相談室」資料)

「奨学制度」としては「入学料・授業料免除」、「日本学生支援機構」その他がある(中期計画番号：K28)：

資料 A-1-1-2-24：入学料・授業料免除者数及び免除額

年度	部・研究科等	入学料(円)	授業料(円)	区分	申請者数	全額免除者数	一部(半額)免除者数	免除総額合計(円)	
22年度	文学部	282,000	535,800	入学免除者	0	0	0	0	
				授業料免除者	前期	111	14	60	11,787,600
					後期	109	1	88	12,055,500
23年度	文学部	282,000	535,800	入学免除者	0	0	0	0	
				授業料免除者	前期	121	17	61	12,725,250
					後期	129	10	84	13,930,800
24年度	文学部	282,000	535,800	入学免除者	0	0	0	0	
				授業料免除者	前期	131	23	59	14,064,750
					後期	129	16	77	14,600,550
25年度	文学部	282,000	535,800	入学免除者	0	0	0	0	
				授業料免除者	前期	132	34	55	16,475,850
					後期	150	28	82	18,485,100

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 A-1-1-2-25：日本学生支援機構採用数及び貸与額

年度	学部・研究科等名	奨学金団体	在学採用申請者数(人)	奨学金給付区分	在学採用数	予約採用数	貸与額(円)
22年度	文学部	日本学生支援機構	52	第一種	12	18	3,4,5,5.1万から選択
				第二種	22	44	3,5,8,10,12万から選択
				併用	1	8	
		その他	3	1	5		
23年度	文学部	日本学生支援機構	43	第一種	19	23	3,4,5,5.1万から選択
				第二種	16	53	3,5,8,10,12万から選択
				併用	1	3	
		その他	4	4			
24年度	文学部	日本学生支援機構	37	第一種	20	18	3,4,5,5.1万から選択
				第二種	13	51	3,5,8,10,12万から選択
				併用	3	10	
		その他	5	4	0		
25年度	文学部	日本学生支援機構	19	第一種	14	18	3,4,5,5.1万から選択
				第二種	3	41	3,5,8,10,12万から選択
				併用	2	6	
		その他	5	4	0		

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

1. 卒業要件単位表、段階的に編成された教育課程が明示されている。
 2. 平成 25 年度の『学生便覧』から、各学科・コースのカリキュラム・ポリシーが明確に示され、整備改善が見られる。
 3. 年度ごとの授業計画書が作成され、周知されている。
 4. 平成 25 年実施の文学部将来構想委員会による「卒業生調査」及び分析が適切になされている。
 5. 平成 24 年度から実施の新カリキュラムで、実践的・社会対応的科目を 10 科目に増やし、社会のニーズ、学生の実践力、社会適応力養成に対応している。
 6. 学内で転部を希望する学生に対しても柔軟に門戸を開き、実績が出ている。
 7. 学習スペースの確保、情報機器・無線 LAN の整備など、学生の学習環境が適切に整備されている。
 8. 種々のガイダンスが適切に実施されている。
 9. 「学部長と学生代表による懇談会」が毎年行われ、学生の要望に対する学部側の対応も適切で、学生の要望をよく汲み上げ、実際の改善にいたっている。
 10. TA 制度が活発に運用されている。
 11. 障害のある学生への支援体制が整っており、文学部学生が積極的に支援活動に参加している。
 12. 種々の奨学制度が活発に運用されている。
- 以上の観点から、文学部における教育内容・方法の具体的な活動は非常に活発であり、期待される水準を上回ると判断する。

分析項目 II 教育成果の状況

観点 2-1 学業の成果

(観点に係る状況)

4 年間の学士課程の成果としての学位授与方針が、平成 25 年度から明示されている：

資料 A-2-2-1-1：学部の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）

文学部は、学士課程教育において、「幅広く豊かな教養と人文・社会科学に関する確かな専門的知識を有し、創造的な知性を持って自ら課題を発見し、解決する実践的な能力及び 21 世紀を生きる人間に必要なグローバルな視野と市民的公共心を備え、社会に貢献できる」人材の育成を目的としている。このことを踏まえ、本学が定める学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を修得した者に、本学部の学位を授与する。

(出典：『平成 26 年度学生便覧』 p. 4)

資料 A-2-2-1-2：各コースの学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）

【総合人間学科】
 <人間科学コース>

本コースは、学士課程教育において、「人間や人間関係についての知見を持ち、目先の利害にとらわれず、教養ある批判的判断のできる人材の育成」を目標とするとともに、それぞれの履修モデルの特性を活かして、「論理的判断力(認知哲学)、感受力・美的判断力(芸術学)、実証的判断力(認知心理学)を養い、問題解決への柔軟で大胆な発想をすることができ、状況に応じた行動がとれる」人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜社会人間学コース＞

本コースは、学士課程教育において、「社会的存在としての人間」という認識から出発し、現代における人間と人間を取り巻く社会的現象にかかわる人材の育成」を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜地域科学コース＞

本コースは、学士課程教育において、「地域社会の生活主体としての人間」という観点から、人間とその地域的環境(社会文化的・自然的環境)について多面的・有機的に理解を深め、現代の地域社会が抱える諸問題の解決に実践的に取り組む人材の育成」を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

【歴史学科】

＜歴史資料学コース＞

本コースは、学士課程教育において、「文献史料や考古資料を的確な手法・技術で調査・分析する作業を通じて過去の歴史を読み解き、さらに人間や社会について真摯に考察するとともに、現代を含めた時代の本質を正しく理解したうえで現代社会の諸問題に対応し、発言できる」人材の育成を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜世界システム史学コース＞

本コースは、学士課程教育において、「史資料の総合的分析力に依拠した論理実証力を基礎に、それぞれの履修モデルの特性を生かして、東アジア社会(アジア史学)と欧米社会(西洋史学)の歴史展開や両社会相互関与の体系的理解力、日本・欧米における近現代社会思想の批判的・相対的検証力(文化史学)」を養い、「アジアと欧米の歴史展開や社会思想を、確かな専門知識・理論をもとに地域横断的かつ総合的に分析・討論することを通じて、異なる社会や文化に対する理解を深め、広い視野と柔軟な思考力をもって現代社会の諸問題に対応し、発言できる」人材の育成を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

【文学科】

＜東アジア言語文学コース＞

本コースは、学士課程教育において、東アジアの伝統文化や現代的課題に対して幅広い目配りのできる豊かな専門的知識と理解力を習得し、東アジアの言語や文学、文化に関する諸問題について、新たな課題を発見して解決しその成果を的確に表現できる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜欧米言語文学コース＞

本コースは、学士課程教育において、英語、ドイツ語、フランス語の運用能力を高めるとともに、各言語圏の文学、文化、社会についての知見を幅広く獲得し、自国の文化や社会制

度に対する相対的な視点を持つことのできる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜超域言語文学コース＞

本コースは、学士課程教育において、人類の言語文化及びその精華である文学作品の多様な諸相に対する理解力と、その相互作用を複眼的・国際的に考察する視野を持ち、人類の言語や文学に関する専門的な諸問題について新たな課題を発見して解決し、その成果を的確に表現できる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

【コミュニケーション情報学科】

＜コミュニケーション情報学コース＞

本コースは、学士課程教育において、高次のコミュニケーション能力、外国語運用能力、そしてメディア運用能力を養成することで、情報を読み解き、発信できる能力を高め、グローバル化・情報化が進む現代社会において先導的役割を担いうる自発性と創造性に優れた人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

(出典：『平成 26 年度度学生便覧』 pp. 4-12)

この学位授与方針に沿って、各コースが目指す「学習成果」が掲げられている（中期計画番号：K14）：

資料 A-2-2-1-3

＜総合人間学科・人間科学コース＞

【豊かな教養】

・文化や社会、自然や生命に関する高い関心と一般的理解を持っている。

【確かな専門性】

・人間科学(認知哲学・芸術学・認知心理学)の基本的理念・概念について説明することができる。

・人間科学(認知哲学・芸術学・認知心理学)における研究手法を使用することができる。

・人間科学(認知哲学・芸術学・認知心理学)の最新動向について様々な情報源から自律的に学ぶことができる。

【創造的な知性】

・人間科学(認知哲学・芸術学・認知心理学)に関する知見を用いて、現実の課題を見出し、解決方法を提案することができる。

【社会的な実践力】

・柔軟に発想し、かつ物事を論理的に筋道立てて批判的に検討することができる。

【グローバルな視野】

・外国語の文献を読解することができる。

・異なる社会や文化、異文化交流や国際交流に関心と深い理解を持ち、広い視野から物事を理解できる。

【情報通信技術の活用力】

・インターネットを活用して情報を収集し、その的確な分析、コミュニケーションを行うことができる。

【汎用的な知力】

・相手に分かりやすく、相手の関心を惹きつける話し方で、情報や意見を伝えることができ

る。

- ・明晰な理論の筋道と説得力のある表現を用いて、文章を作成することができる。

<総合人間学科・社会人間学コース>

【豊かな教養】

- ・文化や社会、自然や生命に関する高い関心と一般的理解を持っている。

【確かな専門性】

- ・社会人間学(倫理学・社会学・文化人類学)の基本的理論・概念について説明することができる。
- ・社会人間学(倫理学・社会学・文化人類学)における研究手法を使用することができる。
- ・社会人間学(倫理学・社会学・文化人類学)の最新動向について様々な情報源から自律的に学ぶことができる。

【創造的な知性】

- ・社会人間学(倫理学・社会学・文化人類学)に関する知見を用いて現実の課題を見出し、解決方法を提案することができる。

【社会的な実践力】

- ・柔軟に発想し、かつ物事を論理的に筋道立てて批判的に検討することができる。

【グローバルな視野】

- ・外国語の文献を読解することができる。
- ・異なる社会や文化、異文化交流や国際交流に関心と深い理解を持ち、広い視野から物事を理解できる。

【情報通信技術の活用力】

- ・インターネットを活用して情報を収集し、その的確な分析、コミュニケーションを行うことができる。

【汎用的な知力】

- ・相手に分かりやすく、相手の関心を惹きつける話し方で、情報や意見を伝えることができる。
- ・明晰な理論の筋道と説得力のある表現を用いて、文章を作成することができる。

<総合人間学科・地域科学コース>

【豊かな教養】

- ・文化や社会、自然や生命に関する高い関心と一般的理解を持っている。

【確かな専門性】

- ・地域科学(地域社会学・民俗学・地理空間学)の基本的理論・概念について説明することができる。
- ・地域科学(地域社会学・民俗学・地理空間学)における研究手法を使用することができる。
- ・地域科学(地域社会学・民俗学・地理空間学)の最新動向について様々な情報源から自律的に学ぶことができる。

【創造的な知性】

- ・地域科学(地域社会学・民俗学・地理空間学)における知見を用いて現実の課題を見出し、解決法を提案することができる。

【社会的な実践力】

- ・柔軟に発想し、かつ物事を論理的に筋道立てて批判的に検討することができる。
- ・社会に参加し意欲的に適応でき、公共心を持って行動できる。

【グローバルな視野】

- ・外国語の文献を読解することができる。
- ・異なる社会や文化、異文化交流や国際交流に関心と深い理解を持ち、広い視野から物事を理解できる。

【情報通信技術の活用力】

・インターネットを活用して情報を収集し、その的確な分析、コミュニケーションを行うことができる。

【汎用的な知力】

・相手を理解し、相手に分かりやすく、相手の関心を惹き付ける話し方で、情報や意見を伝えて、よい対人関係を作ることができる。

・明晰な理論の筋道と説得力のある表現を用いて、文章を作成することができる。

・常に向上心を持って自己開発能力、キャリア開発能力を発揮することができる。

<歴史学科・歴史資料科学コース>

【豊かな教養】

・歴史や文化・社会に対する高い関心と一般的理解を持っている。

・自然・生命に関する基本的な知識及び関心を持っている。

【確かな専門性】

・歴史学の基本的な理論・概念について理解し、説明することができる。

・日本史学・考古学の専門的な知識や理論、概念について理解し、説明することができる。

・日本史学専攻者については古文書・古記録を整理・読解・分析する専門的な能力を持つことができる。

・考古学専攻者については遺跡・遺構・遺物を調査・整理・分析する専門的な能力を持つことができる。

・日本史学・考古学研究に必要な最新動向や情報を、主体的に調査・収集ができる。

・日本史学・考古学に関連した専門性の高い学術論文を読解することができる。

・日本史学・考古学に関する確かな専門性に基づき、柔軟な発想と論理的思考、説得力のある表現を用いて学術的文章を作成することができる。

【創造的な知性】

・歴史学全般及び日本史学・考古学の知識や思考方法を参照しつつ、自ら課題を発見し、現代社会が直面する諸問題に対して、発言や議論、解決方法の提示をすることができる。

【社会的な実践力】

・柔軟かつ論理的な思考力を基盤に、過去の社会との比較を通じて、現代社会を批判的に検証し、相対化することができる。

・文化財の保護・活用及び博物館活動に寄与することができる。

【グローバルな視野】

・異なる社会や文化、異文化交流や国際交流に関心と深い理解を持ち、広い視野から物事を理解できる。

【情報通信技術の活用力】

・インターネットを活用して情報を収集し、その的確な分析、コミュニケーションを行うことができる。

【汎用的な知力】

・相手にわかりやすく、相手の関心を引きつけるような話し方で、意見や情報を伝え、他者と議論やコミュニケーションをすることができる。

・豊かな表現力と明解な論理・構成力を用いて、説得力のある明晰な文章を作成することができる。

・共通の課題に対してチームで取り組み、共同作業、議論によって、問題解決を図ることができる。

<歴史学科・世界システム史学コース>

【豊かな教養】

・歴史や文化・社会に対する高い関心と一般的理解を持っている。

・自然・生命に関することに関心と基本的な理解・知識を持っている。

【確かな専門性】

- ・歴史学の基本的な理論・概念について理解し、説明することができる。
- ・歴史学(アジア史・西洋史・近現代社会思想史)の専門的な知識や理論、概念について理解し、説明することができる。
- ・歴史学(アジア史・西洋史・近現代社会思想史)における研究手法を使用することができる。
- ・歴史学(アジア史・西洋史・近現代社会思想史)研究に必要な最新動向や情報を、主体的に調査・収集ができる。
- ・歴史学(アジア史・西洋史・近現代社会思想史)に関連した抽象度の高い学術論文を読解することができる。
- ・歴史学(アジア史・西洋史・近現代社会思想史)研究に必要な外国語文献(英語、漢籍、中国語等)を読解できる。

【創造的な知性】

- ・歴史学(アジア史・西洋史・近現代社会思想史)の知識や思考方法を参照しつつ自ら課題を発見し、現代社会が直面する諸問題に対して、発言や議論、解決方法の提示をすることができる。

【社会的な実践力】

- ・柔軟かつ論理的な思考力を基盤に、過去の社会との比較を通じて、現代社会を批判的に検証し、相対化することができる。
- ・市民社会の一員として、人権問題や社会的マイノリティにかかる問題に理解と関心を持つことができる。

【グローバルな視野】

- ・異なる社会や文化、異文化交流や国際交流に関心と深い理解を持ち、広い視野から物事を理解できる。

【情報通信技術の活用力】

- ・インターネットを活用して情報の収集や的確な分析、コミュニケーションを行うことができる。

【汎用的な知力】

- ・相手にわかりやすく、相手の関心を引きつけるような話し方で意見や情報を伝え、相手と議論やコミュニケーションをすることができる。
- ・豊かな表現力と明解な論理・構成力を用いて、説得力のある明晰な文章を作成することができる。
- ・共通の課題に対してチームで取り組み、共同作業(議論)によって、問題解決を図ることができる。

<文学科・東アジア言語文学コース>

【豊かな教養】

- ・文化・社会に関する一般的な理解と関心を持っている。
- ・自然・生命に関する基本的な理解と広い視野を持っている。

【確かな専門性】

- ・東アジアの言語や文学、文化の基本的理念・概念について説明することができる。
- ・東アジアの言語や文学、文化における研究手法を使用することができる。
- ・東アジアの言語や文学、文化の最新動向について様々な情報源から自律的に学ぶことができる。

【創造的な知性】

- ・東アジアの言語や文学、文化に関する知見を用いて、現実の課題を見出し、解決方法を提案することができる。

【社会的な実践力】

・柔軟に発想し、かつ物事を論理的に筋道立てて批判的に検討することができる。

【グローバルな視野】

・外国語の文献を読解することができる。

【情報通信技術の活用力】

・インターネットやeメールを含むITを使用し、情報の収集・分析や交換を行うことができる。

【汎用的な知力】

・相手に分かりやすく、相手の関心を惹きつける話し方で、情報や意見を伝えることができる。

・明晰な理論の筋道と説得力のある表現を用いて、文章を作成することができる。

<文学科・欧米言語文学コース>

【豊かな教養】・文化・社会に関する一般的な理解と関心を持っている。

・自然・生命に関する基本的な理解と広い視野を持っている。

【確かな専門性】

・欧米言語文学(英語英米文学・独語独文学・仏語仏文学)の基本的理論・概念について説明することができる。

・欧米言語文学(英語英米文学・独語独文学・仏語仏文学)における研究手法を使用することができる。

・欧米言語文学(英語英米文学・独語独文学・仏語仏文学)の最新動向について様々な情報源から自律的に学ぶことができる。

【創造的な知性】

・欧米言語文学(英語英米文学・独語独文学・仏語仏文学)を応用して現実の課題を見出し、解決方法を提案することができる。

【社会的な実践力】

・柔軟に発想し、かつ物事を論理的に筋道立てて批判的に検討することができる。

【グローバルな視野】

・外国語の文献を読解することができる。

【情報通信技術の活用力】

・インターネットやeメールを含むITを使用し、情報の収集・分析や交換を行うことができる。

【汎用的な知力】

・相手に分かりやすく、相手の関心を惹きつける話し方で、情報や意見を伝えることができる。

・明晰な理論の筋道と説得力のある表現を用いて、文章を作成することができる。

<文学科・超域言語文学コース>

【豊かな教養】

・文化・社会に関する一般的な理解と関心を持っている。

・自然・生命に関する基本的な理解と広い視野を持っている。

【確かな専門性】

・人間のコミュニケーション能力に関する基本的理解と広い視野を持っている。

・比較文学・言語学・外国語教育学の基本的理論・概念について説明することができる。

・比較文学・言語学・外国語教育学における研究手法を使用することができる。

・文学・言語学・外国語教育学の最新動向について様々な情報源から自律的に学ぶことができる。

【創造的な知性】

・比較文学・言語学・外国語教育学における現実の課題を見出し、解決法を提案することができる。

【社会的な実践力】

- ・柔軟に発想し、かつ物事を論理的に筋道立てて批判的に検討することができる。
- ・社会に参加し意欲的に適応でき、公共心を持って行動できる。

【グローバルな視野】

- ・複数の外国語による文献を読解することができる。
- ・外国語による簡単なプレゼンテーションを行うことができる。

【情報通信技術の活用力】

・インターネットやeメールを含むITを使用し、情報の収集・分析や交換を行うことができる。

【汎用的な知力】

- ・相手を理解し、相手に分かりやすく、相手の関心を惹き付ける話し方で、情報や意見を伝えて、よい対人関係を作ることができる。
- ・明晰な理論の筋道と説得力のある表現を用いて、文章を作成することができる。
- ・常に向上心を持って自己開発能力、キャリア開発能力を発揮することができる。

<コミュニケーション情報学科・コミュニケーション情報学コース>

【豊かな教養】

- ・人や社会、自然や生命に対する幅広くかつ深い関心を持っている。

【確かな専門性】

- ・コミュニケーション情報学の基本的な理論及び概念を説明できる。
- ・コミュニケーション情報学における研究手法を使用することができる。
- ・コミュニケーション情報学の最新動向について自律的に学ぶことができる。
- ・コミュニケーションに関連する身近な問題に関心を持ち、課題を抽出し、具体的な解決法を提案できる。
- ・文献や記事を読んで内容を理解し、論点を論理的かつ簡潔に要約できる。
- ・調査の企画、調査対象者との交渉、実行、報告書作成など一連の作業ができる。
- ・相手に分かり易く、平易な論理で、相手の関心に沿った話し方で情報や意見を伝えることができる。

【創造的な知性】

- ・複眼的・多面的な視点で柔軟に発想し、かつ物事を論理的に筋道立てて批判的に検討できる。
- ・社会で生じる諸問題に関する理解と関心を持ち、課題を抽出し、具体的な解決法を提案できる。

【社会的な実践力】

- ・自主的に社会や組織に積極的に参加し、自分の位置を見つけ、貢献できる。
- ・共通の課題に対してグループで取り組み、互いの意見を尊重しながら、問題を解決できる。
- ・明晰な論理と説得力のある表現を用いて、ビジネス現場で通用する文章を作成できる。

【グローバルな視野】

- ・日本文化に対する理解を深めるとともに、異文化理解や異文化交流、国際交流に関心を持ち、広い視野から物事を理解できる。
- ・国際社会で生じる諸問題に関する基本的な理解と関心を持っている。
- ・英語の文献やニュース、記事を読解し、情報の収集・分析に足る基本的な英語運用能力がある。
- ・英語で基本的な対話やプレゼンテーション、ディベートができる。

【情報通信技術の活用力】

- ・ビジネス現場で要求されるレベルで、情報通信機器及びソフトを使いこなすことができる。
- ・最新の情報メディア技術を活用し、情報の収集・分析、編集・加工、発信・交換ができる。
- ・最新の情報メディア技術を活用し、文字に加え音声・映像による情報の作成、発信ができる。

【汎用的な知力】

- ・ロジカルシンキング、クリティカルシンキングができる。
- ・向上心を常にもち、自発的に自らの能力及びキャリアの開発ができる。

(出典：『平成 26 年度学生便覧』 pp. 4-12)

平成 23 年度に、学習成果と授業の対応関係を示したカリキュラムマップを作成し、平成 24 年度にその検証作業を行った。

学習成果の達成状況を、成績評価の状況、GPA の推移、学年進級状況、学位授与数、留学生の学位授与数、学位論文（卒業論文）、資格取得状況、TOEIC スコア状況、学業成績優秀被表彰者の観点から検証する：

資料 A-2-2-1-4：成績評価の状況（分布）

年度	秀	優	良	可	合格	不可	X
22年度	1434	3820	2583	979	0	355	942
23年度	1271	3949	2267	839	0	311	961
24年度	1424	4025	2192	907	163	296	957
25年度	1488	4057	2285	901	280	253	936

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 A-2-2-1-5：GPA の推移

年度	GPA
平成 22 年度	2.559
平成 23 年度	2.590
平成 24 年度	2.600
平成 25 年度	2.619
平均	2.592

*条件は、文学部の学部学生が受講した全ての科目、教養、他学部聴講、教職関連科目も含む

*成績対象評語は、「秀」「優」「良」「可」「不可」で「H」「S」「X」「Null」「認定」「合格」「不合格」は対象外

*成績換算は、「秀」4P、「優」3P、「良」2P、「可」1P、「不可」0P で計算

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

学生の学習成果状況を最もよく示す GPA は年度ごとに上がっており、学生の学習意欲及び文学部における教育の成果のひとつの証左となっている。

資料 A-2-2-1-6：学年進級状況（留年者・休学者・退学者・除籍者の状況）

年度	区分	1年次		2年次		3年次		4年次		合計	
		男	女	男	女	男	女	男	女	合計 ¹	合計 ²
22年度	休学者数	0	2	0	1	2	8	4	9	26	92
	退学者数	1	2	1	0	0	3	1	1	9	
	除籍者数	0	0	0	0	0	0	1	0	1	
	留年者数	5	2	0	0	4	8	15	22	56	
23年度	休学者数	2	1	0	0	4	5	4	9	25	94
	退学者数	0	0	1	0	2	2	2	1	8	
	除籍者数	0	0	1	0	1	0	1	0	3	
	留年者数	5	2	0	0	9	9	16	17	58	
24年度	休学者数	3	1	1	0	6	7	4	7	29	77
	退学者数	0	1	0	0	4	1	1	0	7	
	除籍者数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	留年者数	5	0	0	0	8	3	14	11	41	
25年度	休学者数	0	0	1	0	6	5	4	7	23	68
	退学者数	1	0	0	0	1	0	1	0	3	
	除籍者数	0	0	0	0	0	1	0	1	2	
	留年者数	2	0	0	0	8	7	13	10	40	
計		24	11	4	1	55	59	81	95	331	331

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

留年者・休学者・退学者・除籍者の数は、平成24年度・25年度に向かって減少傾向にある。

資料 A-2-2-1-7：学位授与数

年度	学位名称	学士	合計
22年度	学士（文学）	191	734
23年度	学士（文学）	177	
24年度	学士（文学）	196	
25年度	学士（文学）	170	

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

学位論文の審査は、履修モデルに属する教員全員によって、論文審査と面接審査が行われ、協議の上、評価が決定される。

資料 A-2-2-1-8：卒業論文題目（一部）

<p>【平成22年度】 <総合人間学科> 視覚的注意と非注意的盲目について/在日朝鮮人・韓国人文学の光と影：金城一紀の作品から考える「在日」というアイデンティティ/左右反転視野への短期的順応とその内的過程について/自閉症児の音楽療法—その有効性に関する—考察—顔識別における他人種効果/ UEDA-CHOの世界へ：植田正治作品の研究/人間の共同性と言語行為/現代社会における青年のアイデンティティ形成について/生物多様性の保全のすすめ方：人間中心主義と人間非中心主義の対立の再考察/死から考える共同体—新疆ウイグル自治区のケースにおいて/昔話に対する深層心理学的解釈：河合(ユング派)と北山(フロイト派)の比較を中</p>

心に/現代家族の育児戦略/アメリカ映画の中の日本人像/同性愛者に関する社会学的一考察/地域社会における華僑文化のあり方

<歴史学科>

戊辰戦争と長州藩/九州出土の石枕について/幕末京都における肥後藩の政治拠点/熊本県出土の石帯についての考察/南北朝の動乱と阿蘇氏/ 明治維新时期における、支藩とその解体/陳山遺跡についての考察/室町末・戦国初期の紛争解決と在地諸階層/弥生・古墳時代九州におけるコトの研究/中国の異民族支配/ 菊竹六鼓研究/日本ファシズムと会津精神/近代中国の外交政策/ 18世紀パリにおけるソシアビリテと近隣共同体/17世紀ヴェネツィアにおけるオペラと社会/ 18世紀イギリスにおける性と出産/中世ヨーロッパの都市と環境/ 筑前竹槍一揆にみる民衆の差別意識/アルザスにおける地域主義と国民統合/明初の対富民政策/「主婦論争」にみる家族像/19世紀アメリカにおける馬と都市社会

<文学科>

夏目漱石俳句研究/古典文学の中の「障害者」/中国における水の二面性と両性要素/仮名字母の研究/人称代名詞の研究/古典朝文学における女性像/日本文学に描かれる差別問題/芥川龍之介研究/*The Picture of Dorian Gray: Wilde's Views in Text Structure/ Aspects of Self-reflection in Sula by Toni Morrison/ベルナルダン・ド・サン＝ピエール『ポールとヴィルジニー』研究/D.H. Lawrence's View of Religion in Lady Chatterley's Lover/ Perfective Aspect in British English/ The Psychology of Alcohol in Selected Raymond Carver Short Stories/ Mother-daughter Relationship in Toni Morrison's Beloved/The Usage of the Verb 'get' in British English/ドイツ語語彙研究：語の成り立ちと構成原理を探る/八代方言の推量形式の世代変化について*

<コミュニケーション情報学科>

週刊誌における皇室報道のジェンダー分析研究/日本人の外国人観：広告における白人・黒人のステレオタイプ/児童学習塾における自己効力感と児童の学習モチベーション/「マスメディアのフレーム分析」：チベット・ウイグル問題をめぐる報道を例に/ニコニコ動画における匿名集団の集合行為/ジェンダーから見る日本における成人女性の ADD・ADHD/メディアがつくる「ヒーロー」イメージにみる日本人の嗜好/カラオケボックス空間に見る若者のコミュニケーション/創作絵本に見るコミュニケーションの表現についての研究/*The Starbucks culture in the era of globalization: Analysis of Starbucks in Shanghai as an example/ Japanese university students' ability to interpret cross-cultural communicative breakdown/世代の変化に見る現代若者の特徴：世代間の違いに対応するためには*

【平成 23 年度】

<総合人間学科>

母語・非母語の単語認知に及ぼす老視の影響/音楽訓練が日本語促音知覚に及ぼす影響/町おこしから見る日本のキャラクター文化/色とぼかしが見えの奥行きに及ぼす影響/虚記憶に及ぼす単語の熟知価と表記の親近性/音声と形とのイメージ共通性について/ベトナム戦争とアメリカ音楽/「ライブ」の社会学/ 日本における神と人の関係の変化とその要因/刺青の両義性：明治期における刺青のあり方/ジミ・ヘンドリックスとエレクトリック・サウンド/依存症に関する考察：依存症・共依存・ACについて/大学生の食生活－社会関係性の視点から－/高齢者介護と家族～施設入所における「壁」とは～/『モエ』集団の地域再統合機能の研究：えびの市モエ集団と役割の機能/天然記念物と観光資源：出水市荒崎のツルを事例に/団地観の変遷と団地生活の実態

<歴史学科>

長州再征期における肥後藩の藩政内情/明治初期における司法省改革と江藤新平/「教育令」期の教育行政と民衆の動向/九州における古墳副葬鉄鏃の研究/「学校教練」の史的研究：一九二〇年代の熊本県を中心に/九州における近世六道銭の研究/中世的職人組織の特質とその変容/九州の両頭金具に関する研究/中世ヨーロッパにおける聖遺物崇敬/18世紀パリの近隣コミュニティと政治文化/後漢の宦官/中世後期イタリアにおける教育：人文主義教育と商人教育の比較/家庭に参加する父親たち：19世紀アメリカにおける父性の再検討/近世イングランドにおけるインフォーマル・サポート/ヴィクトリア期ロンドンにおけるミドルクラスの女性とビジネス/ヴィクトリア朝イングランドにおける男らしさと家庭/林芙美子研究

<文学科>

移動動詞の研究/ 翻案小説における太宰治の思想：お伽草紙を中心に/六朝志怪小説における異境—『搜神記』を中心として/『和泉式部日記』の研究/老舎研究—『茶館』を中心として—/『今昔物語集』における「鬼」について/「ら抜き言葉」と九州方言/A Study on J. K. Rowling's *Harry Potter* Series: Viewed from the Idea of Fantasy/ A. シュティフターとドイツ的リアリズム/Creation of Fictional Reality: Daniel Defoe's Narrative Technique in *Robinson Crusoe*/ How Capote's Depiction of Sanctuary Reflects Holly's Liberty in *Breakfast at Tiffany's*/ ロンサール *Sur la mort de Marie* について：死の諸相/ The Existence of the Author in Truman Capote's *In Cold Blood* as a Nonfiction Novel/ グリム童話における主人公の成長について/「大庭みな子『山姥の微笑』にみる女性観」

<コミュニケーション情報学科>

現代若者女子における「美」の重要性—コミュニケーションツールとしての美容行動—/ SNS 利用者の自己開示と対人不安に関する研究/プロジェクト・マネジメント手法の就職活動への応用における有用性/現代のマスメディアにみる「結婚」の語られ方—キャサリン妃の結婚報道を対象に—/知り合い系コミュニケーションにおける若者の友人関係/帰属意識が低下する職場にみる共感のネットワークの縮小/限定商品の「限定」に意味はあるのか—会員制サービス分析を中心に—/北九州餓死事件報道における「貧困」の語られ方/ファン集団における結束力とファン対象との心理的距離の関係性/中国人観光客を熊本に招致する戦略について/米国のテレビドラマにみる選択する家族とその代償/『学習指導要領』に基づく中学校英語教育における課題と実践的解決法：英語教育に見る中—ギャップの防止と克服

【平成 24 年度】

<総合人間学科>

古い建築物とアートが導く都市・地域再生に関する研究/高齢者を対象としたメンタルローテーションにおける姿勢の影響/ 公共文化施設の音楽活動による地域活性化/人工内耳装用者における音声知覚中の視覚情報の影響/少女マンガに見る人物像に関する—考察/人間の共同性と言語行為：われわれはどのように規則に従っているのかを手掛かりに/住宅の社会学/日本の動物実験のこれからを考える：動物の権利からの考察/幼少期の養育環境と非行の関係/世代間倫理の適用可能性/インターネット・コミュニティの排他性について/自己開示に関する社会学的考察/音楽のデジタル化と聴取スタイルの変化/現代山村における個人商店の役割：過疎地域における日常生活の研究/繭玉工芸と養蚕の伝統/地域社会における藤崎八幡宮例大祭の存在意義：集団帰属の分析を通して

<歴史学科>

大正期「主婦」の生活意識に関する一考察/熊本県出土紡錘車の研究/一向一揆と中世の解体/石製表飾の研究—木柑子高塚古墳出土石人を中心に—/刻目突帯文期における石鏃の研究/中世村落間相論における紛争解決方式の形成過程/九州出土鳥形埴輪の研究/文明開化期における民衆意識の変化/藤岡作太郎の源氏物語批評/戦後イギリスの若者文化におけるアメリカニゼーションの再考/中国の民間信仰/13世紀シャルトル大聖堂のステンドグラスについて/南宋江南の小農民経営/近代アメリカにおける印刷文化—植民地期・建国初期を中心に—/明代北辺における物資調達/近世の魔女と魔術：ヴェルテンベルク公領を中心に/18世紀フランスにおける職人の労働と文化/山本作兵衛研究/チャイナタウンの子どもたち：19世紀末のサンフランシスコを舞台に

<文学科>

価値観の史的変遷に伴う語義変化：「なえばむ」「なゆ」「なふ」を例として/和歌における素材研究/「伊勢物語」と同時代の文献にみられる違い及び影響/江戸語における二人称代名詞の待遇表現の研究/『御津の浜松』の研究/Personal Descriptions in Old English Ballads/Racial and Sexual Conflicts in Nella Larsen's *Passing*/ドイツ語の丁寧表現/Broken Illusions: The Meaning of Family in *The Glass Menagerie*/グリム童話における動物観/Emphatic Elements in M. Twain's *The Adventures of Huckleberry Finn*/Mark Twain's Figurative Language in His *The Adventures of Tom Sawyer*/「風」から読み解く宮沢賢治/現代フランス語の時間副詞節と動詞時制について/日本語授受表現のコロケーション/日本語と中国語の色彩語彙に関する比較と考察

<コミュニケーション情報学科>

認知症高齢者をもつ家族における孫世代の介護観/ドラマにみるキャラ的人間関係/男性ファッション誌にみる新たな男性像/女性の社会進出におけるジェンダーと役割意識/若い女性の人間関係に対する価値観の変容/新聞広告における高齢者像の変遷/大学生読者のマンガに対する着眼点研究～性別とジャンルの観点から～/南阿蘇村の墓祭衰退にみる互酬性への囚われ/特撮ヒーロー作品にみる孤独のスティグマ化/大人のメディアで語られる若者言説/指導経験とリフレクションによるアルバイト従業員向け教材の設計/親密度の変化に伴う表現変化/日中消費行動中の文化差異/The Limitations of Subtitles for Foreign-Language Comedy/パノプティコンメディアとしての SNS/ボランティア行動における内発的動機づけ/購買意欲と接客コミュニケーションの関係性

【平成 25 年度】

<総合人間学科>

視聴覚音声知覚に及ぼす注目部位の影響/高齢者における作動記憶中の脳活動と認知症傾向の関係/絵画における内面性の表出：イタリア・ルネサンスと北方ルネサンスを比較して/装飾芸術からみる日本の美術的特性/人格の同一性/ヴァイオリンの構造の変遷とその音楽/宗教的ホスピスケアにおける宗教性/キャロル・ギリガンのケア倫理—性役割の観点から—/子の犯罪と親の責任/SNSにおける親密性についての社会学的考察/ユネスコ無形文化遺産と文化的多様性—「和食」の登録を事例として—/熊本県を発着地とする旅行者の空港選択行動/時代が望んだヒーローとは—英雄像の変遷に関する考察—/いじめのない学校へ—大学生の経験と意識からいじめ対策を考える—/現代マンガにみる日本人の宗教感覚—『ぎんぎつね』と『聖☆おにいさん』を中心に—

<歴史学科>

中九州における古式土師器の研究—白川下流域を中心に—/中世における人身売買の構造—人身契約文書の分析—/九州の縄文時代における玦状耳飾りの研究/鎌倉期における地頭支配と百姓の土地所有/西南戦争下の食糧問題/中九州出土の刻目突帯文土器の研究/肥後

の算術と水利土木事業/朝鮮出兵期における加藤清正の肥後国の政治展開/土井ヶ浜遺跡出土の花弁状貝製品の研究/近世ドイツにおけるランツクネヒトと宿営社会/清代四川の宗族/清代の対外貿易/アルビジョワ十字軍にみるカタリ派/中近世ドイツにおける楽師の社会的身分—ヴェルテンベルクにおける楽師団体を例に—/19世紀初頭イギリスにおける黒人経験の読み直し/フランス絶対王政期・革命期における身体表象/コンブレーとバルベックの対比から見る『失われた時を求めて』

<文学科>

古典文学における「袖」について：『万葉集』と三代集の表現を中心に/宮沢賢治の詩における表現技法の研究/九州方言における動詞活用の形容詞化について/「世説新語」における女性観/外来語表記の研究：明治期を中心に/妖怪と日本文学/A Study on Jane Austen's *Pride and Prejudice*/ミネザンクから覗く中世騎士の恋愛事情/A Study on Elliot Smith's Lyrics/A Study on the Figurative Expressions in Emily Brontë's *Wuthering Heights*/A Study on the Lyrics from Elizabethan Song-Books/バルザック『谷間の百合』研究：主人公の自己認識と空間/Technology and Human Bodies: The Disembodiment in William Gibson's *Neuromancer*/鹿児島市方言におけるあいづち表現「ダカラヨ」の記述的研究/日本語における男女差の社会言語学的研究

<コミュニケーション情報学科>

個別指導塾に通う中学生の学習意欲と講師への信頼感/働く女性の悩み語りと過剰自己防衛/大学生の居住形態・学年別にみるストレスの実態とその有効な対処法の検討/SNS上に構築されるヴァーチャルな「地元つながり」—若者の地域間移動と地元つながりの関係性—/コンテンツを世界に売り込み、日本を広めるには/エンターテイメント空間におけるホスピタリティ/家族との会話内容と若者の投票行動の関係/現代若者のアイデンティティについて—平凡志向と言われる日本の若者は本当に昔と変わったのか—/TVコマーシャルにおけるジェンダー・ステレオタイプの描写の変容/A Study on Learners' Thinking: Learners' Beliefs, Learning Styles and Learning Strategies of High School and University Students/留学生の異文化適応と友人網構築

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料より)

資料 A-2-2-1-9：留学生の学位授与数

	学科	留学生学生数	
			内数で女子
22年度	総合人間学科	0	0
	歴史学科	1	0
	文学科	1	1
	コミュニケーション情報学科	2	0
	計	4	1
23年度	総合人間学科	2	2
	歴史学科	0	0
	文学科	0	0
	コミュニケーション情報学科	1	0
	計	3	2
24年度	総合人間学科	1	0
	歴史学科	0	0
	文学科	0	0
	コミュニケーション情報学科	2	0

	計	3	0
25 年度	総合人間学科	1	1
	歴史学科	1	1
	文学科	2	2
	コミュニケーション情報学科	1	1
	計	5	5

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 A-2-2-1-10：資格の種類と取得数

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
教育職員免許状	33	25	22	40	97
学芸員資格	31	32	32	31	126
社会調査士資格	12	14	14	23	63
認定心理士資格	—	—	—	—	—
日本語教育課程 修了書交付	—	—	—	—	—
計	76	71	68	94	286

* 「日本語教育課程修了証書」は平成 25 年度新設のため、まだ修了者は出ていない。

* 「認定心理士資格」についてはデータなし

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

25 年度は「教育職員免許状」と「社会調査士資格」が高い数値を示している。

資料 A-2-2-1-11：TOEIC-IP 試験のスコア（平成 24 年度・25 年度 1 年次生）

	24 年度 1 年次 (前期：183 名)	25 年度 1 年次 (前期：174 名)
900 点台	1	0
800 点台	2	0
700 点台	7	8
600 点台	29	46
500 点台	55	67
400 点台	64	41
300 点台	21	12
200 点台	1	0
100 点台	1	0
平均	513 点	540 点

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

平成 24 年度の新カリキュラムで、TOEIC や TOEFL のスコアを上げるための授業科目「実践英語」を設置し、平成 25 年度から開講している。

4 年生の学年度末に、GPA 計算方式によって学部の学業成績優秀被表彰者を決定している：

資料 A-2-2-1-12：学業成績優秀被表彰者

年度	被表彰者数	学科（コース）	GPA スコア
22 年度	1	総合人間学科（社会人間学コース）	3.670
23 年度	1	文学科（欧米言語文学コース）	3.626
24 年度	1	文学科（超域言語文学コース）	3.672
25 年度	1	総合人間学科（地域社会学コース）	3.511

（出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成）

前掲資料 A-1-1-2-10 及び 11 の質問項目の(1)、(2)、(5)は文学部で学んだものについての満足度・成果と考えられる：

資料 A-2-2-1-13：熊本大学文学部への満足度に関する卒業生調査

- ・質問項目：(1) 文学部への満足度
- (2) 文学部で身についた能力
- (3) 文学部が目指すべき方向性
- (4) 大学生時代に打ち込んだもの
- (5) 文学部で学んだことの意義・価値（自由記述）
- (6) 文学部の改善案（自由記述）

(1) 文学部への満足度

「とても満足」と「やや満足」とを合わせると、8 割以上の卒業生が文学部に満足している。所属の学科やコース、履修モデルで見るとその割合は 9 割を超える。「授業内容」や「教員」などについてさらに細かく満足度を尋ねたが、全項目で「とても満足」と「やや満足」とが過半数を超えており、回答した卒業生の殆どが文学部に満足している。「やや不満足」及び「不満足」の割合が比較的高かった項目を順に示すと、「文学部の施設・設備」(44%)、「就職や進学のための支援」(30.8%)、「所属履修モデル以外の文学部授業科目」(22.6%)などが挙げられる。前二者への不満は、自由記述欄でもみられた。

(2) 文学部で身についた能力

文学部が教育目的とする 10 の能力*のうち、「身についた」及び「少し身についた」の合計数値が高かったものを順に示すと、

「幅広い教養」(91.3%)

「課題発見・解決力」(88.8%)

「文章表現力」(87.5%)

「論理的思考力」(87.4%)

などであった。文学部が伝統的に重視してきた能力の育成に概ね成功していると言える。「確かな専門知識」については、平成 17 年度の改組によってコース制を導入したことの結果として、「幅広い教養」の評価が 9 割を超した反面、「確かな専門知識」の評価が相対的に低くなったと考えられる。

(5) 文学部で学んだことの意義・価値（自由記述）

問 2 で示された 10 の能力について具体的に述べた回答が多く見られた。その中でも回答が多かったのが、「幅広い教養」（7 件）及び「論理的思考力」（4 件）である。文学部には多様な学問分野が存在し、それらを学ぶことで、物事を多角的に考える力がついたというのが、もっとも多い回答であった。また、出版社勤務の人など、幅広い教養が仕事に直接的に役に立っているという回答もあった。反対に「確かな専門的知識」を挙げた回答は、学校教員として働いている人の中に多く見られた。

その他の回答として、直接的には役に立つと否とに関わらず、興味のある学問を学んだことによって人生が豊かになったとする回答も 4 件あった。文学部が従来から行ってきた研究教育の重要性をあらためて認識させられる回答であった。

*10 の能力＝幅広い教養、確かな専門性、課題発見・解決力、論理的思考力、文章表現力、異文化理解力、情報リテラシー、コミュニケーション力、市民感覚・倫理観、リーダーシップ

（出典：平成 26 年 2 月 12 日付文学部将来構想委員会資料：「熊本大学文学部への満足度に関する卒業生調査」より）

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

1. 平成 25 年度の『学生便覧』から、各学科・コースの「学位授与方針」、「学業の成果」が明示されている。

2. 学生の単位取得状況、GPA の推移、学年進級状況、学位授与数、学位論文、留学生の学位授与数、資格取得状況ともに良好である。

3. 平成 24 年度の新カリキュラムでは TOEIC や TOEFL のスコアを上げるための授業科目を設置、平成 25 年度から開講している。

4. 他学部から文学部への転部学生は数件あり、逆に文学部から他学部への転部はゼロ、学部内での転学科や転コースの例は稀で、学部への満足度の高さが示されている。

5. 卒業生への満足度アンケートの結果 9 割近い卒業生が文学部での学業に満足していること、その他全項目で過半数の学生が満足していることも学習成果のひとつの証左である。

以上の観点から、文学部における学業の成果は期待される水準にあると判断する。

観点 2-2 進路・就職の状況

（観点到に係る状況）

進路決定についての相談窓口体制は全学の「学生支援部キャリア支援ユニット」を中心としているが、文学部独自でも進路・就職支援を行っている：

資料 A-2-2-2-1：文学部独自の進路・就職支援活動

○「学生支援委員会」の設置

当委員会の各学科委員が学生の進路・就職関係全般の指導に当たり、その進路選択・決定をサポートしている。

○授業科目「インターンシップ」の設定

これについては、「教育領域一分析項目 I：教育活動の状況一観点 教育内容・教育方法」の箇所を参照。

- キャリア支援室の設置
年度の後学期に、毎週1回、外部の就職支援企業に依頼して学生の就職相談に対応している。
- 就職支援講座の実施
- 企業説明会の実施
- 各履修モデル（分野）所属教員による進路相談・アドバイス（随時）

（出典：「文学部自己評価委員会資料」）

資料 A-2-2-2-2：就職支援年間スケジュール

4・5月	「キャリア支援B」（文学部3年生対象）開講
6月	<p>第1回進路・就職ガイダンス（文学部3年生対象） 就職活動を終えた4年生の体験談と質疑応答を中心に、今後の進路について考えてもらう。</p> <p>就職基礎講座（文学部2，3年生対象） 働いて生きることを考えてもらい、自分のキャリアプランを構想する手がかりを与える。</p> <p>公務員養成講座開講（全学） 就活セミナー（文系学部対象：平成24年度、25年度実施）</p>
7月	就職講座「基礎編」開講（全学）
8月	<p>インターンシップ（希望者のみ） 行政機関や企業で実際に仕事を体験する（分析項目 I—観点「教育実施体制」参照）</p>
9月	KUMANAVI 登録説明会
10月	<p>「キャリア支援A」開講（文学部2年生対象） 第2回進路・就職ガイダンス（文学部3年生対象） 就活本番に向けての具体的なアドバイスと、熊本大学で提供されているキャリア支援に関するサービスの説明が中心。従来のメルマガに代えて、平成24年度から KUMANAVI が利用できる。</p> <p>個人面談（文学部2，3年生、修士1年生対象） 履修モデル（分野）ごとに、指導の教員と進路について相談し、教員からアドバイスを受ける。</p> <p>進路状況調査（文学部4年生、修士2年生対象） 面接対策講座（文系学部対象：平成25年度実施）</p>
11月	<p>キャリア・セミナー [卒業生との懇談会] キャリア支援ユニットと学生の共同企画。それぞれの職種で活躍している卒業生を招いて、仕事内容や採用試験の突破法などについて話してもらう。</p>

	就活直前講座（マイナビによる）
1 2 月	教職支援講座（文学部 2，3 年生、修士 1 年生 対象） 教員をめざしている学生を対象に、現役の先生に来ていただき、仕事の内容や、採用試験の突破法などについて話をしてもらう。
1 月	就職活動調査（4 年生対象）
2 月	
3 月	進路調査（卒業生・修了生対象）（卒業式の前後に実施）

※「就職講座」については、文学部加入者向けの経費補助制度もあるので、あわせて活用して、就職準備に備えてください。このほか大学全体としての就職支援体制が「学生支援部キャリア支援ユニット」を中心に行われているので、ぜひ利用・参照すること。

（出典：「熊本大学文学部 HP→進路・キャリア支援」）

資料 A-2-2-2-3：文学部卒業生の就職・進学状況

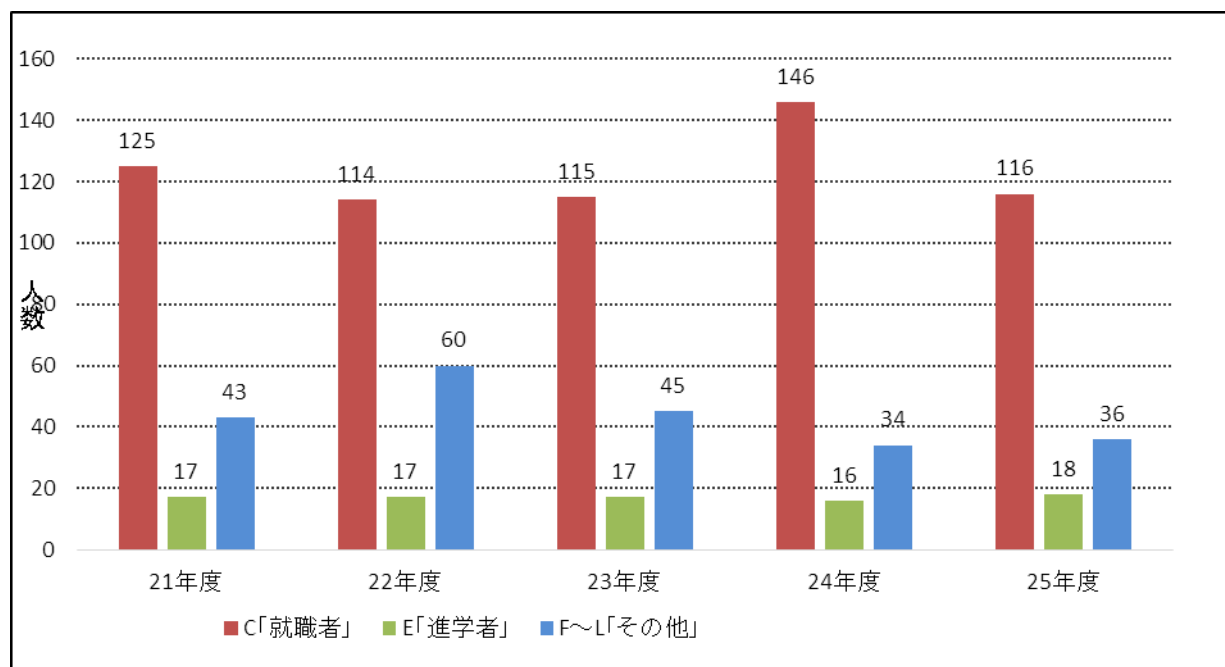
	21 年度			22 年度			23 年度			24 年度			25 年度			
	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	男	女	合計	
A 卒業者数	62	123	185	40	151	191	34	143	177	44	152	196	50	120	170	
B 就職希望者	46	91	137	23	113	136	27	113	140	28	136	164	40	96	136	
C 就職者	39	86	125	15	99	114	20	95	115	26	120	146	31	85	116	
D 就職率	84.8%	94.5%	91.2%	65.2%	87.6%	83.8%	74.1%	84.1%	82.1%	92.9%	88.2%	89.0%	77.5%	88.5%	85.3%	
E 進学者	6	11	17	5	12	17	5	12	17	10	6	16	7	11	18	
F 進学率	9.7%	8.9%	9.2%	12.5%	7.9%	8.9%	14.7%	8.4%	9.6%	22.7%	3.9%	8.2%	14.0%	9.2%	10.6%	
G 公務員採用試験準備者	6	9	15	9	10	19	2	5	7	2	4	6	1	6	7	
H 教員採用試験準備者	2	1	3	2	1	3	2	0	2	1	0	1	2	3	5	
I 就職活動継続者	5	4	9	6	13	19	5	18	23	1	16	17	7	8	15	
J 専門学校・研究生等入学者	0	6	6	0	3	3	0	3	3	0	1	1	0	3	3	
K その他	1	5	6	2	11	13	0	7	7	3	4	7	2	4	6	
L 不明	3	1	4	1	2	3	0	3	3	1	1	2	0	0	0	
M 研修医	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
O の産業別分類	農・林・漁業・鉱業・建設業	0	0	0	0	1	1	1	6	7	2	2	4	0	0	0
	製造業	8	7	15	0	16	16	5	17	22	6	10	16	4	12	16
	電気・ガス・熱供給・水道業	0	1	1	1	2	3	0	1	1	0	3	3	0	1	1
	情報通信業、運輸業	2	12	14	2	5	7	2	8	10	4	18	22	5	8	13

	卸売業・小売業	4	8	12	3	4	7	1	9	10	4	12	16	2	12	14
	金融業・保険業	6	24	30	2	16	18	0	16	16	1	20	21	3	16	19
	不動産・飲食・宿泊業	2	3	5	1	1	2	2	3	5	1	9	10	2	5	7
	医療、福祉	2	2	4	2	7	9	0	3	3	0	6	6	3	3	6
	教育、学習支援業	5	8	13	2	11	13	2	5	7	2	7	9	6	10	16
	サービス業	1	6	7	0	16	16	3	10	13	1	17	18	1	5	6
	公務	9	14	23	0	15	15	4	15	19	5	15	20	5	13	18
	その他	0	1	1	2	5	7	0	2	2	0	1	1	0	0	0
	この地区別分類	県内	14	22	36	4	26	30	3	26	29	6	34	40	5	23
九州		10	42	52	6	53	59	6	39	45	11	62	73	17	41	58
関西		0	5	5	1	2	3	1	7	8	0	2	2	1	3	4
東海		1	0	1	0	2	2	0	3	3	0	1	1	0	0	0
関東		13	13	26	2	13	15	10	17	27	5	21	26	6	16	22
その他		1	4	5	2	3	5	0	3	3	4	0	4	2	2	4

- B 「就職希望者」=C「就職者」+G「教員採用試験準備者」+H「就職活動継続者」（平成12年度～）
- C 「就職者」は、正規の職員として最終的に就職した者（1年以上の非正規職員として就職した者を含む）。
 自営業については「就職者」とみなす。（平成18年度～）
- J 「その他」は、資格試験準備者、進学準備者、家事手伝い及び就職の意思のない者等。

（出典：就職支援ユニット資料）

資料 A-2-2-2-4：就職者・進学者数グラフ



（出典：就職支援ユニット資料）

卒業後に就職あるいは進学している学生の割合は、平成22～25年度で、平均85.1%を占め、高い水準にある。『サンデー毎日』（2013年8月11日号）による全国549大学を対象とした調査では、熊本大学文学部の平成24年度就職率は、文・人文・外国語系学部で全

国 46 位、九州では 1 位となっている。就職先職種及び主な就職先は以下のとおり：

資料 A-2-2-2-5：過去 10 年の就職先職種

		2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	計	
総合人間学科	一般	30	44	43	53	32	27	32	35	30	28	354	
		37.0%	62.9%	58.9%	68.8%	56.1%	45.8%	58.2%	57.4%	61.2%	62.2%	56.5%	
	公務員	4	1	3	4	9	16	4	7	5	7	60	
		4.9%	1.4%	4.1%	5.2%	15.8%	27.1%	7.3%	11.5%	10.2%	15.6%	9.6%	
	教員	1										1	2
		1.2%										2.2%	0.3%
	進学	18	7	11	7	5	6	4	5	5	5	2	70
		22.2%	10.0%	15.1%	9.1%	8.8%	10.2%	7.3%	8.2%	10.2%	10.2%	4.4%	11.2%
	その他	28	18	16	13	11	10	15	14	9	9	7	141
		34.6%	25.7%	21.9%	16.9%	19.3%	16.9%	27.3%	23.0%	18.4%	18.4%	15.6%	22.5%
	歴史学科	一般	16	20	25	20	16	11	13	10	14	10	155
			35.6%	45.5%	54.3%	52.6%	44.4%	32.4%	28.3%	28.6%	48.3%	40.0%	41.0%
公務員		12	4	6	3	4	4	2	3	5	4	47	
		26.7%	9.1%	13.0%	7.9%	11.1%	11.8%	4.3%	8.6%	17.2%	16.0%	12.4%	
教員		1	1				1					2	5
		2.2%	2.3%				2.9%					8.0%	1.3%
進学		7	3	4	11	14	5	7	7	4	4	4	66
		15.6%	6.8%	8.7%	28.9%	38.9%	14.7%	15.2%	20.0%	13.8%	13.8%	16.0%	17.5%
その他		9	16	11	4	2	13	24	15	6	6	5	105
		20.0%	36.4%	23.9%	10.5%	5.6%	38.2%	52.2%	42.9%	20.7%	20.7%	20.0%	27.8%
文学科		一般	18	33	50	43	34	29	21	21	32	18	299
			32.7%	43.4%	67.6%	63.2%	64.2%	55.8%	38.2%	42.9%	64.0%	45.0%	52.3%
	公務員	1	4	1	2	2	2	7	7	7	7	5	38
		1.8%	5.3%	1.4%	2.9%	3.8%	3.8%	12.7%	14.3%	14.0%	14.0%	12.5%	6.6%
	教員	5	6	4	4	3	3	7	2	3	3	4	41
		9.1%	7.9%	5.4%	5.9%	5.7%	5.8%	12.7%	4.1%	6.0%	6.0%	10.0%	7.2%
	進学	10	7	9	8	1	4	5	4	4	2	4	54
		18.2%	9.2%	12.2%	11.8%	1.9%	7.7%	9.1%	8.2%	8.2%	4.0%	10.0%	9.4%
	その他	21	26	10	11	13	14	15	15	15	6	9	140
		38.2%	34.2%	13.5%	16.2%	24.5%	26.9%	27.3%	30.6%	30.6%	12.0%	22.5%	24.5%
	コミュニケーション情報学科	一般					24	30	24	28	34	23	163
							85.7%	75.0%	68.6%	87.5%	81.0%	85.2%	79.9%
公務員							1	2	2	2	2	1	8
							2.5%	5.7%	6.3%	4.8%	4.8%	3.7%	3.9%
教員						1	1	1			1		4
						3.6%	2.5%	2.9%			2.4%		2.0%
進学						1	2	1	1				5
						3.6%	5.0%	2.9%	3.1%				2.5%
その他						2	6	7	1	5	5	3	24
						7.1%	15.0%	20.0%	3.1%	11.9%	11.9%	11.1%	11.8%

資料 A-2-2-2-6：主な就職先

<平成 22 年度>

地方公務員、公立学校教員、国立大学職員、アトル、エイチ・アイ・エス、NTT 西日本、鹿児島銀行、カゴメ、九州電力、霧島酒造、キリンビバレッジ、熊本赤十字病院、佐賀銀行、サンゲツ、JR 九州エージェンシー、JTB グローバルアシスタンス、ジャパネットたかた、住友生命保険、ゼネラルアサヒ、ソフトバンク、損害保険ジャパン、大和証券、東映、東京海上日動火災保険、東京海上日動システムズ、東洋インキ九州、富田薬品、日本自動車連盟 (JAF)、日本生命保険、ニューコワン、ハウステンボス、ハウス流通、肥後銀行、久光製薬、日立ソリューションズ、福岡銀行、ポーラ、三井住友海上火災保険、南日本銀行、明治安田生命保険、ヤマト運輸、ヤマハ、やまやコミュニケーションズ、郵便局、ロゴスコポーレーション 他

<平成 23 年度>

国家公務員 (4)、地方公務員 (15)、公立学校教員 (2)、国立大学職員、IIJ グローバルソリューションズ、IHI、アネシス、アプライド、イトキン、岩崎グループ、インフォテックノ朝日、エイチ・アイ・エス、NTT マーケティングアクト、大分銀行 (2)、鹿児島銀行、九州労働金庫、九電工 (2)、クボタ、熊本製粉 (2)、コクヨ、コスモス薬品、再春館製薬所、済生会熊本病院、佐世保商工会議所、サンゲツ、ジェイアール九州ビルマネジメント、JTB 九州、JIMOS (2)、社会保険診療報酬支払基金、新出光、スカイネットアジア航空、全教研、損害保険ジャパン、第一生命保険、大陽日酸、武田薬品工業、タマホーム、筑後信用金庫、ツムラ、電通、東京エレクトロン九州、凸版印刷 (2)、西日本高速道路サービス・ホールディングス、西日本旅客鉄道 (JR 西日本)、日本工営、日本生命保険 (2)、日本たばこ産業 (JT)、野村証券、バンダイナムコゲームス、肥後銀行 (2)、福岡大学、三井住友海上火災保険、三菱電機、宮崎銀行、米良電機産業、郵便局、早稲田スクール 他

<平成 24 年度>

国家公務員、地方公務員(20)、国立大学職員、公立学校教員(5)、RKK コンピューターサービス、あいおいニッセイ同和損害保険(2)、阿蘇ファームランド、イオン九州、大分銀行、化学及血清療法研究所(2)、鹿児島銀行(2)、九州電力、近畿日本ツーリスト九州、熊本銀行、熊本計算センター、熊本県信用保証協会、熊本市国際観光コンベンション協会、熊本赤十字病院、熊本放送(RKK)、コスモス薬品(2)、西部ガス、山九、JA 福岡市、JTB 九州、JTB グローバルアシスタンス、社会保険診療報酬支払基金、親和銀行、セブン-イレブン・ジャパン、ソフトバンク、損害保険ジャパン(2)、筑邦銀行、DNP 西日本、TOTO、西鉄旅行、西日本新聞トップクリエ、日本航空インターナショナル、日本光電工業、日本生命保険、日本旅行、ノボノルディスクファーマ、野村証券、阪和興業、肥後銀行、日立ソリューションズ、福岡ひびき信用金庫、富士ゼロックス、富士通、ホテル日航熊本、三井ハイテック、三菱重工業、宮崎銀行、明治安田生命保険(2)、メットライフアリコ生命保険、ヤマハ熊本プロダクツ、楽天、リクルート 他

<平成 25 年度>

国家公務員(2)、地方公務員(16)、国立大学職員(3)、公立学校教員(5)、私立学校教員(3)、IHI、アストラゼネカ、アメリカンファミリー生命保険会社、エスケーホーム、NTT データ、大塚製薬、化学及血清療法研究所、鹿児島銀行、鹿児島テレビ放送(KTS)、京セラコミュニケーションシステム、協和発酵キリン、クボタ、熊本朝日放送(KAB)、熊本銀行(2)、熊本製粉、熊本ホテルキャッスル、十八銀行、セブン-イレブン・ジャパン、全日本空輸(ANA)、第一生命保険、大和リビング、DNP 西日本、電通東日本、東京海上日動火災保険、

日本銀行(2)、日本信号、日立ソリューションズ、福岡銀行、フランソア、星野リゾートグループ、三井住友海上火災保険(2)、三菱電機、三菱 UFJ リース、南日本放送(MBC)、宮崎日日新聞社、宮崎放送、明治安田生命保険(2)、メルローズ、楽天カード、ローソン、早稲田スクール 他

(出典：「熊本大学 HP：キャリア・サポート」)

ステーク・ホルダー別アンケート調査が全学対象に行われており、その中の「法学・文学・教育学系」の学生に係るデータがある：

資料 A-2-2-2-7：ステーク・ホルダー別アンケート調査（24年8月～11月実施）

表4-1 本学の法学・文学・教育学系の学生に身に付けて欲しい資質能力																				
項目選択の強さ区分	◎(特に重要な2項目)の選択率										◎または○(重要な5項目)の選択率									
	01 高校・予備校 教員※1	02 経済団体 役員	03 企業人事 担当者	04 共同研究 外部担当者	05 九州県・市 幹部職員	06 卒業生・同 窓会役員	07 在学生保護 者	08 本学教職員	09 本学学生	全グループ 単純平均	01 高校・予備 校教員※1	02 経済団体 役員	03 企業人事 担当者	04 共同研究 外部担当者	05 九州県・市 幹部職員	06 卒業生・同 窓会役員	07 在学生保護 者	08 本学教職員	09 本学学生	全グループ 単純平均
設問項目・集計項目																				
①幅広い教養と視野	35.0	27.1	19.2	22.2	26.7	28.8	33.1	39.3	33.3	29.4	74.2	72.9	73.1	77.8	66.7	78.8	74.6	76.8	83.3	75.3
⑦プレゼンテーション力や対話力	27.5	20.0	19.2	24.4	26.7	24.7	20.1	30.7	58.3	28.0	70.0	62.9	46.2	68.9	53.3	68.5	58.1	65.7	83.3	64.1
②リーダーシップや行動力	17.5	25.0	30.8	22.2	46.7	16.4	14.4	17.5	25.0	23.9	55.0	71.4	65.4	46.7	80.0	47.9	47.5	47.1	41.7	55.9
⑧実践の応用力や課題解決力	12.5	20.7	9.6	11.1	20.0	11.0	16.2	17.1	25.0	15.9	38.3	49.3	46.2	37.8	66.7	32.2	37.0	54.6	25.0	43.0
⑨外国語の運用力	12.5	8.6	15.4	20.0	0.0	13.7	12.7	15.4	16.7	12.8	50.0	35.7	36.5	53.3	26.7	58.2	51.4	50.7	33.3	44.0
③組織的行動力、協調作業力	10.8	8.6	7.7	13.3	20.0	8.9	5.6	16.8	16.7	12.0	31.7	45.7	50.0	44.4	53.3	31.5	31.7	49.6	41.7	42.2
⑤洞察力や思考力	12.5	7.9	13.5	13.3	0.0	12.3	8.8	22.1	16.7	11.9	43.3	45.7	44.2	42.2	40.0	37.0	43.3	58.2	58.3	45.8
⑥忍耐力や精神的逞しさ	7.5	13.6	21.2	2.2	20.0	5.5	9.5	14.6	8.3	11.4	32.5	37.9	53.8	33.3	33.3	24.0	29.2	40.4	33.3	35.3
⑩言語や宗教など異なる文化の理解力	5.8	3.6	5.8	4.4	0.0	9.6	5.6	17.5	16.7	7.7	25.8	17.9	19.2	37.8	13.3	43.2	37.3	47.5	58.3	33.4
④独創性や想像力	10.8	7.1	13.5	2.2	0.0	6.2	5.6	11.8	8.3	7.3	33.3	25.7	32.7	28.9	13.3	22.6	21.5	33.6	25.0	26.3
項目別平均有効回答者数(無回答を除く)	120	140	52	45	15	146	284	280	12	-	120	140	52	45	15	146	284	280	12	-
備考	+◎の表については20%以上のセルに薄いレンガ色、30%以上のセルに濃いレンガ色を塗った +◎または○の表については40%以上nセルに薄いウグイス色、60%以上のセルに濃いウグイス色を塗った +設問項目は全グループ単純平均の高点順に並べ変えている 注 ※1 小中学校校長会役員を含む																			

(出典:運営基盤管理部総務ユニット評価チーム資料)

本学関係のステーク・ホルダーが「法学・文学・教育学系」の学生に求める上位3項目は「幅広い教養と視野」、「プレゼンテーション力や対話力」、「リーダーシップや行動力」となっている。文学部における多様性に富んだ学科・コース・分野体制とそれに伴う多種多様な授業科目、プレゼンテーション能力養成のカリキュラム体制、「文章作成演習」、「英語コミュニケーション」や、平成24年度から新設された「21世紀市民学入門」、「実践英語」などはまさにそのような要望に応える科目群となっている。

また、文学部のサポーター企業を対象に、文学部にどのような人材を求めるかのアンケートを実施している：

資料 A-2-2-2-8：サポーター企業アンケート調査（平成23年度実施）

質問：どのような熊本大学文学部の学生を貴社に採用したいとお考えでしょうか。最も優先する採用基準をひとつ、もしくはふたつほどお教えてください。

NTT 西日本	新しい社会の基礎を創るために、自らリーダーとなり、大きなチームを動かしていける人材
---------	---

ジブラルタ生命	① 何のために仕事をするか、それを叶えるための執念、執着心を備えている企業人
	② 自分のしている仕事が生の中での何の役に立っているか、自分以外の周囲のために歯を食いしばることのできる思いを大切にしている人
ニュースカイホテル	コミュニケーション能力、特に人の話を聞き、すぐ理解できる力と自分の意志を人に伝えることができる力
九州産業交通ホールディングス	① どうしたら相手が喜んでくれるかを考えて行動できる、相手（お客様）の立場に立った言動ができる人
	② 新しい事業に取り組みたいといった熱意・創造性がある、何かやってくれそうな、バイタリティ溢れる人
熊本製粉	積極性やコミュニケーション能力、行動力等を身につけ、変化に柔軟に対応しアグレッシブに進化し続けられる自責・自発型社員
サニクリーン九州	① 自ら向上する意欲や行動力を兼ね備えた人
	② 周りからの支持を待つのではなく、自ら考え積極的にチャレンジする事ができる人
西日本新聞	① 正義感の強さ、社会的不正への怒りを持ち、同時に弱者の視点から冷静に世の中を見ることが出来る人物
	② 相手が誰であろうと積極的にぶつかっていく行動力（フットワークの良さ）
大和ハウス工業	行動力
毎日新聞	社会的な問題を発見するとともに、それに対して他人の受け売りではない自分の意見を持ち、それを人に伝えることができる人材

（出典：人文社会科学系事務ユニット資料）

これらの企業が求めるものをキーワードで挙げると、「リーダー」、「コミュニケーション能力」、「創造性」、「自責・自発型」、「行動力」、「社会的問題の発見」となり、参考にすべきデータとなっている。（中期計画番号：K30）

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

1. 文学部学生の進路・就職支援体制及び活動は適切に整備・実施されている。
2. 学生の就職・進学状況も良好であり、平成 22～25 年度の就職・進学率は平均で 85.1%と高い水準にある。
3. 熊本大学ステーク・ホルダーのアンケート調査、文学部独自による卒業生対象のアンケート調査、サポート企業のアンケート調査等、学生の進路についての重要なアンケート調査を行っている。

以上の観点から、文学部における進路・就職支援活動は期待される水準にあると判断する。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目Ⅰ 教育活動の状況

重要な質の変化あり。大きく改善、向上している。理由は以下のとおり。

1. 学部の教育目的を達成するための教育体制、学士課程一貫教育に則った教養教育への関わり度、教養教育と専門教育の連携、多様な専門領域の区分設定、段階的教育課程の設定など、文学部の教育体制は適切な体制が取られている。

2. 各種入試体制の整備、入学者の定員充足率は適切である。

3. 平成 24 年度から、各学科・コースの教育目的が明示され、平成 25 年度から、各学科・コースの学位授与方針、教育課程編成方針が明示され、公表度が向上している。

4. 平成 25 年実施の卒業生アンケート調査及びその分析によって、卒業生の声を把握する貴重な資料が採られている。

5. 平成 24 年度から実施の新カリキュラムでは、学部共通科目の中の実践的・社会対応的科目を 10 科目に増やし、社会のニーズ、学生の実践力・社会適応力、卒業後の進路方針等に対応する科目を増設した。さらに、情報処理や英語コミュニケーションなどの専門基礎教育の推進、文章作成能力や課題発見・解決能力を養う課題研究 III の新設（平成 24 年度）もなされている

6. コミュニケーション情報学科では、授業の約 3 分の 1 を英語で実施し、スピーチやディベートを取り入れた授業によって、英語運用能力の向上に取り組んでいる。文学部においても、外国人教員及び日本人教員による英語の授業が行われている。

7. 「学部長と学生代表による懇談会」での学生の要望をよく汲み上げ、平成 25 年度及び 26 年度に実際の改善を行い、学生の学習環境は大いに改善されている。

8. その他、他学部からの転部学生の受け入れ、TA 制度の運用、障害のある学生への支援の奨励、奨学制度の活発な利用状況など、教育活動は非常に活発である。

(2) 分析項目Ⅱ 教育成果の状況

重要な質の変化あり。大きく改善、向上している。理由は以下のとおり。

1. 学生の単位取得状況、GPA の推移、学年進級状況、学位授与数、学位論文、留学生の学位授与数、資格取得状況ともに良好である。

2. 平成 24 年度の新カリキュラムでは、TOEIC や TOEFL のスコアを上げるための授業科目を設置し、平成 25 年度から開講している。

3. 他学部から文学部への転部学生が少なくないこと、逆に文学部から他学部への転部はゼロ、学部内での転学科や転コースの例は稀であることは、文学部における学生の満足度を示している。

4. 卒業生への満足度調査も平成 25 年に実施され、9 割近い卒業生が文学部での学業に満足し、その他全項目で過半数の学生が満足しており、文学部における学習成果の証左となっている。

5. 学生の進路・就職状況も良好であり、平成 22～25 年度の就職・進学率は 85.1%にのぼり、非常に高い水準にある。

6. 熊本大学ステーク・ホルダーのアンケート調査、文学部独自の卒業生アンケート調査、サポート企業のアンケート調査等、学生の進路に関わる重要な調査を行っており、学

生の進路の改善を目指した努力が行われている。

Ⅲ 研究の領域に関する自己評価書

1. 研究の目的と特徴

文学部における研究目的は、「人文・社会科学の創造的研究をとおして、地域社会及び国際社会に貢献する」（「熊本大学 HP：文学部」）ことである。それは「文学部附属永青文庫研究センター」の活動目的によく表されている：

資料 III-1-A：文学部附属永青文庫研究センターの活動目的

熊本大学文学部では、「教育・学術文化における地域連携と社会貢献」を目的として、高度な学術研究活動を行い、その知的資源を地域社会に還元するとともに、研究者等の人材育成に努めている。

（出典：「文学部附属永青文庫研究センターHP」）

さらに、共同利用研究支援体制の構築という観点から、文学部を中心とした研究体制が述べられている：

資料 III-1-B：文学部を中心とした共同利用研究支援体制の構築

本センターの教育研究活動が評価され、熊本県、文化行政機関等との連携実績を積むことにより、本センターの事業の継続性が担保される。さらに、将来的には文学部を中心に、社会文化科学研究科、附属図書館、五高記念館等関係部局と共同して、人文社会科学系初の学内共同教育研究施設を整備することにより、「人文社会科学系の重点研究を支援し、個々の独創的研究及び学際的な共同研究を支援するための共同利用研究支援体制を構築する」ことにつながる。

（出典：「熊本大学文学部附属永青文庫研究センターHP」）

教員個人が具体的に取り組むべき研究活動の指標としては、『文学部規則集』に以下の 6 項目が掲げられている：

資料 III-1-C：文学部教員個人の研究活動指標

1. 専門分野における学術的貢献
2. 新分野開拓への挑戦的研究の推進
3. 拠点形成研究への応募
4. 競争的研究資金の獲得
5. 研究成果等の公表の推進
6. 国際学会・シンポジウム等の活動

（出典：『平成 25 年度 文学部規則集』 p. 40）

[想定する関係者とその期待]

在学生、卒業生、関係領域の学会、地域関係者を主要な関係者として想定し、文学部の研究活動・研究成果がそれらの関係者に対して、学術面で、課題解決の点で、また地域文化の発展において貢献するよう期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点

【優れた点】

1. 文学部における研究は各学科の特質を反映し、豊かな多様性を示している。認知心理学に関する国際的に評価の高い先進的研究、グローバルに展開するアフリカ研究、独自の集落点検法を用いた社会問題解決策を提案する独創的研究、細川家の資料に関する包括的な研究、学界をリードする考古学研究、社会正義と環境問題の研究、国際的な俳句研究、漱石、ハーンを軸とした国際的比較文学研究、英語教授法・メディア・マーケティングに関する実践的研究など、国際的先進的学術研究から、地域に密着した研究、日本文化に関する国際的研究や情報社会に対応した実践研究まで、従来 of 静的イメージの文学部像を越えたダイナミックな研究活動が行われている。それらの研究は、現代社会の問題解決や地域社会貢献に資する方向性を有しており、先進的学術研究と地域との連携・還元を使命とする地方大学の理想的なあり方として高く評価できる。

2. 教員の研究活動に関しては、研究業績全般、外部資金の獲得状況、学内研究助成金の獲得状況、学部内研究推進助成の活用状況、いずれにおいても高い水準にあり、文学部教員の研究活動は極めて活発である。

3. 文学部教員による平成 22～25 年度の研究成果（論文・著書）の総数は 332 本で、それらのうち SS と S の水準にある論文・著書は合計で 31 本にのぼり、全教員数約 60 名の約 52% に相当する（別表「研究業績説明書」ではそれらの中から 22 本を選別・掲載している）。今回第 II 期の SS と S の論文・著書の増加の要因は、IF（インパクト・ファクター）の高い国内外雑誌への掲載論文の増加、全国レベル・国際レベルにある学会での高い評価（書評）の増加、海外の学会での賞の受賞の増加にある（別表「研究業績説明書」参照）。前回第 I 期と今回第 II 期で << 「人と社会（社文系）の科学」に関する研究業績の判断基準 >> における SS と S の判断基準内容に多少の変更はあるものの、前回第 I 期（6 年間）の 18 本という SS 及び S 業績を大幅に上回る数になっており、研究成果の水準は明らかに上がっている。

【改善を要する点】

研究活動及び研究成果において特段改善を要する点はないが、強いて言えば、研究成果の SS と S に値する業績の数が学科によっていくらか偏りが見られる点、改善の余地がある。これは学科の専門性とも関わる問題でもあり、単純に判断はできないが、全体としてよりよいバランスを目指すことで、文学部全体としての研究活動・成果をさらに充実させ、外部へのアピールもより強いものとする必要がある。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 1-1 研究活動の状況

（観点到に係る状況）

文学部教員による研究活動は広範囲の領域にわたる多様性を示している。代表的なものとしては、心のメカニズムとその発達・可塑性に関する国際的に評価の高い先進的研究（総合人間学科：認知心理学領域）、グローバルに展開するアフリカ研究（同：文化人類学領域）、独自の集落点検法を用いて、高齢社会や過疎化という喫緊の社会問題解決策を提案する独創的研究（同：地域社会学領域）、細川家の資料に関する包括的な研究（歴史学科：日本史学領域）、独創的な研究で学界をリードする考古学研究（同：考古学領域）、社会正義と環

境問題の研究（同：文化史学領域）、国際的な俳句研究（文学科：英語英米文学領域）、地元縁の深い漱石、ハーンを軸とした国際的比較文学研究（同：比較文学領域）、英語教授法ならびにメディア、マーケティングに関する実践的研究（コミュニケーション情報学科）他が挙げられ、国際的先進的学術研究から地域に密着した課題研究、さらに日本文化に関する国際的研究や情報社会に対応した実践研究まで、従来の静的イメージの文学部像を越えた広い領域がカバーされている。これらの研究はそのいずれもが、直接的、間接的に、現代社会の諸問題の解決や地域社会への貢献に資する方向性を有しており、先進的学術研究とその地域への還元を使命とする地方大学の理想的なあり方として高く評価できる。

各年度における文学部教員個人の研究計画は『熊本大学大学院社会文化科学研究科教員研究計画書』に掲載されている。

文学部教員約 60 名による、研究発表・シンポジウム参加は以下のとおり：

資料 B-1-1-1-1：研究発表・シンポジウム（平成 22～25 年度）

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
研究発表・シンポジウム	76	72	78	69	295

（出典：文学部自己評価委員会資料：「各学科収集資料」を基に作成）

これらの研究発表及びシンポジウムを、海外・国内で分けると以下のようになる：

資料 B-1-1-1-2：研究発表及びシンポジウムの海外・国内別数値

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計 (%)
国際学会・研究会	15	10	20	18	63 (21.4%)
国内学会・研究会	61	62	58	51	232 (78.6%)

（出典：文学部自己評価委員会資料：「各学科収集資料」を基に作成）

文学部教員が主催する学会や研究会も多い：

資料 B-1-1-1-3：文学部教員主催の学会及び研究会

年度	開催数	計
22 年度	49	230
23 年度	59	
24 年度	60	
25 年度	62	

（出典：文学部自己評価委員会資料：「各学科収集資料」を基に作成）

文学部教員が利用している、外部・学内・学部内の研究助成制度・助成金としては、科学研究費補助金、共同研究、受託研究、寄付金（以上、外部）、拠点形成研究、学術出版助成、学長裁量経費、国際共同研究スタートアップ支援、科研費インセンティブ、若手研究

者支援制度インセンティブ（以上、学内）、学術研究推進経費、国際学会発表助成、海外研究助成（以上、学部内）がある。

平成 22～25 年度の科学研究費補助金の採択数は計 148 件にのぼる：

資料 B-1-1-1-4：科学研究費補助金の採択数

	22 年度（件）	23 年度（件）	24 年度（件）	25 年度（件）	計（件）
主任研究者	22	23	20	21	86
分担研究者	13	16	17	16	62
計	35	39	37	37	148

（出典：人文社会科学系事務ユニット資料）

これらの採択によって獲得されている補助金額は以下のとおり：

資料 B-1-1-1-5：科学研究費補助金採択状況（単位：千円）

	平成 22 年度		平成 23 年度		平成 24 年度		平成 25 年度		計	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
基盤研究（A）	9	29,550	11	31,627	11	32,400	11	37,385	42	130,962
基盤研究（B）	9	8,853	7	5,320	7	4,155	8	8,610	31	26,938
基盤研究（C）	13	9,550	12	7,760	15	11,970	16	12,750	56	42,030
若手研究（A）	1	4,400	0	0	0	0	0	0	1	4,400
若手研究（B）	2	1,300	4	2,800	2	1,600	2	1,400	10	7,100
挑戦的萌芽研究	1	600	3	2,100	1	70	0	0	5	2,770
特別研究員奨励費	0	0	2	1,400	1	600	0	0	3	2,000
計	35	54,253	39	51,007	37	50,795	37	60,145	148	216,200

（出典：人文社会科学系事務ユニット資料）

過去 4 年間で、採択数 148 件、総計金額 216,200,000 円もの補助金を獲得しており、これは人文社会科学系学部としては極めて高い採用件数及び補助金額である。文学部教員の研究が第三者機関にも高く評価され、認められていることの証である。

平成 22～25 年度における「受託・共同研究」の受け入れ状況は以下のとおり：

資料 B-1-1-1-6：受託・共同研究の受け入れ状況

<平成 22 年度>

（単位：千円）

受託/共同	研究課題	委託者	直接経費	間接経費	計
受託	永青文庫史資料の研究 （基礎目録作成及び研究）	熊本県	27,155	0	27,155
共同	視聴覚統合の発達過程と 音声学習への寄与の検討	日本電信 電話株式 会社	180	20	200

<平成 23 年度>

（単位：千円）

受託/共同	研究課題	委託者	直接経費	間接経費	計
受託	永青文庫史資料の研究 (基礎目録作成及び研究)	熊本県	24,950	0	24,950
受託	西南戦争遺跡出土小銃弾 の蛍光 X 線分析	玉東町	350	0	350
受託	土器圧痕・生体化石資料 の比較検討による縄文集 落における植物性食料の 貯蔵形態と家屋害虫の実 証的研究	青森県教 育委員会	1,211	0	1,211
共同	視聴覚統合の発達過程と 音声学習への寄与の検討	日本電信 電話株式 会社	180	20	200

<平成 24 年度>

(単位：千円)

受託/共同	研究課題	委託者	直接経費	間接経費	計
受託	永青文庫史資料の研究 (基礎目録作成及び研 究)	熊本県	24,950	0	24,950
受託	三内丸山遺跡からみた貯 蔵食物害虫 Sitophilus 属の生態と進化過程の研 究	青森県教 育委員会	492	0	492
共同	視聴覚統合の発達過程と 音声学習への寄与の検討	日本電信 電話株式 会社	180	20	200

<平成 25 年度>

(単位：千円)

受託/共同	研究課題	委託者	直接経費	間接経費	計
受託	永青文庫史資料の研究 (基礎目録作成及び研 究)	熊本県	20,000	0	20,000

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

寄付金の受け入れ状況及び受け入れ額は以下のとおり：

資料 B-1-1-1-7：寄附金受け入れ状況

年度	寄附目的	助成金等	寄附額(千円)
22	教育研究助成のため		500
22	永青文庫史資料研究助成のため		300
22	研究助成のため	三菱財団助成金	50
22	永青文庫研究のため	第 32 回熊日出版文化賞	200
平成 22 年度 計			1,050
23	研究助成のため	三菱財団助成金	810

23	永青文庫研究のため		1,105
23	永青文庫研究ため		1,000
23	教育研究助成のため		500
23	研究助成のため	三菱財団助成金	890
23	研究助成のため	三菱財団助成金	600
23	教育研究のため		10
23	研究助成のため	日本証券奨学財団寄附金	1,000
平成 23 年度 計			5,915
24	研究助成のため	三菱財団助成金	1,550
24	教育研究助成のため		500
24	文学部総合人間学科のため		1,000
平成 24 年度 計			3,050
25	2013 年度「社会調査実習 I・II」実習助成	社会調査協会実習助成金	270
25	研究課題「アリストテレス道徳教育論の哲学的基礎と現代的意義の研究」	上廣倫理財団	8,887
25	教育研究助成のため		500
25	研究助成のため		500
25	学術研究助成のため	上廣倫理財団	1,100
平成 25 年度 計			11,257
22 年度～25 年度 総計			21,272

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

上掲「外部資金」全体（資料 B-1-1-1-5, 6, 7）の獲得額の合計は以下のとおり：

資料 B-1-1-1-8：外部資金全体の獲得額（単位：千円）

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	合計
科学研究費補助金	54,253	51,007	50,795	60,145	216,200
共同研究	200	200	200	—	600
受託研究	27,155	26,511	25,442	20,000	99,108
寄付金	1,050	5,915	3,050	11,257	21,272
計	82,658	83,633	79,487	91,402	337,180

(出典：資料 B-1-1-1-5、B-1-1-1-6、B-1-1-1-7 を基に作成)

平成 22～25 年度に「拠点形成研究 B」の採択が 1 件ある。プロジェクト名は『「永青文庫」資料等の世界的資源化に基づく日本型社会研究』で、平成 20 年度に採択されている：

資料 B-1-1-1-9：拠点形成研究 B 採択状況

領域	プロジェクト名	役割	所属	配分額	総計
人文・社会科学	「永青文庫」資料等の世界的資源化に基づく日本型社会研究	拠点リーダー	文学部	20～22年度 300万/23～25 年度各250万	1650万
		拠点サブリーダー	教育学部		

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 B-1-1-1-10：拠点形成研究 B の年度ごと及び合計 (単位：千円)

年度	助成額	合計
22年度	3,000	10,500
23年度	2,500	
24年度	2,500	
25年度	2,500	

(出典：上掲資料 B-1-1-1-9 を基に作成)

以下、「学術出版助成」、「学長裁量経費」、「国際共同研究スタートアップ支援」、「科研費インセンティブ」、「若手研究者支援制度インセンティブ」の採択件数及び助成額：

資料 B-1-1-1-11：「学術出版助成」採択状況

	件数	助成額 (円)
22年度	3	2,250,000
23年度	4	3,599,378
24年度	4	3,300,000
25年度	2	1,740,000
計	13	10,889,378

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 B-1-1-1-12：「学長裁量経費」採択状況

	件数	助成額 (円)
23年度	2	5,485,700
25年度	1	777,000

計	3	6,262,700
---	---	-----------

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 B-1-1-1-13：「国際共同研究スタートアップ支援」採択状況

	件数	助成額（円）
23年度	1	194,365
24年度	1	500,000
計	2	694,365

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 B-1-1-1-14：「科研費インセンティブ」採択状況

	件数	助成額（円）
22年度	3	1,860,000

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 B-1-1-1-15：「若手研究者支援制度インセンティブ」採択状況

	件数	助成額（円）
22年度	2	540,400
23年度	1	457,600
25年度	2	1,356,600
計	5	2,354,600

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

これら 6 つの学内研究助成の過去 4 年間分の合計金額は以下のようになる：

資料 B-1-1-1-16：学内研究助成獲得金額

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
拠点形成研究 B	3,000,000	2,500,000	2,500,000	2,500,000	10,500,000
学術出版助成	2,250,000	3,599,378	3,300,000	1,740,000	10,889,378
学長裁量経費	—	5,485,700	—	777,000	6,262,700
国際共同研究 SU 支援	—	194,365	500,000	—	694,365

科研費インセンティブ	1,860,000	—	—	—	1,860,000
若手研究者支援インセンティブ	540,400	457,600	—	1,356,600	2,354,600
計	7,650,400	12,237,043	6,300,000	6,373,600	32,561,043

(出典：上掲資料 B-1-1-1-10～B-1-1-1-15 を基に作成)

学部内の研究助成制度—「学術研究推進経費」、「国際学会発表助成」、「海外研究助成」—の採択及び助成額は以下のとおり：

資料 B-1-1-1-17：「学術研究推進経費」の件数及び助成額

	件数	助成額（千円）
22年度	2	1,000
23年度	3	1,500
24年度	3	1,500
25年度	6	1,600
計	14	5,600

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 B-1-1-1-18：「国際学会発表助成」の件数及び助成額

	件数	助成額（千円）
22年度	4	900
23年度	1	122
24年度	6	1,200
25年度	6	1,200
計	17	3,422

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 B-1-1-1-19：「海外研究助成」の件数及び助成額

	件数	助成額（千円）
22年度	1	800
23年度	1	800

24年度	2	800
25年度	0	0
計	4	2,400

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

学部内のこれら3つの研究助成の過去4年間分の合計助成額は以下のとおり：

資料 B-1-1-1-20：学部内研究助成金額 (単位：千円)

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
学術研究推進経費	1,000	1,500	1,500	1,600	5,600
国際学会発表助成	900	122	1,200	1,200	3,422
海外研究助成	800	800	800	—	2,400
計	2,700	2,422	3,500	2,800	11,422

(出典：上掲資料 B-1-1-1-17～B-1-1-1-19 を基に作成)

学部内の研究支援制度として「サバティカル制度」がある。全学的には、「教員の専門分野に関する能力を向上させることを目的として、教員の職務の全部又は一部を一定期間免除し、自主的に調査研究に専念する研修」という主旨で、平成22年度から施行され（「国立大学法人熊本大学教員のサバティカル研修に関する規則」）、それに基づき、文学部で平成22年7月に細則が設けられ（「熊本大学文学部サバティカル研修に関する細則」）、23年度から運用されている：

資料 B-1-1-1-21：サバティカル研修利用状況

年度	件数	研修先	計
23年度	1	アメリカ及び韓国	計5件
24年度	3	アメリカ、イギリス、内地	
25年度	1	内地	

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

この3年間で5件のサバティカル研修（5件とも1年間）が利用されており、利用状況は活発である。さらに、平成26年度、27年度、28年度に各1件のサバティカル研修が承認されている。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

教員の研究活動全般、外部資金の獲得状況、学内研究助成金の獲得状況、学部内研究推進助成の活用状況、いずれにおいても極めて高い数値を示しており、文学部教員の研究活動は期待される水準を上回ると判断する。

観点1-2 共同利用・共同研究の実施状況

(水準)

(判断理由) 該当なし

分析項目Ⅱ研究成果の状況

観点2-1 研究の成果の状況

(観点に係る状況)

文学部教員約60名による研究活動の具体的な成果として、論文、著書、教科書・啓発書、翻訳、新聞・雑誌記事、その他(辞書、ほか)の分類で見ると、以下のようになる:

資料B-2-2-1-1: 文学部教員による研究成果

	22年度 (件)	23年度 (件)	24年度 (件)	25年度 (件)	計(件)
論文	65	55	57	65	242
著書	22	22	24	22	90
教科書・啓発書	9	4	7	15	35
翻訳	5	8	8	6	27
新聞・雑誌記事	62	35	29	62	188
その他 (辞書、ほか)	6	12	16	17	51
計	169	136	141	187	633

(出典: 文学部自己評価委員会資料: 「各学科収集資料」を基に作成)

過去4年間で8つの項目の総計として633件の活動が数値となって出ており、文学部教員の研究活動は非常に活発である。「新聞・雑誌記事」はマスメディアを通じての社会及び地域への発信でもあるため、「Ⅳ社会貢献の領域」の中の「社会貢献活動の成果」及び「地域貢献活動の成果」のところで詳細に述べている。

このような研究成果の一例として「文学部附属永青文庫研究センター」がある。平成 22～25 年度における当センターの研究成果は以下のとおりで、国の重要文化財級の細川家文書の調査・研究結果とその価値を世に発信している：

資料 B-2-2-1-2：文学部附属永青文庫研究センターによる研究成果

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
著書（単著）	2	0	3	3	8
著書（共著）	7	7	6	3	23
論文	15	6	8	8	37
その他	12	3	6	4	25
計	36	16	23	18	93

（出典：「熊本大学附属永青文庫研究センター資料」を基に作成）

平成 22～25 年度に同センターから出版された著書（単著・共著）の具体例をいくつか挙げる：

資料 B-2-2-1-3：文学部附属永青文庫研究センターによる著書

- 『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』（吉川弘文館、2010）
- 『細川幽斎 戦塵の中の学芸』（笠間書院、2010）
- 『永青文庫叢書 細川家文書 近世初期編』（吉川弘文館、2012）
- 『細川家の歴史資料と書籍』（吉川弘文館、2013）
- 『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅱ』（吉川弘文館、2013）
- 『細川家の歴史資料と書籍 永青文庫資料論』（吉川弘文館、2013）
- 『永青文庫叢書 細川家文書 故実・武芸編』（吉川弘文館、2014）

（出典：「熊本大学附属永青文庫研究センター資料」より）

平成 25 年度の文科省との「ミッションの再定義」において、同センターの活動及び業績は以下のように評価された：

資料 B-2-2-1-4：ミッションの再定義における評価

- 日本史学や考古学など人文社会科学分野における研究実績を活かし、永青文庫研究センターを設置し、細川家文書などの大名家文書の目録作成やアーカイブ化に取り組んでいる。
- これらの取り組みを通じて、平成 25 年に 266 通の細川家文書が国の重要文化財に指定されている。

（出典：平成 25 年度「文学部ミッション再定義」より抜粋）

同センターにおける資料の整理や基礎的研究を通して、長年にわたって熊本県の歴史文化研究に貢献してきた川口恭子氏の功績に対して「平成 23 年度熊本市有功者賞」が授与された。これも同センターの大きな成果の一つであることを付言しておく。（中期計画番号：K35）

前掲資料 B-2-2-1-1 で挙げられた、文学部教員全員による研究成果（著書及び論文）の

中から、SS あるいは S 相当の研究成果として選定し、まとめたのが「研究業績説明書」（別表）であるが、その選定は、以下の資料 B-2-2-1-4（<<「人と社会（社文系）の科学」に関する研究業績の判断基準>>）に則って行われた。すなわち、論文が掲載された学術誌の IF（インパクト・ファクター）、国際性、書評・批評・報道の掲載紙及び評価内容、受賞・表彰、外部資金獲得などを評価条件とし、その業績の意義に基づいて「学術面」と「社会、経済、文化面」を区分し、関係学会や関係研究者を中心とした第三者による客観的かつ厳密な評価言述をもって関係者による厳正な評価とみなし、評価区分の SS 及び S の判定を行った：

資料 B-2-2-1-5：<<「人と社会（社文系）の科学」に関する研究業績の判断基準>>
研究業績の判断根拠表

分科名 (細目番号)	情報学フロンティア (1303)、デザイン学 (1651)、生活科学 (1701~1703)、科学教育・教育工学 (1801~1802)、科学社会学・科学技術史 (1901)、文化財科学・博物館学 (2001)、地理学 (2101)、健康スポーツ科学 (2401~2403)、子ども学 (2451)、地域研究 (2701)、ジェンダー (2801)、哲学 (2901~2904)、芸術学 (3001~3003)、文学 (3101~3105)、言語学 (3201~3205)、史学 (3301~3305)、人文地理学 (3401)、文化人類学 (3501)、法学 (3601~3607)、3701~3702)、経済学 (3801~3807)、経営学 (3901~3903)、社会学 (4001~4002)、心理学 (4101~4104)、教育学 (4201~4204)、社会経済農学 (7401~7402)	
区分	左記区分と判断した根拠	
	学術面	社会、経済、文化面
SS	<ul style="list-style-type: none"> ●タイプ A：論文を掲載した学術誌が、付表に示す「SS の基準」を満たしている。 ●タイプ B：同学術誌が、付表に示す「S の基準」を満たし、かつ下記の条件の 2 つを満たしている。 <ul style="list-style-type: none"> ・学会・国際会議等において、当該業績に関わる招待講演、基調講演を行った。 ・当該業績が科学研究費補助金等の採択に寄与した。 ・当該業績の被引用回数が 10 回以上である。 ・当該業績が書評等において高く評価された。 ●タイプ C：同学術誌が、付表に示す「A の基準」を満たし、かつ下記の条件を満たしている。 <ul style="list-style-type: none"> ・当該業績の被引用回数が 30 回以上である。 ●タイプ D：出版された学術的著書又は創造的作品にあつては、書評等が複数の全国学会レベル以上の学術誌に掲載され、いずれにおいても研究業績が特に高く評価された。 ●タイプ E：論文、学術的著書又は創造的作品が、学士院賞、卓越した水準の学会賞・学術賞・国際賞等の受賞に寄与した。 	<ul style="list-style-type: none"> ●タイプ K：人と社会（社文系）に関係する分野において、当該業績の利用・普及状況や地域、産業界での応用・活用状況、政策への具体的な反映状況が卓越している。 ●タイプ L：研究成果に関して国際的な賞、大臣表彰等による顕彰がなされている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディア及び国外のメディアで報道されている。 ●タイプ M：教科書・啓発書等が権威ある書評などに取り上げられている、長期にわたり広く利用されていることから、貢献が卓越している。 ●タイプ N：研究成果による貢献が卓越しており、国際的な賞、大臣表彰等による顕彰がなされている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディア及び国外のメディアで報道されている。
S	<ul style="list-style-type: none"> ●タイプ F：論文を掲載した学術誌が、付表に示す「S の基準」を満たしている。 ●タイプ G：同学術誌が、付表に示す「A の基準」を満 	<ul style="list-style-type: none"> ●タイプ O：人と社会（社文系）に関係する分野において、当該業績の利用・普及状況や地域、産業界での応用・活用状況、政策への具体的な反映状況が優秀である。

<p>たし、かつ下記の条件の2つを満たしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 学会・国際会議等において、当該業績に関わる招待講演、基調講演を行った。 ・ 当該業績が科学研究費補助金等の採択に寄与した。 ・ 当該業績の被引用回数が10回以上である。 ・ 当該業績が書評等において高く評価された。 <p>●タイプH：</p> <p>同学術誌が、付表に示す「Bの基準」を満たし、かつ下記の条件を満たしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 当該業績の被引用回数が30回以上である。 <p>●タイプI：</p> <p>出版された学術的著書又は創造的作品にあっては、書評等が全国学会レベル以上の学術誌等に掲載され、研究業績が高く評価された。</p> <p>●タイプJ：</p> <p>論文、学術的著書又は創造的作品が、優秀な水準の学会賞・学術賞等の受賞に寄与した。</p>	<p>●タイプP：</p> <p>研究成果が関係者から表彰されている、又は、研究成果が国内のメジャーなメディアで報道されている、又は、実用化研究に必要な大型の競争的外部資金の獲得に寄与している。</p> <p>●タイプQ：</p> <p>教科書・啓発書等が権威ある書評などに取り上げられている、長期にわたり広く利用されていることから、貢献が優秀である。</p>
--	--

付表 「人と社会(社文系)の科学」の学術誌の水準判断における Impact Factor の下限値

系	分野	分科	細目番号	学術誌の水準判断における Impact Factor (IF) の下限値			
				SS	S	A	B
総合・新領域系	情報学	情報学フロンティア	1303	2.0	1.2	0.6	0.3
	複合領域	デザイン学	1651	1.0	0.6	0.3	0.15
		生活科学	1701~1703	2.0	1.2	0.6	0.3
		科学教育・教育工学	1801~1802	1.5	0.8	0.4	0.2
		科学社会学・科学技術史	1901	1.0	0.6	0.3	0.15
		文化財科学・博物館学	2001	2.0	1.2	0.6	0.3
		地理学	2101	2.0	1.2	0.6	0.3
		健康・スポーツ科学	2401~2403	2.5	1.5	0.8	0.4
子ども学	2451	1.0	0.6	0.3	0.15		
人文社会系	総合人文社会	地域研究	2701	1.0	0.6	0.3	0.15
		ジェンダー	2801	1.0	0.6	0.3	0.15
	人文学	哲学	2901~2904	1.0	0.6	0.3	0.15
		芸術学	3001~3003	1.0	0.6	0.3	0.15
		文学	3101~3105	1.0	0.6	0.3	0.15
		言語学	3201~3205	1.5	0.8	0.4	0.2
		史学	3301~3305	1.0	0.6	0.3	0.15
		人文地理学	3401	2.0	1.2	0.6	0.3
		文化人類学	3501	1.0	0.6	0.3	0.15
	社会科学	法学	3601~3607	3.0	1.8	1.0	0.5
		政治学	3701~3702	1.5	0.8	0.4	0.2
		経済学	3801~3807	2.0	1.2	0.6	0.3
		経営学	3901~3903	2.0	1.2	0.6	0.3
社会学		4001~4002	2.0	1.2	0.6	0.3	
心理学		4101~4104	3.0	1.8	1.0	0.5	
教育学	4201~4204	1.5	0.8	0.4	0.2		
生	社会経済農	経営・経済農学	7401	2.0	1.2	0.6	0.3

物系	学	社会・開発農学	7402	2.0	1.2	0.6	0.3
「Bの基準」の追加条件		Impact Factorが無い場合にあつては、優秀な水準と認められる査読付き学術誌を区分Bとする。例えば、西日本哲学会等、査読体制の整った学会誌等。					
「Aの基準」の追加条件		Impact Factorが無い場合にあつては、各研究領域において、特に優秀な水準と認められる学術誌を区分Aとする。例えば、日本哲学会、日本倫理学会、日本臨床心理学会、日本国語教育学会、日本家政学会等、各研究領域において日本を代表する学会の機関誌等（公法研究、民商法雑誌、民事訴訟雑誌等を含む）。					
「Sの基準」の追加条件		例えば、Bioethics, Philosophy and Public Affairs等、著名な国際的学術誌。Impact Factorが無い場合にあつては、各研究領域において、卓越した水準と認められる学術誌を区分Sとする。					
「SSの基準」の追加条件		例えば、Journal of Philosophy, Ethics, Nature等、トップクラスの国際的学術誌。Impact Factorが無い場合にあつては、各研究領域において、国際的に定評のある学術誌を区分SSとする。					
学術的著作・作品の追加条件		学術的著作の書評及び作品の評価の学術誌への掲載については、新聞などでの書評・紹介・引用、学術書等の文献目録での記載、他者の研究史・学界動向論文等における言及を含む。					

※社会経済農学の「経営・経済農学」「社会・開発農学」については、第1期の際の「農業経済学」のIF値を参考に記入。なお、本学において、該当者はなし。

（出典：熊本大学評価会議資料：「組織評価 自己評価書作成要領」平成26年5月23日付 pp. 11-12）

この判断基準によってSS評価あるいはS評価として選定された研究業績を、「学術的意義」と「社会、経済、文化的意義」に分けて以下に挙げる（（別表）「研究業績説明書」参照）：

資料 B-2-2-1-6：SS評価及びS評価研究業績

	SS	S	計
学術的意義	6	20	26
社会、経済、文化的意義	4	1	5
計	10	21	31

（出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成）

過去4年間でSSとSの本数は合計で31本ののぼり、これは文学部教員数約60名の約52%にあたる。著書・論文の合計数332本という数値も高いが、SSとSの判定基準を満たす論文・著書の本数も高い数値を示しており、質、量ともに高い水準にあることが分かる。

「観点1-1」で述べた外部資金や学内資金の活発な獲得状況、また「観点2-1」で述べたSSとSの研究業績に見られるIFの高い国内外雑誌での論文の受理・掲載、国内外での賞の受賞、全国レベル学会誌での高い書評などは、文学部の研究成果に対する外部からの評価の高さを示すひとつの証左となっている。

（水準）

期待される水準を上回る。

(判断理由)

1. 文学部教員による平成 22～25 年度の研究業績数は高い数値を示している。
 2. 論文・著書（計 332 本）の中の SS 及び S 業績は 31 本にものぼり、文学部教員数のほぼ 52%に相当する。その高い国内外雑誌への掲載論文の増加、全国レベル・国際レベルにある学会での高い評価（書評）の増加、海外の学会での賞の受賞の増加にある（別表「研究業績説明書」参照）。
 3. 前回第 I 期と今回第 II 期で<<「人と社会（社文系）の科学」に関する研究業績の判断基準>>における SS と S の判断基準内容に多少の変更はあるものの、今期 4 年間だけで第 I 期 6 年間の SS 及び S 業績総数 18 本を大幅に上回っており、活発な研究活動の成果が現れている。
 4. 外部資金や学内資金の活発な獲得状況（「観点 1－1」）、また SS と S の研究業績の増加に見られる IF の高い国内外雑誌への論文の受理・掲載、国内外での賞の受賞など（「観点 2－1」）は、文学部の研究成果に対する外部からの評価の高さを示すひとつの証左となっている。
- 以上の観点から、文学部における研究の成果は期待される水準を上回ると判断する。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目 I 研究活動の状況

高い質を維持している。理由は以下のとおり。

1. 教員全体による研究発表・シンポジウムは、平成 22～25 年度で総計 295 件もあり、研究活動は極めて活発である。
2. 研究発表・シンポジウムは国内学会にとどまらず、国際学会も多く、後者は約 21.4%を占めている。さらには、文学部教員が学会の主催にかかわっている事例も年々増えてきている。
3. 外部資金や学内資金の獲得状況も非常に良好である。「科学研究費補助金」、「共同研究」、「受託研究」、「寄付金」を、平成 22～25 年度で合計すると約 3 億 3700 万円にのぼり、さらに、「拠点形成研究」、「学術出版助成」、「学長裁量経費」、「国際共同研究スタートアップ支援」、「科研費インセンティブ」、「若手研究者支援制度インセンティブ」によって、同じく過去 4 年間に計約 3300 万円の助成金を獲得している。両者を合わせると、約 3 億 7000 万円の研究助成金を獲得することになる。これは人文社会科学系の学部としては極めて高い数値であり、活発な研究活動の証である。
4. 平成 21 年度の「科学研究費補助金」獲得合計金額は約 6300 万円であり、それと比べると平成 22 年度（約 5400 万円）、23 年度（約 5400 万円）、24 年度（約 5000 万円）、25 年度（約 6000 万円）といずれもわずかながら低い数値を示しているが、これは、4 年間配当の科研費の初年度 21 年度分が 1700 万円で、平成 22 年度～24 年度が約 600 万となっている項目が影響している結果である。つまり、平成 21 年度と比べて 22 年度～25 年度もほぼ同額の、高水準の科研費獲得状況と言える。件数は、平成 21 年度が 37 件で、22 年度 35 件、23 年度 39 件、24 年度 37 件、25 年度 37 件とほぼ変わらない。
4. 学部内の研究助成制度である「学術研究推進経費」、「国際学会発表助成」、「海外研究助成」の利用も活発で、毎年申請者が増加する傾向にあり、その配分ルールの見直しや、助成金の増額が検討されている状況である。
5. 平成 22 年度から実施の「サバティカル制度」の利用も活発である。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

重要な質の変化あり。大きく改善、向上している。理由は以下のとおり。

1. 文学部教員による研究活動（論文、著書、教科書・啓蒙書、翻訳、新聞・雑誌への投稿など）は、平成 22～25 年度において総計で 633 件という高い数値を示している。特に平成 25 年度に高い数値を示している。

2. 平成 22～25 年度の論文・著書の総数は 332 本で、それらのうち SS と S の水準にある論文・著書は合計で 31 本にのぼる。それは教員数約 60 名のほぼ 52% に相当する。別表「研究業績説明書」ではそれら 31 本の中から 22 本を厳選・掲載している。前回第Ⅰ期と今回第Ⅱ期で<<「人と社会（社文系）の科学」に関する研究業績の判断基準>>における SS と S の判断基準内容に多少の変更はあるものの、今回の 31 本という数値は、前回第Ⅰ期（6 年間：平成 16～21 年度）の 18 本を大幅に上回る数になっており、研究成果は明らかに向上している：

資料 4-(2)-A：第Ⅰ期（6 年間：平成 16～21 年度）の SS 及び S 業績

	SS	S	計
学術的意義	3	9	12
社会、経済、文化的意義	3	3	6
計	6	12	18

（出典：「第Ⅰ期 現況調査票（文学部）」を基に作成）

資料 4-(2)-B：第Ⅱ期（4 年間：平成 22～25 年度）の SS 及び S 業績

	SS	S	計
学術的意義	6	20	26
社会、経済、文化的意義	4	1	5
計	10	21	31

（出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成）

3. 外部資金や学内資金の活発な獲得状況（「観点 1-1」）、また SS と S の研究業績の増加に見られる IF の高い国内外雑誌への論文の受理・掲載、国内外での賞の受賞など（「観点 2-1」）は、文学部の研究成果に対する外部からの評価の高さを示すひとつの証左である。

IV 社会貢献の領域に関する自己評価書

1. 社会貢献の目的と特徴

文学部の社会貢献・地域貢献活動は、以下の各観点において述べるように極めて活発であるが、その目的・方針は特に文章化されて示されておらず、今後、早急に文章化し、明示する必要がある。しかし、文学部附属の機関である「永青文庫研究センター」のHPに表明されている以下の目的は、「文学部では」とある通り、文学部全体の社会貢献・地域貢献の目的・方針を前提に述べられているものである：

資料 IV-1-A：文学部の社会貢献目的

熊本大学文学部では、「教育・学術文化における地域連携と社会貢献」を目的として、高度な学術研究活動を行い、その知的資源を地域社会に還元するとともに、研究者等の人材育成に努める。

(出典：「熊本大学文学部附属永青文庫研究センターHP」より)

次年度に向けて、改めて、文学部全体の社会貢献・地域貢献の目的・方針を明示する予定である。

教員個人が具体的に取り組むべき社会貢献活動の指標としては、以下の5項目が掲げられている：

資料 IV-1-B：教員個人が取り組むべき社会貢献活動指標

1. 研究及び専門的学識の社会への還元
2. 学会等における活動の充実
3. 公開講座、出前講義等の充実
4. 市民と一緒に研究会等の活動状況
5. 外国人研究者等の積極的受け入れ

(出典：「平成25年度 文学部規則集」p. 40)

[想定する関係者とその期待]

在学生、卒業生、及び卒業生の受け入れ先となる組織や企業が想定される。在学生及び卒業生からは、社会や地域との連携に繋がる授業科目や課題研究の充実が、卒業生の受け入れ先となる組織や企業からは、社会及び地域を担うべき大学の学生としての幅広い知識、また専門的知識・能力を活かした、社会及び地域への貢献が期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

1. 「社会貢献」、「地域貢献」、「文化的貢献」の目的及び方針は、「文学部附属永青文庫研究センター」の文化的・社会的貢献における目的・方針に明示されている。

2. 「永青文庫研究センター」が、県内外、さらには国内外で、講演、シンポジウム、セミナー、学会発表を行い、さらに新聞その他を通して活発に発信している。

3. 国指定史跡の調査活動への参加、水俣病や、ユニセフと連携したアフリカ諸国についての社会・文化・歴史に関する活動、アフリカの若者たちとの交流推進など、全国レベルの、さらには国を超えた、教員個人による社会貢献活動も活発である。それらの活動はしばしば新聞等に紹介され、また著書や報告書となって活字化され、広く社会に発信されている。

4. 出前授業の出講は、九州全域の高校からの要求が年々増えてきており、それに対して

も、可能な限り対応している。

5. 「地域貢献」活動は「社会貢献」活動以上に活発である。人文社会科学系分野という専門性から、広範囲にわたって、地域の教育・啓蒙・歴史・文化等の振興に積極的に関わっている。その活動は地方版の新聞で頻繁に取り上げられ、地域の人々に周知されており、地域との関わり度、地域への貢献度は非常に高い。

6. 「授業開放科目」、「公開講座」、様々なイベントやセミナー等の実施、「研究生」、「科目等履修生」の受け入れなど、授業や講座を通しての地域貢献も活発に行われている。

7. 地域の教育力を活用し、学生の地域との連携強化に貢献する授業として「地域インターンシップ」の試みが平成 25 年度になされ、その恒常的な実施が現在検討されている。

【改善を要する点】

学科の専門性によるためでもあろうが、「社会貢献」、「地域貢献」活動ともに、学科間で多少の偏りがある点、改善を要する。例えば、総合人間学科及び歴史学科は、その性質上、地域や社会と密接に関わる領域であり、連携活動は自ずと活発である。一方、コミュニケーション情報学科や文学科においては、マーケット調査や、地域とゆかりの深い漱石やハーン研究など、部分的に地域との接点はあるものの、その他多くは外国の言語・文学に関わる場合が多く、社会や地域との接点が希薄にならざるを得ない。しかし、そのような領域においても、工夫の仕方によっては地域と連携する活動の可能性はあるはずであるので、今後その点で改善を目指す必要がある。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 大学の目的に照らして、社会貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

観点 1-1 社会貢献活動の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が適切に公表・周知されているか。

(観点到係る状況)

文学部全体の社会貢献活動の計画や方針は文章化して定められておらず、今後定める予定である。ここでは、現在既に明示されている、文学部附属の「永青文庫研究センター」の活動方針を挙げるが、「文学部を中心に展開している熊本大学拠点形成研究 B の実績を基に」(資料 C-1-1-1-1) とある通り、文学部所属機関としての活動方針であり、また、「人文社会科学系分野を中心とする研究及び文化振興の発展に寄与する人材の育成に資することを目的としている」(同資料) という方針はとりもなおさず文学部全体の方針でもある：

資料 C-1-1-1-1: 「永青文庫研究センター」活動方針

本センターは、文学部を中心に展開している熊本大学拠点形成研究 B (「永青文庫」資料等の世界的文化資源に基づく日本型社会研究) の実績を基に、永青文庫史資料の総合的な研究を通じて同史資料に立脚した拠点的研究を組織するとともに、文化行政機関等との連携によって地域文化に貢献し、人文社会科学系分野を中心とする研究及び文化振興の発展に寄与する人材の育成に資することを目的としている。

(出典: 「熊本大学文学部附属永青文庫研究センターHP」)

将来的には、社会文化科学研究科等関係部局との共同研究に発展させて人文社会科学系におけるグローバル COE の取得を目指すなど、本学部が社会貢献面でさらなる発展を遂げるためには本研究組織の方針・整備は極めて重要である。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

文学部の附属機関である「永青文庫研究センター」の文化的・社会的貢献、文化財保護・振興のための若手人材の育成の両面における目的・方針、及びそれを実現するための具体的な方針が適切に定められ、HP でも公表・周知されている。それは、学部としてはまだ未規定ながらも、文学部全体の方針でもあり、期待される水準にあると判断する。

観点 1-2 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

「永青文庫研究センター」は、熊本県教育庁文化課所管の「永青文庫常設展示基金」から毎年寄付金を受け、科研費基盤 (A) の資金と併せてスタッフをそろえ、貴重な文化遺産の基礎研究を進めている。県立美術館等での展覧会への協力、一般向け書籍の発行・監修、資料展、シンポジウム、セミナーの開催など、文学部の社会貢献活動の中心として、多岐にわたって活発に活動している。

平成 22~25 年度における同センター活動は以下の通り：

資料 C-1-1-2-1 : 「永青文庫研究センター」の活動

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
講演	30	9	23	21	83
シンポジウム		1	4	3	8
セミナー	11	3	4	5	23
学会発表		3	1	2	6
計	41	16	32	31	120

(出典 : 「熊本大学文学部附属永青文庫研究センター資料」を基に作成)

過去 4 年間に、県内外、また国内外で合計 120 回という極めて高い頻度で、講演、シンポジウム、セミナー、学会発表を行っている (県外実施 13 件、海外実施 5 件 : フランス 1 回、台湾 4 回)。

教員個人による社会貢献活動も行われている：

資料 C-1-1-2-2 : 教員個人による社会貢献活動

- ・「アフリカの子どもの日 in Kumamoto」(熊本ユニセフ主催)における分科会講師(1名)
- ・明治大学黒耀石研究センター運営委員(1名)
- ・東アジア比較文化国際会議日本支部理事(1名)
- ・福岡市市史編纂委員会における考古部会副委員長(1名)
- ・国指定史跡「大野窟古墳」範囲内容確認調査会議委員(1名)
- ・国指定史跡「大村横穴群」保存修理委員会委員(1名)

(出典：熊本大学評価データベース[TSUBAKI])

「アフリカの子どもの日 in Kumamoto」では、熊本ユニセフとの連携を通じて、若い世代(高校生が中心)に対するアフリカ諸国についての社会、文化、歴史等に関する知識の提供や、アフリカの若者たちとの交流推進の活動を行っている。

専門領域上、社会との関わりの深い学科にあっては、幅広く社会貢献活動を行っている教員も多い。総合人間学科の徳野貞雄教授の活動をその代表的な例としてここで挙げる。徳野教授は、熊本県という地域性を越えて、県内外、国内外で夥しい数の活動に携わっている。平成22～25年度(9月まで)の活動の概要を以下に記すが、それらはいずれもその地域での社会・農業・文化その他様々な活動・組織・グループにおける招聘講演、セミナー参加、研究会参加、招聘アドバイザー等の役割を担って参加しているものである：

資料 C-1-1-2-3：総合人間学科教員(徳野教授)による社会貢献活動例

<平成22年度>

- 4月 韓国合鴨水稲会会員研修会(大木町くるるん)
- 5月 『かがり火』(東京・明治大学)/西日本社会学会(福岡県大)/福岡市毎日新聞本社/全国環境自治体会議(大木町/第8回全国社会福祉学会(九大))
- 6月 宮城県農業会議(仙台市)/全国町村会基調講演(東京・麴町)/豊浦
- 8月 第20回合鴨水稲会全国大会(博多→桂川)/紀ノ川環境保全型農業研究会(和歌山・南部)/北海道道庁・農林部・農村計画課(札幌→室蘭)
- 9月 IRSA アジア農村社会学会(フィリピン)
- 10月 熊本県林業振興課(菊池)
- 11月 韓国/南筑後農協/熊本広告協会/福岡市農協/水俣/山都町立図書館/えびの/熊日シンポジウム/村落研究会(長野)/泰阜村/国土交通省(広島)/岡山大
- 12月 山鹿/えびの/ネパール/日本分析学会(宮崎大)/コココファーム/番頭さんの会/ほんわかネット
- 1月 小国(ツーリズム大)/小豆島(過疎逆)/国土交通省(博多)/京築/河内公民館(お米と野菜ソムリエ)/コココファーム/時間学会(九大)/博多/阿智村
- 2月 熊本農協県中/大分/平川(青森)/諸塚/ダム水源(広島)/環境塾(星野村)/内山節セミナー(川内市)/山鹿/コココファーム
- 3月 バングラディッシュ/大津/NPO100万人ふるさと回帰循環運動推進支援センター(人吉)/徳之島(農ネット21)/さんさんクラブ北九州

<平成23年度>

- 4月 西日本社会学会理事会(九大)/合鴨全国大会(東京)/諸塚/九州農文協(コココファーム)/村研理事会(つくば大サテライト)/コココファーム/村塾/船方/近畿大学/農文協(博多)/多良木(熊日依頼)/ムシロダ公民館(福岡市)
- 5月 コッコファーム/西日本社会学会(島根大学)/韓国/村塾
- 6月 小国(村研)/多良木/コココファーム(過疎逆)/水俣/ムシロダ公民館/チューリッヒ→イギリス
- 7月 村塾/佐伯(蒲江)/波野村/肥料商組合/徳之島(農ネット21)/日南市/山口大学(博論)/コココファーム/ムシロダ公民館/健康くまもと21推進市民会議/九大/益田→津和野

(吉賀町農政会議 西いわみ集落営農) /トルコ/福岡県青年農業士会営農研修会/西いわみ(日南町)

8月 伊勢農林(三重県大紀町) /きらり水源/村塾/ココファーム(生活農業論検討会) /農文協(西日本新聞) /多良木/ココファーム/農文協(東京) /農ネット22(東京) /水俣/多良木/木島平村/杵築→大分県庁→村塾/村研理事会(東京) /岐阜大→郡上市役所/ 国交省・灰犬塚ダム(広島)

9月 仙台→くりこま→仙台(合鴨) /えびの(調査) /多良木/日本社会学会(関西大) /多良木/むすび庵/小国/鳥栖高校

10月 鏡町/山口大学/JA やつしろ/旅館組合(博多) /松阪→南山/村落学会(小国)

11月 村塾/波野村/広島/水辺プラザかもと/行橋農林/杖立(村研会議) /印旗農林/日野町/もくもく/全国グリーンツーリズム大会(小国) /沖永良部/日南/多良木→村塾/九大/山大

1月 農文協(博多) /ツーリズム大学(博多) /ココファーム(21日エコかまど) /ココファーム(エコかまど) /多良木/福岡県中(博多・青年部) /春蘭の里/綾部/和良町

2月 熊本県中/ダム水源フォローアップ(広島) /全国合鴨大会(浅草) /弘前/杵築市/沖永良部/始良町/多良木・槻木(マスコミ発表) /愛林館(学生と) /内山節セミナー(浮羽)

3月 白木/山口大学/安木地域担い手育成(安木) /壱岐(NOSAI 県北) /JA むなかた/山都町/人吉/水俣/九大/日南市/農ネット22(鎌倉)

<平成24年度>

4月 白木/ココファーム→鹿児島/JA 筑紫/村塾(博多) /認定農業者大会(柳川)

5月 船方/農文協(愛林館) /白木/柳川→村塾(博多) /鹿児島/北九州市場→白木

6月 大分合同新聞(大分) /四日市→美濃加茂(学主伊東→長谷川) /ココファーム/白木/過疎逆(総領) /2012全国廃校活用現地セミナー(きらり水源) /村塾/白木/農ネット22(鎌倉) /九大/北九州市役所→伊都地区

7月 ぶどうの樹(体験農園) /水俣塾/えがおプロジェクト(吉塚・経産省ビル) /山大/熊本南区・農業振興(アスパル) /村塾(博多) /水俣(水俣テクノセンター審査)

8月 IRA(ポルトガル) /白木/九大/鍼灸師会(熊本) /北九州市場/倉吉/トルコ研修田(西条市) /農ネット(小樽) /留萌(三笠高校)

9月 富良野/道庁(札幌) /伊達紋別(北海道中小企業同友会) /長岡(震災関係) 山古志等/法政大/ココファーム/白木/農文協(博多) /愛林館(白木調査集計) /村塾(博多) /同志社大との研修(小国) /ダム水源(岡山) /北九州市場/体験農場打ち合わせ(大木町)

10月 多良木/農村デザイン塾(池田町) /体験農場(博多) /八女→星野村(茨木大・水) /棚田サミット(山都町・ココファーム) /JA 和歌山市/村研大会(智頭町)

11月 札幌/当別町/FM 留萌/都留文化大(茨木大・水) /えがおプロジェクト(NHK 東京) /村塾/綾部→船井郡/杵築/北九州市場/杵築

1月 農文協(博多) /沖永良部/ダム水源・国交省(広島) /九州ツーリズム大学(小国) /福岡県庁(体験農園打ち合わせ) /多良木→日南市(棚田) /ゴミ処理アドバイス(川崎町・ラピュタ) /津山/当別町/NPO 法人グランドネットワーク(旭川)

2月 和良町/南筑(みやま市) /北九州50周年式典(ソレイユホール) /体験農園(西日本新聞) /ゴミ処理(ラピュタ) /白木/白木/内山節セミナー(グリーンピア八女)

3月 水俣→ココファーム/多良木の人を連れて研修(総領町) /大牟田//和良町/北九州市場/山形/佐賀農協中央会/白木/多良木/九大/東京→会津→東京

<平成25年度>

4月 多良木/村塾/農文協(博多) /船方/沖縄/全国直売所研究会(東京) /村塾/水俣/クラシを科学する(ココファーム) /読売新聞→毎日新聞/大宮南地域里力再生協議会(丹後大宮)

- 6月 クラシを科学する（ココファーム）/過疎逆（総領町）/あべのハルカス・もくもく（大阪・天王寺）/クラシを科学する（ココファーム）/西日本新聞/村塾/石巻・相川（NHK）
- 7月 ドイツ→ベルギー→オランダ/農ネット 22（会津若松）/広島/村塾/石巻・相川（NHK）/岐阜
- 8月 直江津/九大/福井・武生/鴻文会・総会（山大）/津山農業普及センター/トルコ トラムゾン（JICA）
- 9月 過疎逆/ツーリズム大学（小国）/久木野/石巻→山形・相川→合鴨全国大会/杵築/村塾/農文協（西日本新聞）

（出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成）

学部として行っている社会貢献活動として、オープンキャンパスと高校への出張授業（出前授業）がある。文学部広報・情報化推進委員会が主催するオープンキャンパスは、毎年、高校の夏休み期間である 8 月に開催され、九州全域の高校が参加し、参加者数は年々増加している。実施要領は以下のとおり：

資料 C-1-1-2-4：平成 26 年度文学部オープンキャンパス実施要領

平成 26 年度 熊本大学文学部説明会（オープン・キャンパス）				
1	日時	2014 年 8 月 7 日（木） 13:00～16:30		
2	場所	文学部 A1（総合人間学科）、A3（歴史学科）、B1（文学科）、A2（コミュニケーション情報学科）、B2（保護者説明会）		
3	参加予定者	1,200 人程度		
4	配布資料	(1) 「2015 年度文学部案内」 (2) リーフレット（研究室マップと模擬講義時間割） (3) 「オープンキャンパス」アンケート		
5	学科長挨拶・説明			
	13:00～13:15	各学科長による挨拶、及び文学部案内、オープンキャンパス概要説明		
	13:15～13:20	来場者移動		
5	A1 教室	A3 教室	B1 教室	A2 教室
	司会進行：大辻委員	司会進行：中川（順）委員	司会進行：植田委員	司会進行：江川委員
	挨拶：慶田学科長	挨拶：小畑学科長	挨拶：坂口学科長	挨拶：ラスカウスキー学科長
◎7 月下旬～8 月上旬に詳細な進行表を学部長、学科長、及び各学科委員に配布				
6	模擬講義 13:20～15:30	各学科の模擬講義（講師は各学科 2 名、全体で 1 時間） 13:20～14:20、14:30～15:30 の 2 回実施。積極的に来場者の分散を図る。		

	A1 教室	A3 教室	B1 教室	A2 教室
	司会進行：大辻 委員	司会進行：中川（順） 委員	司会進行：植田 委員	司会進行：江川委員
	講師：佐藤・牧 野	講師：三澤・新井	講師：茂木・濱 田	講師：ラスカウスキ ー・江川
	14:20～14:30	来場者移動		
7	研究室訪問 13:00～16:30	学生研究室等での研究室紹介及び来場者の質問に対する回答 在学生の確保をお願いします。文学部から補助が出ます。		
8	保護者説明会 13:20～14:00	B2 教室。休憩室入り口でアンケートと質問票配布 学部長挨拶の後、教務・入試・学生支援・広報各委員長が質問に回 答		
<p>○会場混雑緩和のため、法文棟入り口を3箇所に分けて入り口で資料を配布します。</p> <p>○会場混雑緩和のため、13:00 から（各学科会場と同時進行で）研究室訪問を開始します。</p> <p>○資料配布・誘導・会場整理のため学生アルバイトを動員します。</p> <p>○B2 教室で保護者説明会を実施します。教務・入試・学生支援各委員長も質問回答のためご出席ください。</p>				

（出典：「文学部広報・情報化推進委員会」資料）

平成 25 年度から保護者説明会を行い、「質問票及びアンケート」を配布し、保護者の立場からの意見を集約している（「平成 25 年度熊本大学文学部オープンキャンパス保護者控え室懇談会質問票及びアンケート」）。研究室訪問では、各履修モデルの学生研究室で、在学生が中心となって、高校生からのいろいろな質問に答え、アドバイスをしている。研究室訪問をした高校生が受験をして、その履修モデルに入学してくるケースもある。

参加状況は以下のとおり：

資料 C-1-1-2-5：文学部オープンキャンパス参加状況

22 年度	参加者	高校生等	1600	人
		教 師		人
		保 護 者	20	人
		合 計	1620	人
23 年度	参加者	高校生等	1195	人
		教 師	2	人
		保 護 者	20	人
		合 計	1217	人
24 年度	参加者	高校生等	1049	人
		教 師	5	人
		保 護 者	30	人
		合 計	1084	人

25 年度	参加者	高校生等	1400	人
		教 師	10	人
		保 護 者	140	人
		合 計	1550	人

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

参加者数は平成 22 年度から大きく増加し、収容人数の関係で高校 2、3 年生に限るよう高校側への通達もあり、23 年度、24 年度といくらか緩和されたが、25 年度に 22 年度に近い参加者数まで再び上がっている。平成 26 年度オープンキャンパスに参加している高校数を地域別に見ると以下のようになっている：

資料 C-1-1-2-6：平成 26 年度オープンキャンパス参加高校数及び地域分布

熊本	24 校 (31.2%)	計 77 校 (100%)
福岡	13 校 (16.9%)	
佐賀	8 校 (10.4%)	
長崎	3 校 (3.9%)	
大分	11 校 (14.3%)	
宮崎	12 校 (15.6%)	
鹿児島	6 校 (7.8%)	

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

ここ数年、九州全域、さらには九州外の高校から、出張授業の要望が多くあり、希望される学科・コースの教員が高校に出向き、学部の紹介、模擬授業、入試の説明などを行っている：

資料 C-1-1-2-7：出張授業実施状況

年度	回数	場所 (県名)
22 年度	10	熊本 4、福岡 2、鹿児島 2、宮崎、長崎
23 年度	24	熊本 12、長崎 4、佐賀 3、福岡、宮崎、大分、鹿児島、広島
24 年度	23	熊本 11、福岡 6、鹿児島 3、長崎 2、広島
25 年度	11	熊本 4、福岡 2、長崎 2、鹿児島 2、大分
計	68	

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

1. 教員個人によって、また「文学部附属永青文庫研究センター」の活動を通して、社会貢献活動が極めて活発になされている。

2. オープンキャンパスが夏休み期間に行われ、文学部に対する九州全域の高校の期待・関心に応えるものとして有用なイベントとなっている。

3. 出張授業も適切に実施されている。

以上の観点から、計画に基づいた活動は適切かつ活発に実施されており、期待される水準を上回ると判断する。

観点1-3 活動の実績及び活動への参加者等の満足度等から判断して活動の成果が上がっているか。

(観点到に係る状況)

社会貢献活動の実績・成果として、まず「永青文庫研究センター」から刊行されている論文・著書その他が挙げられる。細川家文書の調査結果とその価値を刊行物として社会に発信するそれらの研究成果は、全国レベルの歴史・文化等資料を世に問う研究成果であり、日本社会への重要な貢献となっている（以下、前掲資料 B-2-2-1-2 と同一資料）：

資料 C-1-1-3-1 : 「永青文庫研究センター」刊行の著書・論文

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
著書（単著）	2	0	3	3	8
著書（共著）	7	7	6	3	23
論文	15	6	8	8	37
その他	12	3	6	4	25
計	36	16	23	18	93

(出典：「熊本大学附属永青文庫研究センター資料」を基に作成)

資料 C-1-1-3-2 : 「永青文庫研究センター」刊行の著書名

- ・『永青文庫叢書 細川家文書 中世編』（吉川弘文館、2010）
- ・『細川幽斎 戦塵の中の学芸』（笠間書院、2010）
- ・『永青文庫叢書 細川家文書 近世初期編』（吉川弘文館、2012）
- ・『細川家の歴史資料と書籍』（吉川弘文館、2013）
- ・『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編Ⅱ』（吉川弘文館、2013）
- ・『細川家の歴史資料と書籍 永青文庫資料論』（吉川弘文館、2013）
- ・『永青文庫叢書 細川家文書 故実・武芸編』（吉川弘文館、2014）

(出典：「熊本大学附属永青文庫研究センター資料」より)

同センターにおける資料の整理や基礎的研究を通して、長年にわたって熊本県の歴史文化研究に貢献してきた川口恭子氏の功績に対して「平成 23 年度熊本市有功者賞」が授与されている。

文学部教員の研究や著述が、全国版あるいは他県の新聞（朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、西日本新聞、日本農業新聞、京都新聞、中国新聞、南日本新聞、その他）に紹介掲載されている例も数多い：

資料 C-1-1-3-3：文学部教員の研究・著述についての新聞記事掲載数

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
総合人間学科	15	10	6	29	60
歴史学科	3	6	25	16	50
文学科	3	1	1	4	9
コミュニケーション情報学科	1	0	1	0	2
永青文庫研究センター	2	1	1	2	6
計	24	18	34	51	127

(出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成)

全国放送版のテレビやラジオ出演によって、文学部から全国へ発信している社会貢献の成果例もある：

資料 C-1-1-3-4：文学部教員のテレビ・ラジオ出演例

<p><22 年度> NHK くまもと：とまどう農家と中国人研修生 検証 外国人研修技能実習制度</p> <p><24 年度> NHK 福岡：徹底討論ふるさと再生スタジアム 「九州沖縄“観光王国”を目指すには何が 必要か」 NHK 第 2：文化講演 「徳野塾収録」(全国放送)</p> <p><25 年度> NHK 総合：復興サポート“限界集落”を未来につなぐ～石巻市・北上町相川～</p>

* 「NHK くまもと」も入れてある。

(出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成)

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

1. 「文学部附属永青文庫研究センター」の活動成果として発信されている出版物その他は、細川家文書の調査・分析を通して、日本の歴史・文化の諸相を全国規模で社会に発信するものであり、その貢献度は極めて高い。

2. 文学部教員による、全国版新聞（朝日新聞、読売新聞）での掲載記事を通しての社会への発信は年度ごとに増加している。

以上の観点から、文学部教員の活動の実績・成果は期待される水準を上回ると判断する。

観点1-4 改善のための取り組みが行われているか。

(観点に係る状況)

1. 「文学部附属永青文庫研究センター」による社会貢献活動のほかにも、東アジア、水俣病、国指定史跡、ユニセフと連携したアフリカ諸国についての社会・文化・歴史等に関する活動など活発であるが、それらが今後ともに継承、発展されるべく、人員や予算の補強・充実を目指して取り組んでいる。

2. 「永青文庫研究センター」の教育研究活動が評価されて、熊本県、文化行政機関等との連携実績を積むことができれば事業の継続性が担保される。さらに、将来的には文学部を中心に、社会文化科学研究科、附属図書館、五高記念館等関係部局と共同して人文社会科学系初の学内共同教育研究施設を整備することができれば、人文社会科学系の重点研究の支援、個々の独創的研究及び学際的な共同研究の支援に繋がり、そこから生じる国内外への大きな貢献が可能となる。そのためにも、同センターにおける「永青文庫細川家資料総目録」を活用した研究を進展させ、日本近世の歴史文化研究の拠点形成を目指し、同時に研究成果の社会への還元のための活動を継続することが必要と考え、調査・研究・発信の方策、そのあり方・方向性、また人的・資金的充実化等を含めた運営基盤の強化・改善に取り組んでいる。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

「文学部附属永青文庫研究センター」を中心に、文学部における各教員の研究を通じた今後の社会貢献活動の強化・改善の状況・方向性が明確・適切であり、期待される水準にあると判断する。

分析項目Ⅱ 大学の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

観点2-1 大学の地域貢献活動の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が適切に公表・周知されているか。

(観点に係る状況)

地域社会への貢献及び地域社会との連携が『文学部案内』で明示されている：

資料 C-2-2-1-1：地域社会貢献・連携の計画・方針

文学部附属永青文庫研究センターでの研究・社会貢献を筆頭に、各学科での地域社会の課題解決へ向けた活動などを通して、地域社会への貢献及び地域社会との組織的な連携を図っていく。

(出典：『平成26年度文学部案内』p.45)

『文学部案内』は、新入学生、在学生、及びオープンキャンパス参加者（高校生、引率教

論、保護者)に配布されているほか、九州圏内における進学説明会や出張授業先の高校でも配布され、広範囲に周知されるべく方策が採られている。さらに、文学部教務担当の窓口でも、申し出があれば、配布している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

地域貢献活動の計画や基本的な方針が明確に定められ、また、その公表も適切かつ広範囲になされており、期待される水準にあると判断する。

観点 2-2 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

地域への教育課程上の貢献活動として、大学を卒業した人、あるいは高校卒業以上の資格を持った人を対象に「研究生」、「科目等履修生」の受け入れを行っている（『平成 26 年度学生便覧』 pp. 107-108）。平成 22～25 年度の実績は以下のとおり：

資料 C-2-2-2-1：「研究生」・「科目等履修生」受け入れ状況

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
研究生	1		1		2
科目等履修生	1	1	2	2	6
計	2	1	3	2	8

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

これは日本人を対象にした「研究生」及び「科目等履修生」で、地域貢献活動として述べるが、外国人留学生に対しての同様の受け入れは国際化のひとつとして、「Ⅴ. 国際化の領域」で述べている。

文学部の教員が、生涯教育のひとつとして一般の人へ授業を開放する「授業開放科目」の制度がある。教養科目、文学部科目、社会文化科学研究科科目、放送大学提供科目の 4 種類ある：

資料 C-2-2-2-2：授業開放科目とその実施状況

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
教養科目	10	6	6	6	28
文学部科目	8	9	11	5	33

社会文化科学研究科科目	1	1	2	1	5
放送大学科目		4	4	5	13
計	19	20	23	17	79

(出典：「政策創造研究教育センター：生涯学習教育部門資料」及び「人文社会科学系事務ユニット資料」を基に作成)

資料 C-2-2-2-3：文学部教員担当による教養教育関係の開放科目名

22年度：「フランス語 III-1」、「フランス語 III-2」、「コリア語 I-1」、「コリア語 I-2」、「コリア語 II-1」、「コリア語 II-2」、「言語の構造と歴史 D (地域の言葉)」、「学際科目 1-5 (人権と性を考える)」、「学際科目 1-9 (ハンセン病講座)」、「学際科目 1-82 (英国留学へのいざない)」
23年度：「フランス語 III-1」、「フランス語 III-2」、「言語の構造と歴史 D (地域の言葉)」、「学際科目 1-5 (人権と性を考える)」、「社会連携科目 3 (ハンセン病講座)」、「学際科目 2 (英国留学へのいざない)」
24年度：「フランス語 III-1」、「フランス語 III-2」、「社会連携科目 2 (人権と性を考える)」、「学際科目 22 (欧米映画の思想と文化)」、「自然と人間の地理学 B」、「社会連携科目 3 (ハンセン病講座)」
25年度：「フランス語 III-1」、「フランス語 III-2」、「心理学の探求 B」、「社会連携科目 2 (人権と性を考える)」、「ハンセン病講座」、「自然と人間の地理学 B (日本の経済地理学)」

(出典：「政策創造研究教育センター：生涯学習教育部門」資料を基に作成)

資料 C-2-2-2-4：文学部教員担当による学部専門教育関係の開放科目名

22年度：「英語学概論 I」、「英語学概論 II」、「英文学史 II」、「仏語学概論」、「仏語学特殊講義」、「独語学特殊講義」、「中国語学概論」、「中国文学史 I」
23年度：「英語学概論 I」、「英語学概論 II」、「英文学史 II」、「仏語学概論」、「仏語学特殊講義」、「独語学概論 II」、「独語学演習」(前・後期)、「中国語会話」
24年度：「英語学概論 I」、「英語学概論 II」、「英語学特殊講義」、「仏語学概論」、「仏語学特殊講義」、「独語学概論 I」、「独語学演習」(前・後期)、「中国語会話」、「中国語作文」、「地域社会学概論 I」
25年度：「仏語学概論」、「仏語学特殊講義」、「独語学演習」、「中国語会話」、「中国文学史 I」

(出典：「政策創造研究教育センター：生涯学習教育部門」資料を基に作成)

資料 C-2-2-2-5：文学部教員担当による大学院関係の開放科目名

22年度：「フランス語学研究 (語学文献を読もう)」
23年度：「中国古典文学論」(前・後期)
24年度：「中国古典文学論」(前・後期)
25年度：「中国古典文学論」

(出典：「政策創造研究教育センター：生涯学習教育部門」資料を基に作成)

資料 C-2-2-2-6：文学部教員担当による放送大学への提供科目名

23年度：「人文地理学 I」、「西洋史概説」、「日本文学概論 II」、「メディア論」
24年度：「人文地理学 I」、「西洋史概説」、「日本文学概論 II」、「メディア論」
25年度：「人文地理学 I」、「地域社会学概論 I」、「日本史概説 I」、「日本文学概論 II」、

「コミュニケーション論」

(出典：「政策創造研究教育センター：生涯学習教育部門」資料を基に作成)

ほかに、「公開講座」、「テレビ・ラジオ公開講座」、「講演会・セミナー」、「研修会」がある（中期計画番号：K50）：

資料 C-2-2-2-7：「公開講座」・「テレビ・ラジオ公開講座」

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
公開講座	1	2	2	2	7
テレビ・ラジオ公開講座	2	2	2	1	7
計	3	4	4	3	14

(出典：「政策創造研究教育センター：生涯学習教育部門」資料を基に作成)

資料 C-2-2-2-8：「公開講座」の内容

- 22年度：ワーグナー芸術への招待：『ニーベルングの指輪』第1部・第2部
 23年度：ワーグナー芸術への招待：『ニーベルングの指輪』第3部・第4部、
 宗教と思想から見た「生」と「死」
 24年度：ワーグナー芸術への招待：『ニュルンベルグのマイスタージンガー』・『パルシバル』、世界の宗教と思想から見る「あの世」
 25年度：ワーグナー芸術への招待、人間バツハを育てた風土と芸術

(出典：「政策創造研究教育センター：生涯学習教育部門」資料を基に作成)

資料 C-2-2-2-9：「テレビ・ラジオ公開講座」の内容

- 22年度：＜テレビ＞「探検！まるごと熊大キャンパスライフ」
 ＜ラジオ＞「熱血先生になりたい！」
 23年度：＜テレビ＞「私はここで輝く。～熊大の女性プロフェッサーたち～」
 ＜ラジオ＞「過去の扉を開く～発掘調査現場で学ぶ～」
 24年度：＜テレビ＞「いまを生き抜く知恵がある！熊大イチ押し研究室」
 ＜ラジオ＞「知的冒険の旅」
 25年度：＜ラジオ＞「知的冒険の旅」

(出典：「政策創造研究教育センター：生涯学習教育部門」資料を基に作成)

資料 C-2-2-2-10：地域連携イベントやセミナー活動

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
21世紀文学部フォーラム	1	1	1	1	4
高齢者向け情報利活用セミナー	1	3	2	2	8
コミュニティ音楽療法	41	39	43	42	165
レトロコンサート	2	2	2	2	8

児童デイサービス 音楽療法	20	22	20	21	83
高齢者施設におけ る音楽療法	—	—	22	34	56
その他の講演会・ 研修会	22	30	31	35	118
計	87	97	121	137	442

(出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成)

「21世紀文学部フォーラム」は、文学部研究推進・地域連携委員会の主催で年1回開催されているもので、文学部所属教員の最新の研究成果を地域社会に還元することを目的に平成16年度から始められた。特定のテーマを掲げてフォーラムを行い、一般参加者を含めて、問題解決を考える場と機会を提供している（文学部広報・情報化推進委員会編『文学部通信』第10、11、12号参照）：

資料 C-2-2-2-11：21世紀文学部フォーラムの内容

- ・21世紀文学部フォーラム「現代中国の日本論」（2013）
- ・21世紀文学部フォーラム「東日本大震災は社会をどう変えたか？」（2012）
- ・21世紀文学部フォーラム「東日本大震災以後を考える：歴史から何を学ぶか」（2011）
- ・21世紀文学部フォーラム「犯罪へのまなざし」（2010）

(出典：広報・情報化推進委員会編『文学部通信』第10、11、12号)

上掲資料 C-2-2-2-10 の各種地域貢献イベントの内容は以下のとおり：

資料 C-2-2-2-12：上掲資料 C-2-2-2-10 の各種地域貢献イベントの内容

- ① 高齢者向け情報利活用セミナー（パソコンお困り相談会）（月2回程度）
- ② 子飼商店街におけるコミュニティ音楽療法の実践（2006年～、週1回、平成26年3月まで330回実施）コミュニティ音楽療法とは、地域を対象とする広く開かれた音楽療法で、近年欧米を中心に盛んに実践されているもの。音楽による在宅高齢者の健康増進とコミュニティ作りを目的とし、商店街の活性化も射程に入れている。子飼商店街内の空き店舗を借り上げ、地域の高齢者（主に独居者）を対象に実施。
- ③ レトロコンサートの開催（2006年度～、年2回、現在まで14回開催）上記②のコミュニティ音楽療法の発展形として、高齢者と地域住民の交流、及び地域文化振興を目的としたコンサートを学内施設（くすの木会館、工学部百周年記念館、熊本県立劇場）において開催。
- ④ 熊本市児童デイサービスにおける音楽療法の実施（2008年～、月2回、平成26年3月まで124回）熊本市の依頼により、市内の保育園にて、デイサービスにおける音楽療法（正式名称「おんがく遊び」）を実施。
- ⑤ 高齢者施設における音楽療法の実施（2012年～、月4回、平成26年3月まで57回）市内の高齢者施設において個人及び集団音楽療法を実施、理学療法士を中心とするコメディカル職員との連携を強化した新しい音楽療法モデルの確立を目指している。
- ⑥ 熊本大学水俣病学術資料研究推進室構成員（4名）
- ⑦ 熊本大学水俣病学術資料研究推進室による特別公開講演（1名）
- ⑧ 「水俣市『愛林館』の機能変容と地域役割」（『愛林館』沢畑館長と共同調査を行い、『愛林館』18年間の社会的活動の変化と意義について検討）
- ⑨ 「熊本県多良木町槻木地区地域社会調査」（多良木町役場企画課と共同調査を実施、超限界集落の再生プランを検討）

- ⑩ 「福岡県八女市白木地区地域社会調査」(白木地区地域振興協議会との共同作業を実施、白木小学校廃校による跡地利用を軸に検討)
- ⑪ アフリカ人類学セミナー (1名)
- ⑫ 熊本大学学術資料調査研究推進室公開講演会 (ラフカディオ・ハーンについて)

(出典：文学部研究推進・地域連携委員会資料：「文学部の地域連携活動について」2012年11月30日付)

平成 23 年度に開設された文学部図書室は基本的に学部内関係者を対象としているが、外部者にも利用され、地域の人たちの知的活動をサポートするものとしての一面を担いつつある。設置後まだ 3、4 年ということもあり、過去 3 年間での外部利用者数はそれほど多くはないが(資料 C-2-2-2-13)、今後周知されるに従い、貢献度も上がる可能性がある：

資料 C-2-2-2-13：文学部図書室の外部利用者

年度	人数	計
23 年度	4	18
24 年度	13	
25 年度	1	

(出典：文学部研究事務室資料を基に作成)

地域との関わりそのものを内容とする授業の試みが平成 25 年度からなされている。授業科目名は「地域インターンシップ」(仮称)とし、主旨は「熊本県全体を大学のキャンパスに見立てて、大学から地域に出て、地域で(に)学ぶ。地域社会も優れた教育力を持っている。その教育力を活用する」、「大学では普段会うことができない地域社会で様々な問題に取り組んでいるたくさんの人に出会い、話を聞くことで、多くの気づき・学びをする。そういった貴重な体験が学生を成長させる」、「課題発見・解決能力やコミュニケーション力をつけるだけでなく、総合的な「社会人力」も養成する」である。その実施状況の一端を示すために、5泊6日の実施日の2日分の活動スケジュール内容と、実施後に参加者から提出された報告著の一部を挙げる：

資料 C-2-2-2-14：「地域インターンシップ」活動スケジュール内容例

8/20(火)

07:00 起床、朝食

08:00 相思社職員と顔合わせ

09:00 相思社出発…相思社職員(Aさん)の運転で頭石へ。Bさん、及びCさん(水俣若者グループ「あばあこんね」のメンバー)とともに。

到着後、Bさんから簡単に「あるもの探し」の作法の講義

10:00 あるもの探し…案内人(Dさん)からの簡単な講話の後、フィールドワーク。Dさんが案内し、参加者が質問する形で展開

12:00 昼食…村の方々による郷土料理。食後まもなく、Dさんへのインタビュー

14:00 共有化、絵地図づくり、発表…各自で頭石の絵地図作成。作成後、Dさんと料理をつくってくださった方の前で発表

17:00 頭石出発…相思社への途上、エムズにて買い物

18:00 振り返り、ディスカッション…印象、深かったことなどを口頭で、明日の予定の打ち合わせ

19:00 夕食、風呂、就寝…太鼓集団「響」と共に夕食。Aさん、Cさんとともに。

備考:

・あるもの探しは非常に体力を消耗した模様。快晴時は2リットルペットボトル程度の水分補給が必要

8/22(木)

08:00 起床、朝食

08:30 相思社を出発

08:50 みなくるバス乗車…陣原団地前バス停から回数券(10枚綴り1000円)を購入、150円(回数券一枚)で目的地に到着

09:15 ほっとはうすみんなの家到着

10:00 朝ミーティングに参加、挨拶

10:30 作業…二階作業室でエコバッグ作成。患者さんに自己紹介

11:00 オリエンテーション…施設長(Eさん)によるオリエンテーション。

各自、自己紹介と水俣研修の目的を説明

12:00 昼食…ほっとはうすにて

12:45 散歩…利用者とともにエムズまで散歩。途中、職員(Fさん)と会話。

13:30 作業…一階作業室で各自作業。

14:30 講和①「ソーシャルワーカーとして出会った水俣から見えたこと」Gさん

16:00 Hさん送迎…Eさんの運転で、Iさんの話を聞く。

チッソ、水俣病資料館、語り部の話

17:30 ほっとはうす到着、振り返り…Eさんとともに振り返り、明日の打ち合わせ

18:00 夕食…ほっとはうすにて

19:00 ほっとはうす出発…途上、エムズに寄って買い物。その後タクシーで相思社へ

20:00 風呂、就寝…集会棟の掃除

備考:

- ・疲労の蓄積により、体力が限界に近づいている
- ・九看大のボランティア玉名と共に行動する場面もあった

(出典:「2013年度熊本大学文学部<地域インターンシップ:水俣研修>についての引率者報告書(M君作成)」)

参加した学生が、この研修からいかに多くのことを学んでいるか分かる。この授業の恒久的な実施はまだ検討中の段階であるが、将来的には、水俣に限定されず、他の県内諸地域を対象としている。

(水準)

期待される水準を上回る。

(判断理由)

1. 「研究生」、「科目等履修生」の受け入れ、また、授業科目の開放、各種の公開講座など、授業や講座を通しての地域貢献が適切かつ活発に行われている。
2. 平成23年度から開設された文学部図書室を利用する外部者もあり、地域社会の人たちの知的活動をサポートするものとして貢献している。
3. 地域とじかに関わる授業「地域インターンシップ」の試みは、地域貢献に繋がる新しい授業の開拓として評価できる。
4. ほかに、種々のイベントやワークショップなどが活発になされており、文学部全体

として、地域社会への貢献活動は極めて活発である。

以上の観点から、文学部における地域貢献活動は期待される水準を上回ると判断する。

観点 2-3 活動の実績及び活動への参加者等の満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。

(観点に係る状況)

平成 22～25 年度における文学部教員の研究や活動が『熊本日日新聞』に掲載された記事数は以下のとおり：

資料 C-2-2-3-1：研究・活動に関する『熊本日日新聞』記事掲載数

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
総合人間学科	13	19	12	13	57
歴史学科	15	20	16	17	68
文学科	21	14	10	14	59
コミュニケーション情報学科	4	0	2	2	8
永青文庫研究センター	42	6	11	16	75
計	95	59	51	62	267

(出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成)

この表で示される、地方版新聞の掲載回数と、前掲資料 C-1-1-3-3(「社会貢献」)で示した全国版及び他県の新聞への掲載記事数(22 年度 14 件、23 年度 16 件、24 年度 31 件、25 年度 41 件)を合わせると、地方、全国合わせた、文学部教員が関わる記事数は非常に多い：

資料 C-2-2-3-2：地方版新聞・全国版新聞での記事掲載数

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
総合人間学科	28	29	18	42	117
歴史学科	18	26	41	33	118
文学科	24	15	11	18	68
コミュニケーション情報学科	5	0	3	2	10
永青文庫研究センター	44	7	12	18	81
計	119	77	85	113	394

(出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成)

「文学部附属永青文庫研究センター」の社会貢献については「観点 1-1、1-2」で述べたが、その成果は、地方紙新聞その他、地域へ発信されている刊行物への記事の投稿・掲載となって現れ、地域への貢献度も非常に高い：

資料 C-2-2-3-3：「文学部附属永青文庫研究センター」関連の地方版刊行物掲載数

	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
熊本日日新聞	10	7	5	10	22
熊本ルネサンス	1	2		1	4

くまにちあれんじ				1	1
熊大通信	1				1
計	12	9	5	12	38

* 『熊本日日新聞』の10回は、6月7日～8月16日の連載。

(出典：「熊本大学文学部附属永青文庫研究センター」資料を基に作成)

「地域インターンシップ」の試みの成果の大きさ、参加学生たちの満足度は、参加した学生たちの以下の報告書がよく示している：

資料 C-2-2-3-4：「地域インターンシップ」報告書

<文学部学生（歴史学科）A君報告書より抜粋>

地域で学び地域に学ぶという題が、今回の合宿に掲げられていたので、率直に、学べることはあるかということをも最上の疑問として頭に置きつつ水俣に出発した。小学校をはじめとして今まで、水俣病関連のことに関しては、座学でしか学んだことしかなかった。同じようなことを教えられ、ある程度水俣病についてのイメージは固定化しつつあった。しかし、今回、実際に水俣に足を運んだことにより、固定化しつつあった、知識とイメージは間違いであったことがわかり再構築を余儀なくされた。よって結論から言うと、地域から学べることはあった。それも数多くあったのだ。(中略)

様々な立場の人々の中で、最も私が興味をひかれたのは水俣市元市長のBさんである。彼は水俣病と水俣の歴史と現状に関して最も現実的なアプローチをしてくださった。多くの方々のお話を聞いたが、チッソと直接かかわり、感情にあまり左右されずにチッソの視点も加味してお話してくださったのは彼だけであった。私個人としては、水俣病のことを考えるうえでチッソ側の視点も欠かせないと考えている。よってBさんのお話は非常にありがたかった。彼の話の中で、最も印象深かったのは、水俣病の直接的原因を引き起こしたチッソが憎いにもかかわらず、敗訴して危機的状況になったチッソをまず救済しなければ水俣の救済は望めないというこのジレンマである。しかも、このようなことになるとは予想していなかったとは言えチッソを誘致したのは水俣市民たちなのだ。私にとってこの現状こそが興味深かった。真の責任が一体どこにあるのかわからず、ただ感情に任せてチッソを批判し、患者の救済を叫んだところで水俣病問題の根本的解決にはなりえない。チッソと患者と市民と行政すべてを含んだもやい直しが大切ではないかと感じた。

<文学部学生（歴史学科）C君報告書より抜粋>

今回私が「地域インターンシップ」に参加した目的の一つに、「教科書の水俣から実体験としての水俣へ」というものがあつた。結論から言うと、これはかなりの実感を伴って達成できたと言える。それは特に、実際に胎児性患者の方々とは触れ合ったことに起因している。それまで水俣病はほとんど無縁のものだと考えていたが、実際に患者の方々にインタビューをしたりともに食事をしたりすると、動作の不自由さなどはあるものの、彼、彼女らと私たちには何の違ひも存在しないのだと感じた。実際に体験することでそれまでの先入観が完全に消え去り、今まで自分は本当にひどいことを考えていたのだと深く反省した。

また、水俣病の被害から立ち直ろうとしている人々との出会いも、自分にとって非常に有意義なものとなった。特に私の心に残っているのは地元の若者団体「あばあこんね」である。そのうちのお二人とは前半の三日間を通して交流したが、彼らの水俣を元気にしようとする熱意はよそ者の私にも伝わり、少しでもお手伝いをしたいという気持ちが起こるほどであった。

一方でD商店さんのお話では、「きれい」な水俣は表面上のもので、実は「きれいでは

ない」水俣のほうが実態なのだということも学んだ。美化された水俣だけではなく、その実態を知ることができたという点では、それも実際に足を運ばなければ得られなかった視点である。(中略)

今回の「地域インターンシップ」を通して私は非常に多くのことを学ぶことができた。去年小松先生がおっしゃっていたフクシマとミナマタの関係性も身をもって感じることもできた(福島はまだ訪れてはいないが)。さらに、ミナマタを考えることでフクシマのことも深く考えるようになった。汚染水問題が解決を急がれるなか東京オリンピックの開催も決定したが、簡単には喜べないのもミナマタを実際に勉強してきたからである。その点、水俣病というある意味「過去」の出来事を学ぶことは、「現在」もしくは「未来」を考えることにとっても寄与するのではないかと思う。こうしたことは恐らく実際に水俣に行かなければ分からない。来年度以降、是非この授業が開講され、多くの学生が参加することを期待する。

<文学部学生(歴史学科) E君報告書より抜粋>

当初は、水俣病に関する知識・理解を深めるためにインターンシップに行くと考えていた。しかし、相思社日程の地元学やあるもの探しを通して、現在の水俣市の活性化策を考えるという、「インターンシップ」の名にふさわしい活動を行った。「インターンシップ」の目的は、ほっとはうすでの患者さんとのふれあいであると考えていた。だが、水俣市の経済と観光産業を実践的に考えるのも、貴重な体験であった。水俣市と言えば「水俣病」というイメージが全国的に強く持たれている。その「水俣病」によって被害を受けた生命や環境というワードに着目し、それを町の観光資源として活用しようとする取り組みは、暗いイメージの地域「水俣」のイメージ回復や現状との違いを訴えるものであると感じた。「ほっとはうす」では、胎児性の患者さんとのふれあいや水俣元市長の Bさんへのインタビューと、大変貴重な経験をした。患者の皆さんは、幼い頃から偏見やいじめで苦しんだ経験、突然の身体の不自由で苦しんだ経験をしているにもかかわらず、その苦しさを克服しているかのような明るい雰囲気や話にこたえてくれた。大学生の生活にも興味をもっていたら、お互いに価値観を交換できた。偶然ではあるが、環境庁の職員の方からの話も聞けて有意義であった。さまざまな人と交流することで、水俣病に関する問題は複雑であることが分かったが、当事者本人たちが「人間同士のいがみ合い」が問題の本質であると自覚していた。それぞれの立場によって言い分が異なるから、中立的な立場からの解決は難しいと話していた。また、水俣市は現在過疎化が進み、若者の数が減ってきている。「水俣病」イメージからの脱却のため、外部から人を呼び込むために観光産業に力を入れ、水俣の活性化に努めている団体の存在も知ることができた。(中略)

コミュニケーション能力の向上という観点で今回のインターンシップを考えてみる。今回は様々な立場の人と話す機会があった。「失礼のないように」とか「どのように接したらよいか」など、気持ちの負担があった。言葉遣いや姿勢によって、相手が自分に興味を抱いてくれる振幅も違うことを実感した。様々な人との会話を通して、相手が聞いてほしいことをある程度は察することが大事だと感じた。それが会話に一貫性を持たせ、話の軸を据え、お互いがコミュニケーションをうまく取れていると実感できる助けになるのではないかと。私たちは「世の中には色々な考えを持っている人々がいる」ことは理解しているが、その「色々な」の範囲を実感できていないのではないかと。私は今回のインターンシップで様々な立場の人と接することでそれを感じた。「色々な考えを持っている人」の存在を知っていることと、その人たちと「実際に話す」ということの意味は全く異なる。自分と違う話し方、表現、社会的立場、時には性、そして価値観を持った生身の人間と実際に話すことは、新鮮さもあるが、自分自身のコミュニケーション能力がいまいちだと精神的負担は大きい。

今回のインターンシップは文学部の学生を対象とした授業の開講のための試験的取り組みであった。私はこの内容に有意義さを感じた。私たちが普段使う「コミュニケーション

能力がないから、高めないといけない」とか「本は読むが人とは話さない」と言ったときの「コミュニケーション能力」や「人」というものの認識範囲は非常に狭いのだと実感した。このインターンシップでは、あらゆる利害や立場の人が存在する「水俣病」問題を学びに行くことで、まずは自分自身の描いていた「コミュニケーション能力」というものの矮小性を実感し、それから考え、そして人と接することで自己の人間性や能力を高めることができるのではないかと感じる。

(出典：「2013年度熊本大学文学部「地域インターンシップ」水俣研修についての引率者報告書(M君作成)」中の「参加者報告書」より)

観点2-2で述べた「21世紀文学部フォーラム」の成果として、その内容が活字になり、学際的な視点・思考を問うものとして社会及び地域に発信されている：

資料 C-2-2-3-5：「21世紀文学部フォーラム」叢書

『越境する精神と学際的思考』（熊本大学 21世紀文学部フォーラム叢書）（熊本大学文学部研究推進地域連携委員会編）（熊本出版文化会館、2010）

(出典：熊本大学文学部 HP)

同じく観点2-2で述べた「音楽療法活動」やセミナーに対しては、参加者の満足度を示すコメントや意見が多く寄せられている。また、「21世紀文学部フォーラム」の参加者の満足度の高さは、『熊日』24年12月18日付に掲載され、「フォーラム」の会場での満足度及び活発な質疑応答状況は『文学部通信』第10、11、12号に記載されている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 平成22～25年度における文学部教員の研究や活動が地方版の新聞に掲載（投稿あるいは紹介）された頻度数は非常に高い。
 2. 「地域インターンシップ」に参加した学生たちの満足度及び、その意識を変えるほどのインパクトに、その成果の大きさが現れている。
 3. 「21世紀文学部フォーラム」の成果として、そこで扱われた内容が活字になり、地域に発信されている。また、参加者の満足度の高さ、会場での活発な質疑応答状況が成果の一端を示している。
 4. 「音楽療法活動」やセミナーに対して、参加者の満足度の高さを示すコメントや意見が多く寄せられている。
- 以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

観点2-4 改善のための取組が行われているか。

(観点に係る状況)

1. これまで以上に、授業の開放、公開講座の開設、「研究生」や「科目等履修生」の受け入れ、図書室の開放、オープンキャンパスの充実化、高校への出前授業への参加などを積極的に行うことが奨励され、内容の改善も随時行われている。
2. 「地域インターンシップ」や「海外フィールドスタディ」の類の、いわゆるアクティブラーニングの導入が検討され、地域貢献に資する授業科目の開拓が行われている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

授業開放、公開講座開設、「研究生」や「科目等履修生」の受け入れ、図書室の開放、オープンキャンパスの充実化、高校への出前授業の実施などを積極的に行うことが奨励され、また「地域インターンシップ」や「海外フィールドスタディ」など、地域と関わったアクティブラーニング形式の授業の開設も検討されており、積極的な取り組みがなされており、期待される水準にあると判断する。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目Ⅰ 大学の目的に照らして、社会貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

高い質を維持している。理由は以下のとおり。

1. 「文学部附属永青文庫研究センター」による社会貢献活動は極めて活発である。
2. 国指定史跡の調査活動への参加、さらには、アフリカ諸国の社会・文化・歴史に関するセミナーや、アフリカの若者たちとの交流推進など、全国レベル、さらには国際レベルの活動に関わる文学部教員も数多く、社会貢献活動は非常に活発である。
3. これら 1. 及び 2. の活動はしばしば新聞等に紹介され、また著書や報告書となって活字化されるなど、具体的な成果としても結実し、社会へ適切かつ頻繁に発信されている。

以上、平成 21 年度と同じく、高い質を維持している。

(2) 分析項目Ⅱ 大学の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げていること。

改善、向上している。理由は以下のとおり。

1. 「研究生」、「科目等履修生」の受け入れ、「授業開放科目」、「公開講座」、「テレビ・ラジオ公開講座」の実施など、授業や講座を通しての地域貢献が活発に行われている。
2. 平成 23 年度から開設された文学部図書室も地域社会の人たちの知的活動をサポートするものとして機能する兆候が見られる。現在それほど利用者数は多くないが、平成 21 年度には設置されていなかった施設であり、地域への図書利用の提供という点での貢献度は明らかに向上している。
3. 地域に直接関わる形の授業「地域インターンシップ」の試みが平成 25 年度からなされ、まだ検討の段階ではあるが、新しい授業形態の開拓がなされており、地域との連携方策として、平成 21 年度と比べて向上している。
4. 文学部教員による、様々なイベントやワークショップの実施あるいは参加を通しての地域貢献活動も非常に活発になされている。
5. 1. ～ 4. に示される地域貢献活動は地方版の新聞で平成 21 年度以上の頻度で掲載され、成果としての公表度も向上している。

V 国際化の領域に関する自己評価書

1. 国際化の目的と特徴

文学部における国際化の目的・特徴は文学部 HP の以下の文言で表されている：

資料 V-1-A：文学部における国際化の目的・特徴

国際化時代の中で、この流れに柔軟かつ適切に対応できる人材や、互いに有益で意義深い国際交流を推進できる人材の育成も、文学部の教育目標の重要な要素をなしています。そのためには、授業の中で異文化についてさまざまな知識を獲得するばかりでなく、外国での大学生活を通して「外国人としての自分」を意識し、異文化の中で多様な経験をつむことも大事なプロセスだと考えます。留学という新たな経験によって、みなさんは考え方や行動を大きく変化させ、精神的にもたくましくなること確実です。

(出典：文学部 HP「国際交流」)

[想定する関係者とその期待]

想定している関係者は、受験生、在学生、教員である。これら3者から、国際化・グローバル化を促進する授業カリキュラム、種々の助成、その他国際化サポートの体制作りが期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

<体制面>

1. 全教員 62 名のうち 8 名が外国人教員であり（総合人間学科 1 名、文学科 5 名、コミュニケーション情報学科 2 名）、全体の約 11% となっている。その比率は、熊本大学全学部の中で最も高い。これらの外国人教員は、学部の語学教育を中心に、専門教育にも関わっており、文学部における教育の国際性、多文化性を高め、学部の国際化に貢献している。
2. 英語による授業が多い。コミュニケーション情報学科では、授業の約 3 分の 1 を英語で実施し、スピーチやディベートを取り入れた授業によって、英語運用能力の向上及び学生の国際性の養成に取り組んでいる。ほかに、文学科・欧米言語文学コースにおいても、外国人教員だけでなく、日本人教員による英語での授業も行われている。
3. 日本人留学生の留学先の今後のさらなる拡大・開拓がなされている。
4. 授業の一環としての短期海外留学を開拓中。
5. 「文学部国際奨学事業」の実施体制が整っている。
6. 海外からの留学生を対象に、「私費外国人留学生」、「特別聴講学生」、「科目等履修生」、「研究生」、「大使館推薦による国費留学生（日本語・日本文化研修留学生）」、「熊本県費留学生（研究生）」、「短期交換留学生」としての受け入れ体制が整っている。また、留学生対象の指導教員、日本人学生チューター、履修制度なども整備されている。
7. 文学部図書室における国際交流図書コーナーの設置、文学部独自の留学説明会など、派遣留学生及び受け入れ留学生両方の利便を図っている。
8. 文学部教員の国際化推進のための方針・制度として「国際学会発表助成」、「海外研究助成」、それと平成 22 年度より施行の「サバティカル制度」が整備されている。

<活動の状況>

1. 「私費外国人留学生」、「特別聴講学生」、「科目等履修生」、「研究生」、「大使館推薦による国費留学生（日本語・日本文化研修留学生）」、「熊本県費留学生（研究生）」、「短期交

「交換留学生」の受け入れが活発になされている。

2. 「文学部国際奨学事業」の利用状況が年々活発になっている。
3. 海外からの研究者も文学部で研究に従事している。
4. 文学部独自の留学ガイダンスが実施されている。
5. 毎年留学生歓迎パーティーが開催されている。
6. 留学生、日本人学生チューター、一般学生、指導教員等参加のエクスカージョンが実施されている。
7. 文学部教員の国際化推進のための「国際学会発表助成」、「海外研究助成」、「サバティカル制度」の運用状況が活発である。

<活動の成果>

1. 「私費外国人留学生」、「特別聴講学生」、「科目等履修生」、「研究生」、「大使館推薦による国費留学生（日本語・日本文化研修留学生）」、「熊本県費留学生（研究生）」、「短期交換留学生」の受入数の高さ
2. 交流協定大学に留学した学生の留学体験の記事の内容から判断できる満足度
3. 短期研修留学に参加した学生の研修体験記事から判断できる満足度
4. 「文学部国際奨学事業」に応募する学生の数の増加
5. 「文学部国際奨学事業」で留学した学生の体験レポートの内容から判断できる満足度
6. 留学先で履修した授業単位の読み替え単位数の高い水準
7. 留学生、日本人学生チューター、一般学生、指導教員等参加のエクスカージョン（小旅行）についての満足度の高さ
8. 留学ガイダンスへの参加者数の高さ
9. 毎年開催の留学生パーティーへの参加者数の高さ

【改善を要する点】

海外の大学あるいは語学学校に私費留学している学生は多いが、交流協定大学へ留学する日本人学生の数が全体として低調である。留学生の数は年によってランダムな増減があり、景気の動向、家庭の経済事情の問題など色々な事情が関わっており、傾向の本質は見極めにくい（例えば平成 24 年度、25 年度に低調だった留学生数が、26 年度には大きく増加している）。しかし、そのような様々な要素を考慮するにしても、交流協定大学への留学生数を安定的に高い水準に保つべき努力は必要であり、改善を要する点である。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 大学の目的に照らして、国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げていること。

観点 1-1 国際化の目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が広く公表されているか。

（観点到に係る状況）

文学部における国際化のための方針・体制として、第一に外国人教員数がある。全教員 62 名のうち 8 名が外国人教員で（総合人間学科 1 名、文学科 5 名、コミュニケーション情報学科 2 名）、全体の約 11% となっており（それ以外にも、日本国籍を取得した外国人教員が 1 名在籍）、その比率は、全学部の中で最も高い。これらの外国人教員は、学部の語学教育を中心に、専門教育にも関わり、文学部における国際化体制の一翼を担っている。

英語による授業が多いことも、学生の国際化を高める重要な教育方針・体制である。コミュニケーション情報学科では、授業の約3分の1を英語で実施し、スピーチやディベートを取り入れた授業によって、英語運用能力の向上及び学生の国際性の養成を図っている。文学科・欧米言語文学コースにおいても、外国人教員だけでなく、日本人教員による英語での授業も行われている。

学生の海外留学に関しては、海外の多くの大学で勉学の機会を持てるように、大学間交流協定大学に加えて、部局間交流協定大学があり、学生の国際化を促進している。

協定大学及び留学要領は以下のとおり：

資料 D-1-1-1-1：協定大学及び留学要領
(大学間交流協定大学)

大学名(国名)	派遣学生	留学予定期間	必要な語学能力等
モンタナ大学 (アメリカ)	5名以内	8月～翌年5月	I B T 61点
モンタナ州立大学 (アメリカ)	3名以内	8月～翌年5月	I B T 71点
ニューカッスル大学 (オーストラリア)	4名以内	2月～11月	I B T 80点
リーズ大学 (英国)	5名以内	9月～翌年6月	I B T 87点
ザールラント大学 (ドイツ)	5名以内	3月～翌年2月	ドイツ語 能力証明書
ボルドー大学連合 (フランス)	5名以内	9月または1月から 半年または1年	フランス語 能力証明書
ワルシャワ大学 (ポーランド)	4名以内	10月～最大1学年程 度	ポーランド語 能力証明書
培材大学校 (大韓民国)	協議による	9月～翌年6月	韓国語 能力証明書
東亜大学校 (大韓民国)	4名以内	9月～翌年6月	韓国語 能力証明書
朝鮮大学校 (大韓民国)	5名以内	9月または3月から 最大1学年度	韓国語 能力証明書
広西師範大学 (中国)	5名以内	9月～翌年7月	中国語 能力証明書
同済大学 (中国)	5名以内	9月～翌年7月	中国語 能力証明書
大連理工大学 (中国)	3名以内	9月～翌年6月	中国語 能力証明書
上海師範大学 (中国)	2名以内	9月または3月から 最大1年	中国語 能力証明書
山東大学 (中国)	協議による	9月または3月から 最大1年	中国語 能力証明書
東北大学 (中国)	3名以内	8月または2月から 最大1年	中国語 能力証明書
南台科技大学 (台湾)	5名以内	9月から最大1年	

スラバヤ大学連合 (インドネシア)	協議による	8月から最大1年	
コンケン大学 (タイ)	3名以内	11月～翌年9月	
エーゲ大学 (トルコ)	協議による	9月～翌年7月	

(出典：『平成26年度学生便覧』p. 89)

(部局間交流協定大学)

大 学 名 (国名)	派遣学生	留学予定期間	必要な語学能力等
ボン大学 (ドイツ)	4名以内	① 4月～翌年2月末 ② 10月～翌年9月末 ・希望者は、学期開始の1ヶ月前からボン大学にて語学研修を受けることができます (有料)。	ドイツ語能力証明書
杭州師範大学 (中国)	5名以内	3月または9月から1年以内	中国語能力証明書
長榮大学 (台湾)	3名以内	2月または9月から1年以内	中国語能力証明書
淡江大学 (台湾)	2名以内	2月または9月から1年以内	中国語能力証明書

(出典：『平成26年度学生便覧』p. 89)

これまでに文学部学生が留学している大学間交流協定大学は、モンタナ大学、モンタナ州立大学、ニューカッスル大学、リーズ大学、ザールラント大学、ボルドー大学連合、培材大学校、東亜大学校、広西師範大学、同濟大学、上海師範大学などで、部局間交流大学としては、ボン大学、杭州師範大学、長榮大学などとなっている。

また、「文学部国際奨学事業」制度によって、国際的学術交流や調査のための経済支援（一人当たり20万円を上限）を行っている：

資料 D-1-1-1-2：「文学部国際奨学事業」の目的

文学部に所属する学生の海外での学習・研究活動への参加機会を広く提供し、参加を支援することによって、参加者の国際的視野と学習・研究能力を高めるとともに、学生の国際的関心を高め、積極的な社会進出を動機付けるため、国際奨学事業を実施する。

(出典：「平成25年度文学部規則集」p. 82)

対象となる学生の活動は以下のとおり：

資料 D-1-1-1-3：「文学部国際奨学事業」の活動内容

- (1) 国際学会での発表
 - (2) 国際的な調査活動
 - (3) 国際インターンシップ
 - (4) 国際交流協定校での目標を定めた学習
 - (5) その他国際的な学習・研究活動
- *外国人留学生の場合、母国以外での活動を対象とする。

(出典：「平成25年度文学部規則集」p. 82)

その他、国際化を促進する体制としては以下のようなものがある：

- ・留学生に対する指導教員や日本人学生チューターによるサポート体制
- ・文学部独自の「留学ガイダンス」の実施体制

- ・「文学部主催留学生歓迎パーティー」（「文学部国際交流委員会」担当）の設定
- ・文学部図書室における「国際交流図書コーナー」の設置（平成 24 年度より）
- ・文学部教員の国際化推進のための方針・制度として「国際学会発表助成」、「海外研究助成」、それと平成 22 年度より施行の「サバティカル制度」がある。

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

1. 交換留学制度についての『学生便覧』での公表・周知、受け入れ大学の整備、文学部独自の「留学ガイダンス」など、学生の海外留学に関する体制・方針が適切に整備されている。
 2. 「文学部国際奨学事業」の制度及びその方針が適切に定められている。
 3. 海外からの留学生の受け入れ体制（指導教員、チューター、留学生履修制度など）が適切に整っている。
 4. 受け入れ留学生、留学を考えている日本人学生双方に有用となるよう、平成 24 年度に文学部図書室に「国際交流図書コーナー」が設置されている。
 5. 「文学部主催留学生歓迎パーティー」が毎年計画され、ポスター掲示によって公表されている。
 6. 文学部教員の国際化推進のための方針・制度が整備されている。
- 以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

観点 1 - 2 計画に基づいた活動が適切に実施されているか。

（観点到係る状況）

文学部全教員の約 11%（8 名）を占める外国人教員は、学部の語学教育、専門教育に熱心に取り組んでおり、授業及びオフィスアワーを通して学生の国際化、多文化意識、コミュニケーション力の向上に努めている。

コミュニケーション情報学科では英語による授業が活発に行われ、英語運用能力、スピーチやディベート力、国際性の養成に努めている。文学科・欧米言語文学コースにおいても、外国人教員のみならず、日本人教員による英語での授業も行われている。

文学部学生の留学生数、留学先大学は以下のとおり：

資料 D-1-1-2-1：文学部学生の留学先国名・留学生数（平成 22～25 年度）

大学	22 年度	23 年度	24 年度	25 年度	計
フランス	1	1			2
ドイツ			2		2
アメリカ		2			2
オーストラリア		1		1	2

中国	1			1	2
計	2	4	2	2	10

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

この表の数値は交流協定大学への留学生数のみで、他大学に私費留学している学生は入っていない（その正確な数値は取られていない）。留学生の数というのは年によってランダムに増減する傾向がある。そこには、景気の動向、家庭の経済事情の問題など色々な事情が関わっており、傾向の本質は見極めにくいところがある。例えば、平成 26 年度は、一転して、交流協定大学への留学生数は 10 名を超え、25 年度の 5 倍以上の数値を示している。留学先も、イギリス 5 名、フランス 3 名、オーストラリア 2 名、アメリカ 1 名で、上掲表 V-1-1-2-1 の過去 4 年間の合計数に等しい。このように、海外への留学生数の傾向は単純には判断できないが、しかし、国際化・グローバル化という目標を達成するためには、コンスタントに留学生数の水準を上げるべく努める必要がる。

海外からの留学生の受け入れに関しては、受入数、出身国数ともに年度ごとに増加している。アジア、東西ヨーロッパ、北米、南米から、私費外国人留学生（学部正規生）、政府派遣外国人留学生（学部正規生）、特別聴講生（交換留学生、大使館推薦国費留学生）、科目等履修生、研究生として毎年 50～60 名の留学生が文学部に在籍している。平成 22～25 年度におけるそれら 5 種類の身分の留学生の人数及び出身国は以下のとおり：

資料 V-1-1-2-2：私費外国人留学生(学部正規生)入学者数

	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	計
マレーシア			1		1
韓国	1	1	1	2	5
中国	2		2	2	6
合計	3	1	4	4	12

*「私費外国人留学生(学部正規生)」は毎年各学科若干名の募集人員となっている(『平成26年度私費外国人留学生募集要項』P1)。

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 D-1-1-2-3：政府派遣外国人留学生(学部正規生)入学者数

出身国	22年度	23年度	24年度	25年度	計
マレーシア			1		1

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 D-1-1-2-4：特別聴講生（交換留学生）数

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
アメリカ	1		1		2
イギリス	2	3	2	1	8
インドネシア				1	1
オランダ				1	1
クロアチア				1	1
タイ				1	1
チェコ			1		1
ドイツ	4	4	4	3	15
トルコ			1		1

ブラジル				1	1
フランス		2	1		3
ポーランド	2	1		1	4
ラオス		2	2	2	6
リトアニア		1			1
ルーマニア		1			1
韓国	12	12	13	10	47
台湾			4	10	14
中国	13	11	13	18	55
計	34	37	42	50	163

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 D-1-1-2-5：特別聴講生（大使館推薦国費留学生）数

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
インドネシア				1	1
オランダ				1	1
クロアチア				1	1
チェコ			1		1
トルコ			1		1
ブラジル				1	1
ポーランド	1				1
ラオス		1	2	2	5
計	1	1	4	6	12

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 D-1-1-2-6：科目等履修生(留学生)数

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
中国	2				2

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

資料 D-1-1-2-7：研究生(留学生)数

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
ブラジル（熊本県費）	1				1
中国	7	9		2	18
台湾	1				1
計	9	9		2	20

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

これら資料 V-1-1-2-2～資料 V-1-1-2-7 で示される留学生の総数は以下のとおり：

資料 D-1-1-2-8：資料 V-1-1-2-2～資料 V-1-1-2-7 の総計数

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
私費外国人留学生（学部正規生）	3	1	4	4	12
政府派遣外国人			1		1

留学生(学部正規生)					
特別聴講学生(交換留学生、大使館推薦国費留学生)	36	38	46	56	176
科目等履修生	2				2
研究生(熊本県費留学生を含む)	9	9		2	20
計	50	48	51	62	211

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

平成 22 年度から 25 年度にかけて、その数は増加傾向にある。海外からの留学生の受け入れを通しての文学部の国際化活動は非常に活発であることが分かる。世界中の様々な国からの多くの留学生の存在自体が国際貢献であるとともに、文学部の国際化を多いに促進するものとなっている。教室での学習だけでなく、実際に留学生と接することから日本人学生が学ぶ国際感覚は重要である。(中期計画番号：K32)

文学部学生対象の「文学部国際奨学事業」の活用は活発である：

資料 D-1-1-2-9：「文学部国際奨学事業」利用学生数及び研修先

年度	人数	研修先
22 年度	5	アメリカ、イギリス、台湾、フランス、中国
23 年度	5	ドイツ (2)、台湾、中国、韓国
24 年度	6	イギリス、カナダ、ドイツ、台湾 (2)、フランス
25 年度	4	フィリピン、インドネシア、トルコ、フランス
計	20	

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

この国際奨学事業への学生の申し込みは年々増加しており、平成 23 年度は申請者 6 名に対して採用 5 名、24 年度は申請者 9 名に対して採用 6 名、25 年度は申請者 12 名に対して採用 4 名となっている。

この事業を通して学生が渡航先で行っている学習・研究・調査内容の一部を挙げる：

資料 D-1-1-2-10：「文学部国際奨学事業」利用学生の研修テーマ

- ・台湾における哈日族(ハーリーズ)の現状に関する調査(台湾)
- ・中国・撫順西露天鉱と日本の関わりに関する調査研究(中国)
- ・伝統的な仮面と人間の仮面性(韓国)
- ・クラシック音楽の研究(ドイツ)
- ・ドイツ語とドイツ文化の学習(ドイツ)
- ・ウォルト・ディズニー作品のヒロインたちから見るアメリカ人女性像の研究(アメリカ)

- ・デフォー作『ロビンソン・クルーソー』研究の推進と実用的英語の向上（イギリス）
- ・「マンガ」の海外進出から考える文化の伝播について—台湾の事例より（台湾）
- ・現代フランス小説の研究のための現地調査（フランス）

（出典：熊本大学文学部 HP：「国際交流」）

コミュニケーション情報学科では、授業の一環としての海外研修があり（「異文化コミュニケーション論実習」）、英語圏諸国を初め、多くの国々での研修が行われている：

資料 D-1-1-2-11：「異文化コミュニケーション論実習」研修先及び参加人数

	22年度	23年度	24年度	25年度	計
アメリカ		14	2	3	19
イギリス			1	2	3
カナダ	1		4	5	10
オーストラリア	4		2		6
ニュージーランド	1	2	1		4
アイルランド				2	2
中国	3				3
シンガポール	1				1
計	10	16	10	12	48

（出典：文学部コミュニケーション情報学科資料）

文学部教員の引率による、休暇を利用した1~2ヶ月の短期海外研修も行われている：

資料 D-1-1-2-12：短期海外研修先及び参加者数

	研修先	引率者（教員）	参加学生	計（参加学生）
22年度	ドイツ	2	6	12
	スペイン	1	6	
23年度	ドイツ	2	15	25
	ベルギー	1	9	
	モンゴル	1	1	
24年度	ドイツ	2	22	34
	イタリア	1	10	
	大韓民国	1	2	
25年度	ドイツ	2	37	47
	フランス	1	7	
	台湾	1	3	
計		15	118	118

（出典：自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成）

協定大学先での1年間の留学に比べて参加し易いこともあり、参加学生数は年々増えている。教員と一緒に行われるこの種の海外研修は、単なる観光とは違う形で海外の人・事物・文化に触れる機会として有意義であることは学生の声で聞くとおりである。（中期計画番号：K31）

海外からの講演者あるいは研究者の受け入れも行われている（中期計画番号：K53）：

資料 D-1-1-2-13：海外からの講演者・研究者受け入れ状況

年度	人数	出身国	計
22年度	2	中国、韓国	6
23年度	2	ドイツ、アメリカ	
24年度	2	アメリカ、ドイツ	
25年度	0		

（出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成）

教員の国際化推進のための「国際学会発表助成」、「海外研究助成」の運用状況は以下のとおり：

資料 D-1-1-2-14：「国際学会発表助成」の件数及び助成額（前掲資料 B-1-1-1-18 と同資料）

	件数	助成額（千円）
22年度	4	900
23年度	1	122
24年度	6	1,200
25年度	6	1,200
計	17	3,422

（出典：人文社会科学系事務ユニット資料）

資料 D-1-1-2-15：「海外研究助成」の件数及び助成額（前掲資料 B-1-1-1-19 と同資料）

	件数	助成額（千円）
22年度	1	800
23年度	1	800
24年度	2	800
25年度	0	0
計	4	2,400

（出典：人文社会科学系事務ユニット資料）

平成 22 年度施行、23 年度運用開始の「サバティカル制度」の運用状況：

資料 D-1-1-2-16 : 「サバティカル制度」 運用状況 (前掲資料 B-1-1-1-21 と同一資料)

年度	件数	研修先	計
23 年度	1	アメリカ及び韓国	計 5 件
24 年度	3	アメリカ、イギリス、内地	
25 年度	1	内地	

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

この 3 年間で 5 件のサバティカル研修 (5 件とも 1 年間) が利用されており、利用状況は活発である。さらに、平成 26 年度、27 年度、28 年度に各 1 件のサバティカル研修が承認されている。

ほかに、以下のような国際化の活動が行われている。

1. 文学部独自の「留学ガイダンス」は毎年実施されており、すでに留学を経験している先輩たちからその体験談を聞いたり、教員からのアドバイスを受けたり、事務手続きの説明を受けるなど、留学への具体的なサポートとして役立っている。

2. 「留学生歓迎パーティー」は、毎年 10 月、各国から文学部に来ている留学生を対象に行われ、毎年の参加者は、留学生、学生チューター、一般学生、教員を合わせて 60 名前後が参加し、活発な交流の場となっている。

3. 平成 24 年度に文学部図書室に「国際交流図書コーナー」が設置され、海外からの留学生だけでなく、留学を考えている日本人学生にとって有益な図書環境となっている。

4. 文学部教員の国際化推進のための「国際学会発表助成」、「海外研究助成」、「サバティカル制度」が活発に運用されている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 全学の中で最も高い割合を占める外国人教員は、文学部の語学教育、専門教育に熱心に取り組み、授業及びオフィスアワーを通して学生の国際化、多文化意識、コミュニケーション力の向上に活発に関わっている。

2. コミュニケーション情報学科における英語による授業を通しての英語運用能力、スピーチやディベート力、国際性の養成は適切に行われている。文学科・欧米言語文学コースにおいても外国人教員及び日本人教員による英語での授業も活発に行われ、学生の国際化を推進している。

3. 受け入れ留学生数の水準は非常に高い。

4. 「文学部国際奨学事業」は活発に利用されている。

5. 海外からの研究者や講演者も招聘されており、教員の研究面でも国際化が見られる。

6. 留学ガイダンス、留学生歓迎パーティー、国際交流関係図書などの体制・整備が適切になされている。

7. 文学部教員の国際化推進のための「国際学会発表助成」、「海外研究助成」、「サバティカル制度」は活発に運用されている。

以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

観点1-3 活動の実績及び学生・研究者の満足度から判断して活動の成果があがっているか。

(観点に係る状況)

海外での留学を経験した学生たちの留学経験は「熊本大学文学部 HP」や『文学部通信』に掲載される。そこで語られる留学の経験談・成果・満足度は、文学部における国際化の成果・満足度のひとつの指標である。交流協定大学（ドイツのボン大学）に留学した学生は次のように書いている：

資料 D-1-1-3-1：交流協定大学（ドイツのボン大学）への留学生報告抜粋

授業以外に、ドイツ人の友達やアメリカ・アジア諸国・他ドイツ周辺国からの留学生とよく意見を交換したり、食事を共にしたりしました。各々の異なる文化・宗教観・価値観に触れ、自分の見えていた世界はまだまだ狭いものだったと痛感。「固定概念を取り払わずには受け入れてみる、そこから実感や理解が生まれる」と思うようになりました。私の場合、オーケストラにも所属しました。ほとんど留学生の居ない集団に馴染み一つの音楽をつくる体験は、苦労があってもかけがえのない貴重なものでした。合宿や毎回の練習でのコミュニケーションは絆を強める大切な時間でした。留学には幾つもの壁がありました。友達と語り合うのに伝えたいことが思うように表現できないもどかしさ。当たり前だったことが当たり前でない生活での不自由さ。差別的な対応や視線。それを乗り越えた時、失敗や挑戦を恐れない気持ちが強まったと感じます。自分の考えをもつことの大切さに気付きます。未知の世界へ飛び込む勇気や好奇心も湧いてきました。何より、世界中の留学仲間、ボン大学の学生や教授、街を越えた友達、現地の音楽家や職人、寮の近所の家庭など、国も世代も超えたあらゆる人との繋がりが、この留学で得た大きな宝です。

(出典：文学部 HP：「国際交流——熊大文学部から世界へ」)

「文学部国際奨学事業」によってイギリスで研修（ホームステイ）をした学生は次のように書いている：

資料 D-1-1-3-2：「文学部国際奨学事業」によるイギリスでの研修報告抜粋

私は夏休みを利用して、イギリスの子ども達に日本文化を伝えてきました。Ramsgate という町に三週間ホームステイをしながら様々な活動を行いました。初めはちゃんと英語で伝えられるか不安でしたが、チームメイトと一緒に語学学校で授業を作り上げていたので、心構えができました。折り紙、習字、カルタを教えたのですが、子ども達はどれも興味を持って楽しんでくれたので、とても嬉しかったです。また、授業ごとに自分達で考えて工夫したので、達成感もありました。カルタは遊びだけではなく、実際に子ども達に作ってもらいました。地元の名所を題材にすることで、地域の魅力を再発見してもらうためです。私自身も地元の名所を知ることができ、また実際に訪れることができ、ガイドブックとは違うイギリスを感じることもできました。子ども達はすぐになついてくれて、とてもかわいかったです。その他にも、ホストファミリーや語学学校で出会ったイタリア人などたくさんの人と交流できました。小学校での活動以外にも、フェアトレードについて学んだり、町歩きをしたりして、毎日が充実していてとても楽しかったです。イギリスの教育現場を直に見ることが出来たり、日本との文化の違いを肌で感じることもできたり、貴重で素晴らしい体験をすることができました。この経験を今後の人生にも活かしていきたいです。

学生にとって海外での留学体験がいかに貴重なもの、成果が大きいものであるかが分かる。

文学部・欧米言語文学コースの英語英米文学研究室では、主催する学会（毎年1回、11月開催）で、留学した学生が「留学報告」として発表を行っている。学生は、留学と発表という経験から、国際力、異文化理解、コミュニケーション力など多くのことを学び、また聴衆の3年生、2年生はその発表で刺激を受け、自分の勉強のあり方を考える機会となりっている。

留学先の大学で取得した授業単位は、本学部の互換単位として認定取得することができる：

資料 D-1-1-3-3：互換認定単位数

大学	22年度	23年度	24年度	25年度	計
フランス	3	8			11
ドイツ			13		13
アメリカ		16			16
オーストラリア		4		12	16
中国	14			6	20
計	17	28	13	18	76

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

留学先の大学で取得した単位が互換認定されることで、留学先大学での学生の学習意欲が高まるだけでなく、1年間留学しても留年することなく卒業することができ、学生の留学を促す要因ともなっている。

ほかに、海外からの留学生数、留学ガイダンスへの参加者、留学生歓迎パーティーへの参加者の多さ、増加傾向にも文学部における国際化活動の成果が見られる。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 交流協定大学に留学した学生の体験報告に見られる満足度と成果の大きさ
 2. 「文学部国際奨学事業」に応募する学生数の増加
 3. 「文学部国際奨学事業」で海外研修した学生の報告に見られる満足度と成果の大きさ
 4. 留学先で履修した授業単位の読み替えによる単位取得の活発な状況
 5. 海外からの留学生数の多さ・増加傾向
- 以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

観点 1-4 改善のための取り組みが行われているか。

(観点に係る状況)

観点 1-2 と 1-3 で見たとおり、文学部における国際化は全体として良好であり、特段の改善を要する点は見当たらないが、交流協定大学への留学生数が全体として減少傾向にある点、改善の必要があり、留学促進を図るため以下のような取り組みを行っている：

1. 部局間交流協定大学及び大学間交流協定大学への留学にあたって、国際交流委員や教員が個人的に窓口になって、留学の促進に努めている。

2. 海外への留学促進のための「留学ガイダンス」への参加を促している。

3. 受け入れ留学生の日本文化理解のためだけでなく、日本人学生の異文化に対する興味を喚起し、海外留学意識を高めるために、文学部図書室に「国際交流図書コーナー」を設置した。

海外への留学生数は、景気の動向や家庭の経済事情など、その時の社会情勢などによって変化することも多く、大学の取り組みだけでは測れない要素があるが、しかし、上記のような取り組みも反映され、平成 26 年度は、交流協定大学への留学生数は 10 名を超え、25 年度の 5 倍以上の数値、平成 22～25 年度の 4 年間の合計数に等しい数値を示している。今後も上記の取り組みを継続していく。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

文学部における国際化の中で唯一改善を要する点、つまり、海外の交流協定大学へ留学する学生の数が全体として減少傾向にある点に関して、その改善のための努力及び方策が適切になされている。改善のあり方として、期待される水準にあると判断する。

4. 質の向上度の分析及び判定

分析項目 I 目的に照らして、国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げていること。

改善、向上している。理由は以下のとおり。

1. 文学部全教員 62 名のうち 8 名（約 11%）が外国人教員で、その比率は全学部の中で最も高く、学部での教育及び個人的交流を通して、学生の国際化、多文化意識、コミュニケーション力は明らかに向上している。

2. コミュニケーション情報学科における英語による授業を通して、英語運用能力、スピーチやディベート力、国際性の養成が活発に行われており、就職率の高さにもその成果が現れている。ほかに、文学科・欧米言語文学コースにおいても、外国人教員だけでなく、日本人教員による英語での授業も行われ、英語運用能力の向上に繋がっている。

3. 留学生数は年度ごとに高くなっており、平成 21 年度と比べ、明らかに向上している。また平成 24 年度に「政府派遣外国人留学生（学部正規生）」の入学が 1 件あり、21 年度には見られない新たな成果も出ている。

4. 日本人留学生の留学先の拡大・開拓が行われている。特に休暇を利用した短期の海外

研修のための受け入れ先の開拓が平成 25 年度からなされ、21 年度と比べ向上している。

5. 23 年度開設の文学部図書室における国際交流関係の図書・視聴覚教材が強化され、国際化を促進している。平成 21 年度と比べ明らかに向上している。

6. 学部独自の留学ガイダンスが毎年行われ、参加者の増加だけでなく、具体的で有用な内容に対する参加者の評価・満足度も高い。平成 21 年度と同じく高い質を維持している。

7. 学部主催の留学生パーティーが毎年開催され、多くの参加者がある。さらに、平成 24 年度から、新たに、九州圏内を中心としたエクスカージョンが実施され、平成 21 年度よりも向上している。

8. 海外からの研究者、講演者も文学部で研究に従事しており、教員レベルでも国際化が見られる。平成 21 年度と同じく高い質を維持している。

9. 平成 22～25 年度にわたって低調だった交流協定大学への留学生数が 26 年度に大きく向上している。

10. 「文学部国際奨学事業」に応募する学生の数は年々増加しており、その活動及び成果は明らかに平成 21 年度よりも向上している。

11. 留学先で履修した授業単位の読み替え単位数の水準が高い。平成 21 年度と同じく高い質を維持している。

12. 文学部教員の国際化推進のための各種助成制度が活発に運用されている。平成 21 年度と同じく高い質を維持している。

VI 男女共同参画の領域に関する自己評価書

1. 男女共同参画の目的と特徴

男女共同参画社会基本法（平成 11 年制定）は、男女共同参画社会について、以下のよう
に位置づけている：

資料 VI-1-A：男女共同参画社会基本法における男女共同参画社会

男女が、社会の対等な構成員として、自らの意思によって社会のあらゆる分野における活
動に参画する機会が確保され、もって男女が均等に政治的、経済的、社会的及び文化的利
益を享受することができ、かつ、共に責任を担うべき社会。

（出典：男女共同参画社会基本法（平成 11 年制定））

文学部の目指す男女共同参画の目的も、この基本法に述べられている社会の概念に則った
組織としての学部形成である。すなわち、学部における教育活動及び研究活動ほか、す
べてにおける男女均等化、性差による有利性・不利性のない環境の形成を目的とする。

[想定する関係者とその期待]

上掲資料 VI-1-A を掲げつつ、教職員、地域社会の人々・自治体を主要な関係者として
想定する。教職員からは、学部における教育活動及び研究活動ほか、すべてにおける男
女均等化、性差による有利性・不利性のない環境の促進が期待され、地域社会の人々・
自治体からは、人文社会科学系を専門領域とする学部ということもあり、近年謳われて
いる国際化・グローバル化と合わせて、地域における男女共同参画モデルの先端となる
こと、さらにはそのような意識を有した学生を育成することが期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

1. 文学部女性教員から発信された、女性教員の職場環境に関する提言に対する答申
が現在も継続される形で生きており、本学全体における男女共同参画に寄与している。
2. 文学部独自の「女性リーダーシップ養成」に関する検討委員会が、一定期間では
あるが設置され、そこでの議論・検討によって、女子学生が多くを占める文学部におけ
る女子学生育成にかかわる重要な提言がなされ、男女共同参画の推進に大いに貢献する
成果をあげている。
3. 現在在籍している女性教員は、日本学術会議での要職、国際学会での発表、国際
学会誌での論文掲載、地域社会への多大な貢献など、目覚ましい活躍をしており、文学部
の男女共同参画面における大きな成果である。これは、女性教員が研究・地域貢献等
において十分に活躍できる場として、文学部が適切な環境にあることの証左でもある。

【改善を要する点】

文学部における女性教員の割合は、平成 22 年度～25 年度において、14.1% → 14.5% →
9.5% → 9.5% と減少傾向にあり、いずれの年度も目標値（15 %以上）に達していない
点、改善を要する。ただ、このように減少傾向にあった割合数値が、26 年度には大幅に
改善され、12.9 %まで上がっており、改善の成果が現れている。それでも、熊本大学全
体の過去 4 年間の平均は 15.1%、全国立大学は 13.8%であり、15%以上という目標の数
値達成に向けての今後の改善努力はなお継続すべき課題である。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 目的に照らして、男女共同参画に向けた活動が適切に行われ、成果を挙げていること。

観点 1-1 目的に照らして、目的を達成するためにふさわしい計画や具体的方針が定められているか。また、これらの目的と計画が広く公表されているか。

(観点に係る状況)

前掲資料 VI-1-A で述べられている男女共同参画社会の形成に対する関心、意識は従来から強く、男女の性差のない環境がこれまで作られてきている。そうした事情を反映して、「文学部男女共同参画推進委員会」(運営会議メンバー+男女共同参画推進委員会委員)は、平成 20 年度における男女共同参画推進に関する具体策について、特に数値を設定はしないが、従来どおり、男女共同参画を推進する方向性を堅持するという、以下の方針を全学委員会に提出した：

資料 E-1-1-1-1:「文学部男女共同参画推進委員会」による方針

1. 文学部は、これまでも女性教員数の増加に向けて努力してきたが、今後共その努力は継続する。
2. 女性教員が働きやすい環境整備(例えば保育所の早期設置等)を全学の予算で速やかに実現することは急務であり、さもなければ教員公募においても優秀な女性教員の応募は見込めないと思われる。

(出典:熊本大学男女共同参画推進室 HP:「活動内容—文学部」)

文学部の教員の選考は「文学部教員選考細則」(『文学部規則集』p. 27)及び「文学部教員選考基準」(『文学部規則集』p. 28)に基づいて行われ、各学科・コースの専門教育の重点化やバランス、年齢構成などを考慮した上で行われる。それらの選考規則・基準に基づき、また、男女共同参画社会基本法(上掲資料 VI-1-A)に沿って、女性教員の任用を促進している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 「文学部男女共同参画推進委員会」は、男女共同参画推進に関する具体策について、特に数値を設定はしないが、従来どおり、男女共同参画を推進する方向性を堅持するという方針を全学委員会に提出している。
 2. 学部の教員の選考に関しては、「文学部教員選考細則」及び「文学部教員選考基準」に基づいて行われるが、それらの選考規則・基準に基づき、また、男女共同参画社会基本法(上掲資料 VI-1-A)に沿って、女性教員の任用を促進している。
- 以上の観点から、文学部における男女共同参画に関わる計画・方針は適切に掲げられており、期待される水準にあると判断する。

観点 1-2 計画に基づいた活動が適切に実施されているか

(観点に係る状況)

文学部では、平成 24 年度に、独自に、「女性リーダーシップ養成」に関する検討委員会を立ち上げ、女子学生が約 70%を占める文学部においていかにして女性のリーダーシップを養成するかについて議論を重ねた。構成メンバーは文学部教員として 5 名（うち女性教員 3 名）、学外委員として、各界でリーダー的役割を担って活躍されている 6 名の方（うち 5 名が女性：熊本日日新聞社・メディア報道部次長、西日本電信電話株式会社熊本支店副支店長、ピュア・サポートグループ代表、熊本市男女共同参画センターはあもにい館長、株式会社人吉旅館女将、有限会社ひまわり亭代表取締役）、それにオブザーバーとして文学部長、文学部副学部長の 2 名が加わり、計 13 名。委員会は平成 24 年 10 月から平成 25 年 3 月にわたって 6 回開催され、その中で、他大学が実施している類似プログラムの調査結果の報告、実際に社会においてリーダー的立場で活動している外部委員の実験の経験披露、文学部学生に対する聞き取り調査の結果などを基に、女性としてのリーダーシップを養成するにあたっての現状、問題点、必要なこと、学部としてすべきことなどについて種々分析・検討がなされた。そして、その分析・検討の結果を、検討委員会答申としてまとめている。その中で「共通認識」として、以下のようなことを提示している（以下、その要点）：

資料 E-1-1-2-1：「女性リーダーシップ養成」検討委員会答申

- (ア)リーダーのあり方、またリーダーに求められる資質やスキルはそれぞれの場面によって大きく異なる。しかし本学部の立ち位置、学生の指向（地域中核大学・それ相応に高い志望動機を持った学生・過度の競争よりは協調を好む性向）を勘案したとき、育成すべき人材モデルの一つは、地域（地方）に根ざし、さまざまな人びとと連携しながら地域の抱えるさまざまな課題に誠実に取り組み、その過程で必要に応じてリーダーシップを発揮する能力を備えた人材ということになる。
- (イ)リーダーシップを身につけるにはすぐれたリーダー（ロールモデル）との交流や共同作業を経験し、また困難な課題に取り組み、それを解決したという成功体験を持つことが不可欠である。
- (ウ)これまで文学部が行ってきた、多様な価値観の存在を認め、事物をさまざまな視点から検討する能力を養おうとする教育実践やその成果を基礎として、日常の勉学を通じて成功体験を積み重ね、またさまざまなロールモデルと接するなかで、リーダーに求められる資質のいくつかを身につけ、必要とされている時と場所でリーダーシップを発揮することで社会に貢献できる人材の育成を目指すことが望ましい。

(出典：「文学部教授会資料」平成 25 年 4 月 17 日付)

このグランドビジョンの実現を目指し、委員会の総意として以下のような 5 つの提言を行い、答申を締めくくっている：

資料 E-1-1-2-2：「女性リーダーシップ養成」検討委員会提言

1. すべての学生がジェンダーについての正確な知識を身につけるための授業枠を設定し、女性の観点からの経験や知識を披露できる講師を招聘して、現在の女性を取り巻く社会的状況の実態や形成過程・要因などを学習の初段階で学ぶようにする。さらに社会における多様性についての認識を深め、それを実践に生かすことを目指す指導・サポート体制を構築する。
2. 学外有識者（ロールモデル）との対話や共同作業を行う機会を設けるほか、学外諸団体と連携し、実践的作業を通してリーダーシップとは何かを実感し、そ

- の成果を社会に発信する授業枠を設定する。
3. 自分と相手を尊重した自己主張・自己表現（アサーティブネス）や交渉術（ネゴシエーション）などを身につける授業枠を設定する。
 4. 学生が卒業論文作成・キャリア形成に向けて国内外で行う現地調査を奨励し、支援体制をさらに充実させる。
 5. 卒業論文作成を通して「達成困難な課題をクリアしたことによる成功体験」を全学生が持つことを目指し、卒論作成に必要なスキルとモチベーションを身につけられるよう指導・サポート体制を充実させる。

（出典：「文学部教授会資料」平成 25 年 4 月 17 日付）

当検討委員会によってまとめられたこの共通認識と提言は、女子学生が多くを占める文学部の今後を考えていく上での貴重な指針を明確にし、文学部の教育体制のあり方にも反映させられるべきものである。そして、この提言に基づく授業として、平成 26 年度後学期に「世界システム史学演習 E」が開講される（講師は当委員会の外部委員の一人）。現在ほかにこの提言に基づく具体的な取り組み例はないが、今後具体化できる問題を検討していく。

熊本大学全体及び全国立大学における女性教員の割合の移行を、過去 4 年間（平成 22～25 年度）を対象に示すと、以下のようになっている：

資料 E-1-1-2-3：熊本大学における女性教員の割合

	22 年度(人)	23 年度(人)	24 年度(人)	25 年度(人)
女性教員	132	136	147	149
男性教員	804	795	798	779
計	936	931	945	928
女性教員の割合	14.1 %	14.6 %	15.6 %	16.1 %

（出典：「部局長等連絡調整会議」平成 26 年 7 月 24 日付け資料を基に作成）

資料 E-1-1-2-4：全国立大学における女性教員の割合

	22 年度(人)	23 年度(人)	24 年度(人)	25 年度(人)
女性教員	8127	8452	8,813	9225
男性教員	53562	54250	54012	53993
計	61689	62702	62825	63218
女性教員の割合	13.2 %	13.5 %	14.0 %	14.6 %

（出典「部局長等連絡調整会議」平成 26 年 7 月 24 日付け資料を基に作成）

同じく平成 22～25 年度における文学部の女性教員の割合は以下のとおり：

資料 E-1-1-2-5：熊本大学における女性教員の割合

	定員	現 員											
		平成 22 年度			平成 23 年度			平成 24 年度			平成 25 年度		
		計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性
教授	38	30	(27)	(3)	32	(29)	(3)	32	(29)	(3)	30	(27)	(3)
准教授	25	32 (*36)	(24) (*26)	(4) (*6)	27 (*31)	(23) (*26)	(4) (*5)	26 (*30)	(24) (*27)	(2) (*3)	28 (*32)	(26) (*29)	(2) (*3)
講師	0	2	(2)	(0)	1	(1)	(0)	1	(1)	(0)	1	(1)	(0)
計	63	60 (*64)	(53) (*55)	(7) (*9)	59 (*63)	(53) (*56)	(7) (*9)	59 *(63)	(54) (*57)	(5) (*6)	59 (*63)	(54) (*57)	(5) (*6)
女性教員割合		14.1 %			14.3 %			9.5 %			9.5 %		

* (*) の数値は外国人教師を含めた数値。

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

熊本大学全体の女性教員数割合は4年間を平均して15.1%、全国立大学の平均は13.8%、文学部の平均は11.9%となっており、文学部の数値は熊本大学全体及び全国立大学の数と比べて低い。しかも、平成22年度から25年度に向かって割合が低下している。この課題に対応すべく、平成25年に「女性教員の割合を、平成27年度までに15%以上にすることを目指す」という方針を掲げ（平成25年5月15日文学部教授会）、その改善を図っている。（中期計画番号：K40）

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 平成24年度に、文学部独自の「女性リーダーシップ養成」に関する検討委員会が、一定期間ではあるが設置され、そこでの議論・検討によって、女子学生が多くを占める文学部における女性リーダーシップ育成にかかわる重要な提言がなされている。ある一定期間ではあったが、当検討委員会の設置と、そこでの議論・検討は意義あるものであり、文学部独自の男女共同参画活動として高く評価される。

2. 文学部における女性教員の割合が、年度が進むにつれて低下傾向にある問題に対処すべく、25年に「女性教員の割合を、平成27年度までに15%以上にすることを目指す」という方針を掲げ（平成25年5月15日文学部教授会）、その改善を図っている。

以上の観点から、文学部における男女共同参画の推進に向けた活動は適切に実施されており、期待される水準にあると判断される。

観点1-3 活動の実績及び学生・研究者の満足度から判断して、活動の成果があがっているか。

(観点に係る状況)

文学部における女性教員の割合は、平成22年度～25年度の平均で11.9%で、熊本大学全体(15.1%)及び全国立大学(13.8%)と比べて低いこと、しかも22年度から25年度に向かって割合が低下している課題については「観点1-2」で述べたとおりである。そこで、平成25年5月15日の教授会で、「女性教員の割合を、平成27年度までに15%以上にすることを目指す」という方針を掲げ、その改善を図ってきているが、その改善努力の結果が見られる。すなわち、平成26年度の人事において、新規採用教員4名のうち2名(50%：准教授1名、講師1名)が女性教員となっており、その結果、文学部所属全教員数62名(定員63名)のうち女性教員が8名となり、全体の約13%を占める結果となった(教授3名、准教授4名、講師1名)：

資料 E-1-1-3-1：女性教員割合

* () の数値は内数で女性教員数

学科	教授	准教授	講師	計
総合人間学科	9 (1)	9 (1)		18 (2)
歴史学科	5 (1)	5 (1)		10 (2)
文学科	10 (1)	11 (2)	2 (1)	23 (4)
コミュニケーション情報学科	4	6		10
永青文庫研究センター	1			1
計	29 (3)	31 (4)	2 (1)	62 (8)
女性教員の割合	10.3 %	12.9 %	50 %	12.9 %

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料「文学部教員名簿」平成26年4月1日現在)

平成25年度以前の4年間に比べて明らかに活動の成果が現れている。しかし、目標の数値(15%以上)達成に向けて今後ともに女性教員の採用に努め、その比率を上げる努力を継続する必要がある。なお、熊本大学全体の平成27年度の目標数値は17%を掲げている。

平成20年度に、文学部の女性教員から、女性教員の職場環境の整備に関して「保育所への送迎のために車両入構証を取得したいが、通勤距離が3km以内であるため申請できない。男女共同参画推進の観点から特別に認可してもらえないだろうか。」という提案が、所属学科長を通してなされた。これは学長及び全学委員会委員長を通して、速やかに環境委員会に提起され、同委員会において下記の決定がなされ、女性教員が働きやすい環境整備の一部が実現された。文学部から発信された要求に対するこの答申は現在も継続される形で生きており、本学全体における男女共同参画の成果となっている：

資料 E-1-1-3-2：男女共同参画推進に伴う入構証発行に関する特別措置

記

男女共同参画推進に伴う入構証発行に関する特別措置

(特別措置の内容) 職員等は、通勤距離により、車の入構が制限されているが、男女共同参画の推進のため、希望があれば、保育園等の送り迎えの場合、駐車場への入構を許可する。

(特別措置の条件)

在園証明書その他の在園を証明することができる書類を提出すること。

(平成 25 年 4 月 1 日現在)

(出典：「部局長等連絡調整会議」平成 21 年 7 月 23 日付資料)

女性教員の割合が僅かながら目標値に達していない点の課題については既に述べたが、そのような状況の中、現在在籍している女性教員の実績は目覚ましいものがある。教授 2 名は科学研究費補助金の基盤(A)を継続的に取得するほか、日本学術会議会員(木下尚子歴史学科教授)、同会議連携会員(積山薫総合人間学科教授)を務めるなど、学界でも極めて高いステータスを築いている。また、その他、女性教員による国際学会での発表(文学科朴美子教授)、国際学会誌における多くの論文掲載(積山薫総合人間学科教授)、地域社会への多大な貢献(総合人間学科木村博子教授)など、その活躍は文学部の大きな推進力となっている。すなわち、数は少ないものの、女性教員の活動の質はきわめて高い。それは文学部の男女共同参画面における大きな成果であり、文学部が女性教員にとって活躍しやすい場であること、男女共同参画を推進する精神風土を有していることの証左でもある。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 平成 22 年度から 25 年度にかけて減少傾向にあった女性教員の割合が、改善努力の結果、26 年度には 12.9%にまで改善され、成果が見られる。

2. 文学部女性教員から発信された、女性教員の職場環境に関する提言に対する答申が現在も継続される形で生きており、本学全体における男女共同参画に寄与するという成果をあげている。

3. 現在在籍している女性教員は、日本学術会議での要職、国際学会での発表、国際学会誌への論文掲載、地域社会への多大な貢献など、目覚ましい活躍をしており、文学部の男女共同参画面における大きな成果である。

以上の観点から、文学部における男女共同参画活動の実績・成果は期待される水準にあると判断する。

観点 1-4 改善のための取り組みがなされているか。

(観点に係る状況)

女性教員割合の改善を目指して、「女性教員の割合を、平成 27 年度までに 15%以上に

することを旨とする」という方針を掲げ、各学科の人事において共通の認識として共有し、改善に取り組んでいる。

平成 24 年度に設置された「女性リーダーシップ養成」に関する検討委員会からの提言に示されている学部の授業の立ち上げや、ロールモデルとしての外部識者の招聘などの実施にはまだ時間を要するが、卒業論文を通しての「達成困難な課題をクリアしたことによる成功体験」を学生に持たせることが、リーダーシップの養成にも遠からず寄与するという観点から、卒論作成に必要なスキルとモチベーションを身につけられるよう指導・サポート体制を充実させるということに関しては、各教員が卒論指導に当たって十分に意識し、実施しているところである。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 女性教員の割合目標値（15%以上）の達成を目指すべく、文学部教員全員が共通認識を持って、改善に取り組んでいる。平成 26 年度の人事（4 名の新規採用にあたって、2 名（50%）が女性教員である）はその証左である。

2. 「女性リーダーシップ養成」に関する検討委員会からの提言を受けて、実現できることから、改善努力を怠っていない。

以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

4. 質の向上度の分析及び判定

分析項目 I 目的に照らして、男女共同参画に向けた活動が適切に行われ、成果を挙げていること。

改善、向上している。理由は以下のとおり。

1. 文学部独自の「女性リーダーシップ養成」に関する検討委員会が、一定期間ではあるが、平成 24 年度に設置され、そこでの議論・検討によって、女子学生が多くを占める文学部における女性リーダーシップ育成にかかわる非常に重要な指針が明確にされ、男女共同参画の推進に大いに貢献する成果をあげている。この種の委員会は平成 23 年度以前には設置されたことがなく、第 I 期中期計画期間の最終年度である 21 年度と比べて、男女共同参画意識は明らかに高くなっている。

2. 文学部女性教員から発信された、女性教員の職場環境に関する提言に対する答申が現在も継続される形で生きており、本学全体における男女共同参画に寄与している。

3. 平成 22 年度から 25 年度へと年度が移行するに従って低下傾向にあった、文学部における女性教員の割合数値が、目標にはまだ達しないものの、26 年度にかなりの改善がなされており（9.5%→12.9%）、質的向上が見られる。

Ⅶ 管理運営の領域に関する自己評価書

1. 管理運営の目的と特徴

文学部の教員個人が取り組むべき管理・運営活動として以下の目的が掲げられている：

VII-1-A：管理・運営活動の目的

1. 全学及び学部委員会への貢献
2. 学部運営に係る活動の充実
3. 研究室等における安全衛生管理の取り組み
4. 広報活動への貢献

(出典：『平成 25 年度文学部規則集』 p. 40)

[想定する関係者とその期待]

在学生、受験生、関係高校、保護者、卒業生、卒業生の就職先企業、地域社会、マスコミが想定され、学部の管理・運営の充実、またそれについての十分な情報提供が期待されている。

2. 優れた点及び改善を要する点の抽出

【優れた点】

1. 管理運営等に関わる体制は適切かつ十分に整っている。運営会議、各種委員会、事務組織の三者の間には連携体制も構築されている。管理運営組織及び事務組織は適正な規模・機能を有しており、また、危機管理に関しても、コンプライアンス及び災害への備え等の対応が組織的に行われている。管理運営全般にかかわる諸規則も明確に規定されている。
2. 事務職員は、管理運営に関わる職務スキルや能力を向上させるための種々の研修に積極的に参加し、事務組織が十分な任務を果たすことができるよう努めている。事務職員が陪席する文学部内の会議数も、平成 25 年度まで 6 会議だったが、26 年度には 9 会議に増え、学部の管理運営体制がさらに整備・改善されている。
3. 総合的な活動に関する自己点検・評価のための実施要領は明確に定められており、自己点検・評価を行う上での実施体制も十分に整っている。
4. 外部資金申請及び管理・運用のための説明会（「科学研究費助成事業公募要領等学内説明会」、「文系研究者向け科研費セミナー」、「研究費の執行等に関する説明会」、「寄附金の経理等に関する説明会」など）にも教職員は積極的に参加している。
5. 教育研究活動等についての情報の公表及び説明責任に関しては、各年次学生に対するガイダンスの実施、教務関係の行事スケジュールの周知徹底、入試説明会での説明、文学部 HP、その他、文学部及び全学発行の刊行物、各学科の研究室から発行されている機関誌などによって学内外に適切かつ十分になされており、説明責任も十分に果たされている。
6. 入学者受け入れ方針、カリキュラム編成方針、学位授与方針が適切に定められ、適切に公表・周知されている。
7. 無線 LAN 環境及びその継続的な整備、学生が利用可能なパソコン台数、教員・学生からの継続的な改善要望に対する対応など、教員及び学生の教育・研究活動を展開する上で必要な ICT 環境の整備・改善が適切になされている。
8. 教員・学生が利用できる文学部専用の図書室があり、約 7 万冊に及ぶ図書が系統的に配架され、最適の図書利用環境が整っている。また、各履修モデル（分野）の学生研究室には学術雑誌を中心とした図書が配置され、さらに各教員研究室に配置されて

いる図書も学生は利用することができる。

9. 各履修モデル（分野）の学生研究室は平日・休日ともに開放され、学生の自主学習・交流の場として中心的に機能している。学生研究室には多くの情報機器、無線 LAN も整備されている。
10. 実習室、実験室、メディア演習室、ロビー学生室なども整備され、学生が自主学習のために利用できる。ロビー学生室には平成 25 年度から学生用コピー機も設置され、いつでも使用できる状態にある。メディア演習室は平成 25 年度に 2 室に増設され、映像機器、視聴覚教材を利用した自主学習に最適の学習環境となっている。
11. 文・法棟 1 階に男子トイレを設置して欲しいとの要求が、学生、教職員双方から上がっており、それに対応すべく、平成 26 年度に、27 年度の学内営繕要求事業として申請する。
12. 学習環境全般にわたって、学生からのニーズを聞き取る場が設定されており、そこで出された要望に関しては、可能な限り対応し、改善・整備が継続的に行われている。

【改善を要する点】

文・法学部棟における施設の老朽化に伴う改修や、視聴覚機材の更新など、学生の学習環境その他に関わる整備・改善を要する部分がある。今後、予算要求等を通して改善を進めていく。

3. 観点ごとの分析及び判定

分析項目 I 管理運営体制及び事務組織が適切に整備され機能していること

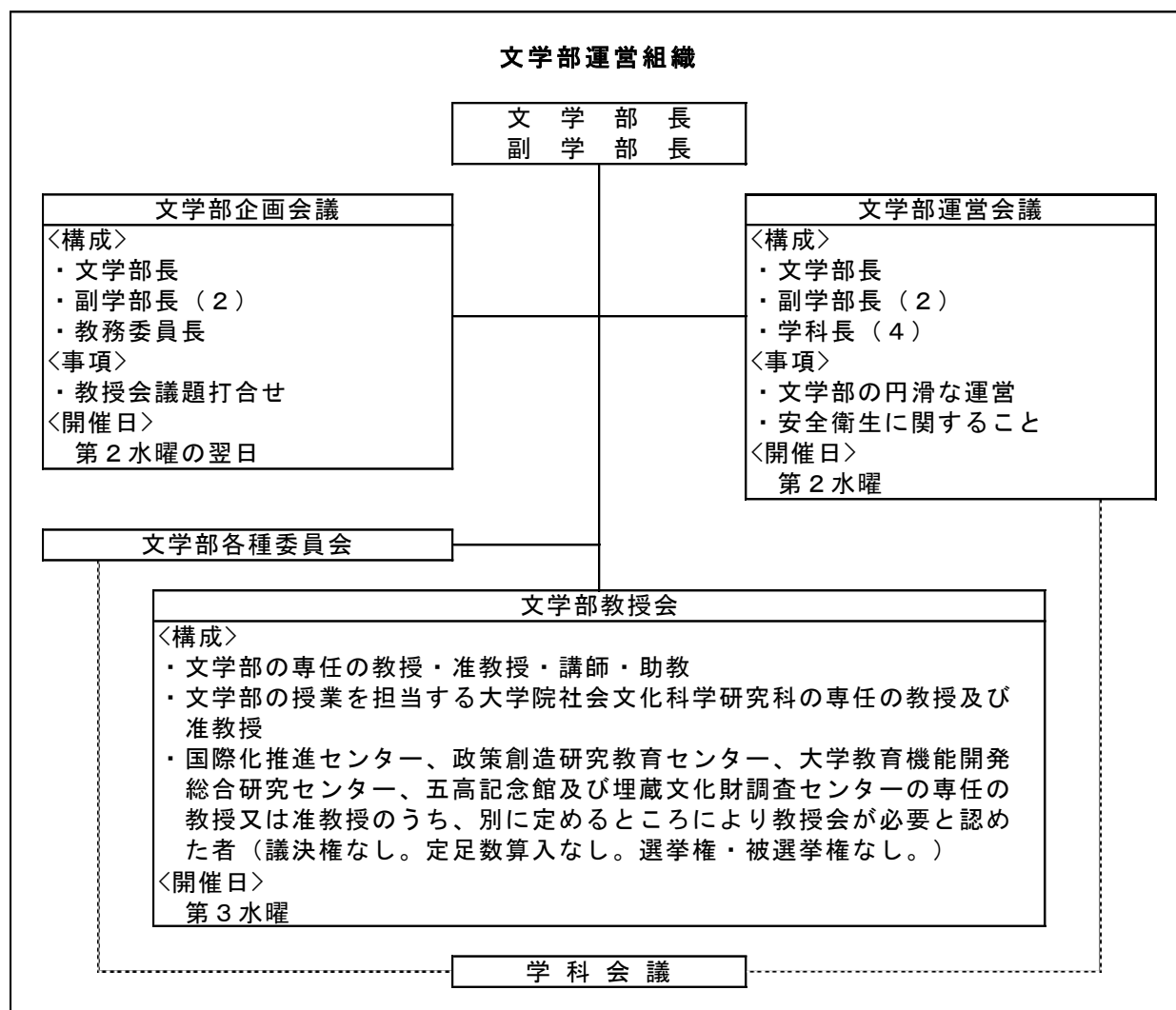
観点 1-1 管理運営のための組織及び事務組織が、適切な規模と機能を持っているか。また、危機管理等に係る体制が整備されているか。

（観点に係る状況）

教育課程の編成、学生の入学・修了及び教員人事等に関する事項を審議するため、教授会を設置している。さらに教授会の下に運営会議を設置し、学部の基本方針及び管理・運営にかかわる重要事項を審議している。

事務組織として「人文社会科学系事務ユニット」を置き、ユニット長、チームリーダー、「総務担当」及び「教務担当」を配置している：

資料 Z-1-1-1-1 : 文学部運営組織



（出典：「熊本大学文学部教授会規則」より抜粋）

この管理運営組織に加え、事務組織及び各種委員会があり、互いに連携体制を構築している：

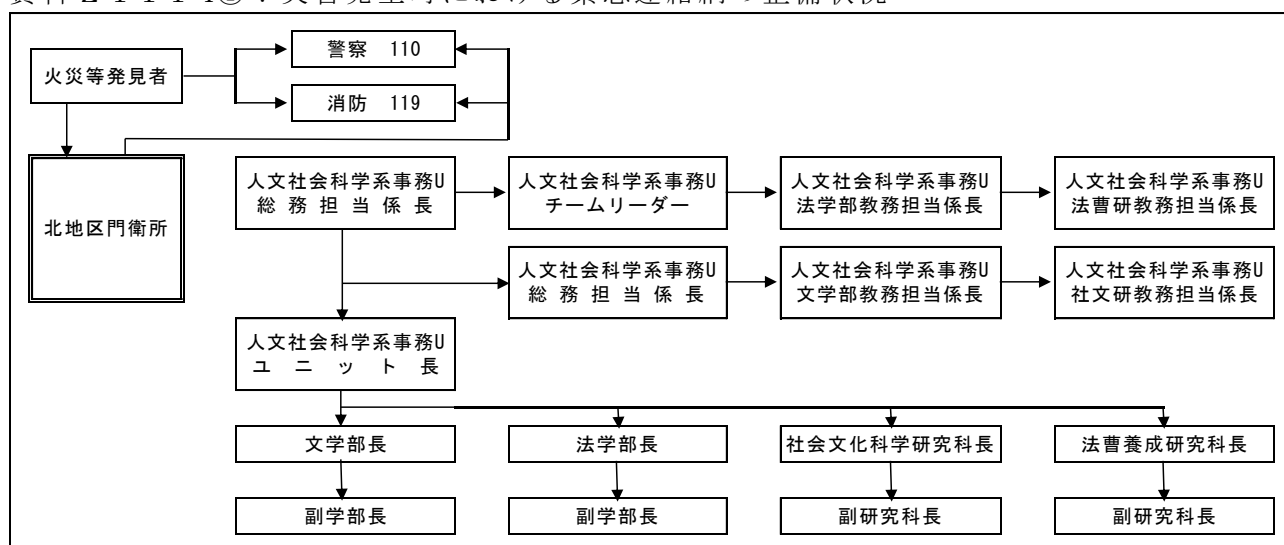
入試委員会	不定期				◎	
広報・情報化委員会	不定期				○	
国際交流委員会	不定期				○	

◎は議事要録作成者

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

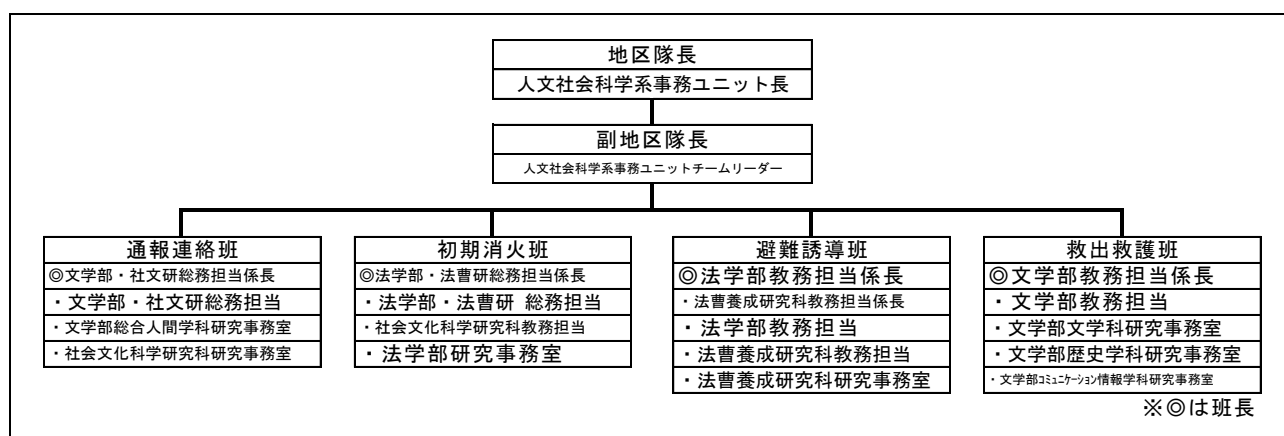
災害への備えとしては、本学部を含む人文系四部局において緊急連絡網を整備し、不測の事態に備えるとともに、「地区隊自衛消防組織」を編成し、平成23年度以降、隔年で消防・防災訓練を実施し、多数の学生・教職員が参加している。本訓練は、東日本大震災以降、新たに実施されている（中期計画番号：K92）：

資料 Z-1-1-1-4①：災害発生時における緊急連絡網の整備状況



(出典：人文系四部局における緊急連絡網)

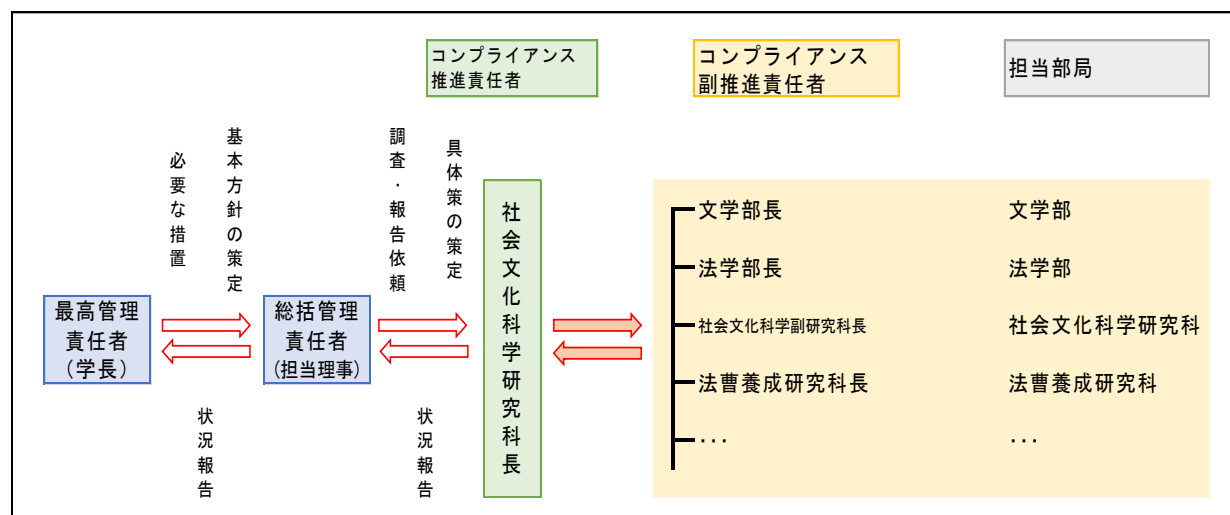
資料 Z-1-1-1-4②：火災発生時の対応組織編成



(出典：自衛消防組織編成表（人文社会科学系地区隊）)

研究費の不正防止については「競争的資金等の管理等に関する規則」に基づき、管理体制を構築している（中期計画番号：K93）：

資料 Z-1-1-1-5：人文系四部局等における競争的資金の管理体制



(出典：「熊本大学における競争的資金等の管理等における責任体系図」より抜粋)

文学部棟におけるエコ環境推進活動も、省エネルギー推進ワーキング委員及び省エネルギー担当職員（複数名）を中心に推進されている。全学の「省エネルギー推進ワーキング委員会」での審議・方針に沿って、黒髪北キャンパスをひとつの単位としつつ、文学部でも省エネルギー対策に努めている。（中期計画番号：K86）

管理運営全般に関わる諸規則は『文学部規則集』の目次一覧でよく示されている：

資料 Z-1-1-1-6：『文学部規則集』目次内容一覧

第1章 管理運営組織	
○管理運営組織	1
○文学部規則	2
○文学部教授会規則	12
○国際化推進センター、政策創造研究教育センター、大学教育機能開発総合研究センター、五高記念館及び埋蔵文化財調査センター教授等の文学部教授会所属に関する申合せ	14
○文学部教授会運営に関する申合せ	15
○文学部人事の票決に関する申合せ	16
○文学部学科長に関する規則	17
○文学部における副学部長、全学各種委員会委員及び文学部各種委員長等の選出に関する申合せ	18
○文学部附属永青文庫研究センター規則	19
○文学部図書室等利用規則	22
第2章 人事	
○文学部長候補者選挙細則	24
○文学部教員選考細則	27
○文学部教員選考基準	28
○文学部教員選考基準に関する申合せ	29
○文学部と社会文化科学研究科との協力関係についての文学部における申合せ事項	30
○文学部から社会文化科学研究科へ移籍した教員の人事について	31
○文学部における成績優秀者の基準	32
○文学部昇給区分（A・B）基準の運用に関する申合せ	33
○文学部における教育活動表彰要領	34

○文学部教員の個人活動評価実施要領	36
○文学部サバティカル研修に関する細則	41
○文学部サバティカル研修に関する申合せ	44
○文学部における教員人事の手続き・スケジュールについて	45
第3章 予算	
○文学部予算配分原則、申合せ等	50
○文学部国際学会等発表助成制度に関する申合せ	54
○文学部学術研究推進経費の公募要項	55
○文学部海外研修助成制度に関する申合せ	57
第4章 入試	
○推薦入学試験実施に関する申合せ	58
○文学部留学生面接試験実施申合せ	60
○私費外国人留学生の合否選考基準について	61
○文学部第3年次編入学試験合格基準	62
第5章 教務	
○文学部履修細則	63
○文学部論文試験細則	74
○論文試験細則の申合せについて	75
○卒業論文題目変更について	76
○受講制限の申合せについて	77
○他の大学における修得科目の単位認定について	78
○文学部「授業改善のためのアンケート」実施基準	79
○ティーチング・アシスタント(TA)制度の運用について	80
第6章 学生生活支援	
○外国人留学生奨学金選考基準	81
○文学部国際奨学事業実施要領	82

(出典：『平成25年度文学部規則集』)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 教育課程、人事等に関わる事項を審議する教授会を置き、その下に学部の基本方針及び管理・運営等に関わる重要事項を審議する運営会議を設置し、適切な体制・運営がなされている。関連の委員会及び事務組織との連携体制も適切に構築している。
 2. 管理運営組織及び事務組織は適正な規模・機能を有している。
 3. 危機管理に対しては、コンプライアンス及び災害への備え等に関して組織的に対応している。
 4. 学部内の省エネ活動の体制・活動など適切になされている。
 5. 管理運営全般にかかわる諸規則も『文学部規則集』に明確に規定されている。
- 以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

観点1-2 構成員（教職員及び学生）、その他学外関係者の管理運営に関する意見やニーズが把握され、適切な形で管理運営に反映されているか。

（観点到係る状況）

平成 25 年度の「学部長と学生代表による懇談会」で学生から出された学習環境関係の要望、学部側の回答例、実際の対応を以下に挙げる：

資料 Z-1-1-2-1：平成 25 年度「学部長と学生代表による懇談会」内容抜粋

- ・建物内での携帯電話の電波を改善してほしい。
【回答】
本年度中に全学教育棟の屋上にKDDIのアンテナを建てることになっている。また、NTTドコモについても近い将来、同様の措置をとることになっている。
→ 実際に、アンテナの設置を行った。
- ・Wi-Fi(無線 LAN)の環境を改善して欲しい。
【回答】
学部内で調査中。全学的にも調査・対応中である。
→ 業者に調査を依頼し、改善の対応をした。
- ・自販機のレパトリーを増やしてほしい。
【回答】
業者に確認し、可能であれば対応したい。
→ 業者に頼み、対応してもらった。
- ・教員免許取得のための法学部開講科目と文学部開講科目が重複しないようにしてほしい。
【回答】
原則、重複しないよう時間割を作成しているが、もし重複がある場合は、担当教員へその旨連絡していただきたい。
- ・文学部国際奨学事業の選考では高学年が優先されているように思われる。GPA などを判断基準に、低学年も公平に選考してほしい。
【回答】
国際交流委員会で、計画書、学業成績及び面接により総合的に判断しており、高学年を優先しているということはない。(国際交流委員会で確認済み)
- ・メディア演習室のメディア機器をもっと充実してほしい。
【回答】
現在、メディア機器の補充を進めている。
→ 1 室しかなかったメディア演習室を 2 室に増設し、各室の暗幕カーテン、スクリーン、大型モニターなどを補充、充実させた。
- ・1 階玄関横のロビー学生室を土日も開けてほしい。
【回答】
検討します。四部局が関わる問題なので、四部局で検討するのに多少時間がかかると思う。また、ロビーの中に設置されているコピー機の問題もあるのでその対応もしなければならないが、検討のうえ、できるだけ開放するようにしたい。
→ 平成 26 年度 5 月から土・日・祝日開放することが決まり、現在開放している。
- ・就職相談室を玄関の近くに設置してほしい。現在の位置は目立たず、活用されていない。
【回答】
現在、検討中である。
→ 3 階の奥にあった就職相談室を、学生が利用しやすい場所として、正面玄関近くの 2 階の応接室に移した。
- ・男子トイレを各階に配置してほしい。
【回答】
検討する。
→ 現在、なお検討中。

(出典:人文社会科学系事務ユニット資料:「平成 25 年度学部長と学生代表による懇談会議

事要領」より抜粋)

最後の要望「男子トイレを各階に配置してほしい」に関しては、平成 27 年度の学内営繕事業の要望として提出することになった。(中期計画番号：K87)

また、文学部のオープンキャンパスは、文学部広報・情報化推進委員会が中心となり、毎年、高校の夏休み期間である 8 月に開催されているが、それに合わせて、平成 25 年度から保護者説明会を行い、「質問票及びアンケート」を配布し、保護者の立場からの意見を集約している(「平成 25 年度熊本大学文学部オープンキャンパス保護者控え室懇談会質問票及びアンケート」)。そこで出される学部の管理運営や在学生の情報提供等についての意見は、可能な限り、学部の管理運営に反映させることにしている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 学習環境全般に関わる学生の意見・要望、さらには学外者としての保護者の意見・要望を直接に聞く機会が設けられ、その把握が十分に図られている。
 2. 1. で出された意見・要望に対しては具体的な対応がなされ、出された意見を学部の管理運営・教育環境に適切に反映させている。
- 以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

観点 1 - 3 管理運営のための組織及び事務組織が十分に任務を果たすことができるよう、研修等、管理運営に係る職員の資質の向上のための取り組みが組織的に行われているか。

(観点に係る状況)

管理運営のための事務組織を十分に機能させるべく、事務職員は種々の研修に参加している(中期計画番号：K75)：

資料 Z-1-1-3-1：事務職員の研修参加状況

職名	参加者数(人：延べ人数)				主な研修プログラム (主催)
	22年度	23年度	24年度	25年度	
事務ユニット長	1	2	3		・国立大学法人等部課長級研修(国立大学協会) ・熊本大学ユニット長研修(学内) ほか
チームリーダー		3	2		・熊本大学チームリーダー研修(学内) ・勤務時間管理に関する研修(学内) ほか
係長	1	10	5	7	・九州地区係長研修(人事院九州事務局) ・九州地区国立大学法人等係長研修(九州大学他) ほか

主任	4	8	2	15	・九州地区学生指導研修会（九州工業大学他） ・情報システム統一研修（文部科学省） ほか
係員	3	7	16	3	・九州地区国立学校会計事務研修（琉球大学他） ・熊本大学中堅職員研修（学内） ほか
事務補佐員	8	2	5	2	・業務遂行能力向上研修（ビジネスマナー等：学内） ・共通スキル育成研修（タイムマネジメント等：学内） ほか
計	17	32	33	27	

（出典：人文社会科学系事務ユニット資料）

また、学内で実施される情報セキュリティ研修、ハラスメント対応研修、科研費獲得研修、研究不正防止研修などにも、教員及び事務系職員ともに積極的に参加しており、学部の管理運営に関する教職員の資質の向上に努めている。

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

事務職員は種々の研修に積極的に参加し、部局の管理運営の向上に努め、事務組織としての任務を十分に果たすべく努めている。期待される水準にあると判断する。

分析項目Ⅱ 活動の総合的な状況に関する自己点検・評価が実施されているとともに継続的に改善するための体制が整備され、機能していること。

観点2-1 活動の総合的な状況について、根拠となる資料・データ等に基づいて、自己点検・評価が行われているか。

（観点に係る状況）

自己点検・評価のための「個人活動評価」実施要領が明示されている：

資料 Z-2-2-1-1：「個人活動評価」実施要領

文学部教員の個人活動評価実施要領

[平成24年6月20日一部改正教授会承認]

この要領は、熊本大学における教員の個人活動評価実施要項（平成18年10月26日制定）を踏まえ、文学部において教員個人活動評価を実施するための必要な事項を定める。

1 評価領域
教育、研究、社会貢献及び管理運営の4領域とする。

2 目標の提示

学部長は、適切な時期に、教員に組織の目標を提示する。(別紙参照)

3 活動目標及び努力配分

- 1) 教員は、学部長が示す目標及び過去の実績を踏まえて、評価領域ごとに3年間の活動目標と努力配分を設定し、指定された期日までに学部長へ提出する。教員の努力配分は、原則として次のとおりとし、各評価域の合計が100となるように設定する。

(%)

	教授	准教授・講師	助教
教育	20～50	20～40	20～40
研究	20～40	20～50	20～40
社会貢献	10～30	10～30	10～20
管理運営	20～30	10～20	10～20

- 2) 教員は、毎年度、評価領域ごとに年度ごとの取組方法や具体的プロセス等を年度計画としてまとめ、指定された期日までに学部長へ提出する。
- 3) 活動目標、努力配分及び年度計画は、学部長と相談の上、修正できるものとする。

4 評価の観点 (TSUBAKIの項目を基本とする)

1) 教育

①担当授業科目

科目名、科目区分、開講区分、単位数、履修者数

②研究指導等

研究指導学生数(学部、修士、博士)(うち留学生数)

正規以外の学生受入数(研究生、科目履修学生、単位互換学生)

研究員の受入数(客員教授・研究員、博士研究員、受託研究員)

③学位授与審査(一般、留学生)

主査修士、主査博士、副主査修士、副主査博士

④学生相談

履修相談件数、進路相談件数、生活相談件数、その他相談件数

⑤教育活動に関する受賞

賞名、授与機関、受賞内容

⑥FD活動

活動区分、参加回数

⑦安全衛生

学生への安全衛生教育

⑧教育の質向上への取組み

授業計画(シラバス)・目標の妥当性

双方向授業の取組み状況

教育到達度を評価するための育成評価法への取組み

成績評価の学生へのフィードバックの取組み状況

授業形態・授業方法改善の取組み

授業テーマ開発、授業内容更新の取組み

教材開発・教材出版

⑨その他教育に係る活動

教育活動区分、活動内容

- 2) 研究
- ①論文
 - 論文題目名、掲載種別、査読、共著区分
 - ②著書
 - 著書名、著書種別、著書形態
 - ③研究発表
 - 会議区分、題目又はセッション名、発表形態、参加形態
 - ④知的財産権
 - 知的財産権区分、発明の名称、参加形態
 - ⑤作品
 - 名称、作品分類、参加形態
 - ⑥学術関係受賞
 - 受賞学術賞名、受賞区分、授与機関、参加形態
 - ⑦科研費（文科省・学振）獲得実績
 - 研究種目、新規/継続別、研究題目、科研費獲得実績明細
 - ⑧その他競争的資金獲得実績
 - 事業名、研究題目、獲得実績明細
 - ⑨受託研究受入実績
 - 事業名、研究題目、受託研究区分、実施実績明細
 - ⑩共同研究実施実績
 - 事業名、研究題目、共同研究区分、実施実績明細
 - ⑪奨学寄附金
 - 寄付金名称、寄附金額
 - ⑫学内研究助成金獲得実績
 - 助成金区分、研究題目、資金獲得実績明細
 - ⑬学会活動
 - 学会活動、役職・役割名
 - ⑭学会等主催
 - 学会区分、学会等名、参加者数
- 3) 社会貢献
- ①社会貢献活動（国際貢献を除く）
 - 社会活動区分、活動内容、開催回数、参加者数
 - ②国際貢献活動
 - 活動区分、活動内容、人数
 - ③学外委員会等活動
 - 学外委員会等、役職・役割名
- 4) 管理運営
- *①③以外はいずれかアピールできる観点を選択
 - ①学内委員会活動
 - 活動区分、活動内容
 - ②学生募集
 - 活動区分、活動内容
 - ③安全衛生
 - 研究室等における安全衛生への取り組み
 - ④その他管理運営に係る活動
 - 活動名称、活動内容

5 教員による自己評価

- 1) 教員は、1年目及び2年目の年度末において、評価領域ごとに年度計画の達成状況について自己評価を行い、個人活動（自己）評価書を作成し、指定された期日までに学部長に提出する。
- 2) 教員は、3年目の年度末において、年度計画及び活動目標の達成状況について自己評価を行い、個人活動（自己）評価書を作成し、指定された期日までに学部長に提出する。
- 3) 教員は、上記1)、2)において、TSUBAKIデータ及び文学部で定めた資料を、学部長に提出する。
- 4) 上記1)、2)における自己判定は、次の3段階で行う。

評 語
A：十分に目標を達成できた
B：おおむね目標を達成できた
C：目標を達成できなかった

6 学部長による評価

- 1) 評価に当たっては、学部長、副学部長、学科長からなる文学部教員個人活動評価委員会（以下「評価委員会」という。）を設置する。
- 2) 学部長は、3年目の年度末において、教員から提出された評価書に基づき、次のとおりの評語により判定を行い、必要に応じて所見を提示し、評価委員会の議を経て、評価結果を個人活動評価書（案）として各教員に通知する。

評 語
3：特筆すべき成果を上げた
2：一定の成果を上げた
1：改善を求める

7 評価の結果に対する申立て

- 1) 教員は、個人活動評価書（案）に対して意見がある場合、通知を受けた日から10日以内に学部長に申立てを行うことができる。
- 2) 教員は、評価の最終結果について異議がある場合、大学評価会議に異議を申し立てることができる。

8 評価結果の利用

- 1) 学部長は、特に高い評価を受けた教員に対して表彰等の措置を行う。
- 2) 学部長は、特に低い評価を受けた教員に対して適切な指導を行うとともに、次期間の活動目標、努力配分及び年度計画の修正を求める。

9 その他

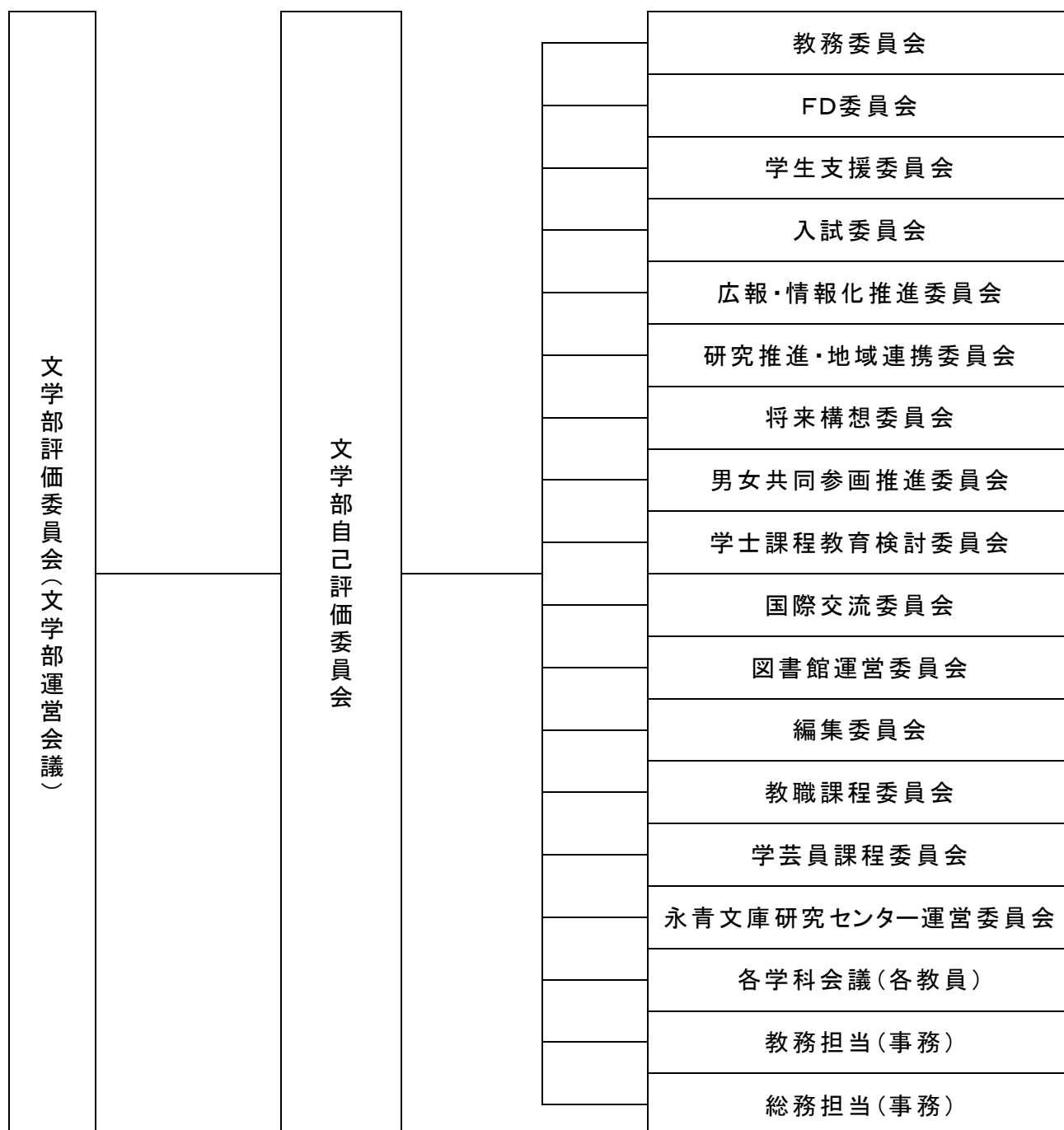
この要領は、必要に応じて見直すものとする。

この要領は、平成24年6月20日から実施する。

(出典：「平成25年度文学部規則集」 pp. 36-39)

学部の自己点検・評価を行う上での実施体制は以下のようになる：

資料 Z-2-2-1-2：自己点検・評価実施体制



（出典：文学部自己評価委員会資料：「文学部自己評価実施要領」より）

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

1. 自己点検・評価のための「個人活動評価」の実施要領が明確に定められている。
 2. 自己点検・評価を行う上での実施体制が十分に整っている。
- 以上の観点により、期待される水準にあると判断する。

観点 2-2 活動の状況について、外部者（当該大学の教職員以外の者）による評価が行われているか。

（観点に係る状況）

人文社会科学系事務ユニットの蓄積資料、各種委員会の蓄積資料、大学情報アーカイブス、自己評価委員会収集資料等を根拠としつつ、自己点検・評価を行っている。（中期計画番号：K82・83）

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

全学的な「組織評価」に則って、学部の自己点検・評価が適切に行われており、期待される水準にあると判断する。

観点 2-3 評価結果がフィードバックされ、改善のための取り組みが行われているか。

（観点に係る状況）

平成 19 年に実施した組織評価を踏まえた改善勧告が学長からあった後、それに対する文学部の対応状況について報告を行ったが、平成 21 年 3 月、評価会議議長名で対応状況が不十分な事項等についての指摘がなされた。そこで、運営会議で対応を協議し、それぞれの項目について責任者を決め、関連する委員会を通して改善を図っていった。

例えば、文学部は開講科目が他より多く、教員の負担が過大であるとの勧告については、文学部学士課程教育検討委員会を設置して検討を重ね、平成 24 年度に、文学部として養成したい人材像をより明確にすべく「教育目的」を変更し、必要と考える学士力に対応する科目を新設するなどカリキュラムの改革を行った。加えて、コースが養成したい学士力をより明確にするため、コースごとに学位授与方針を策定し、平成 25 年度の『学生便覧』に掲載した。

また、「社会貢献で大きな成果を上げている取組について、広報が不十分である。文書、Web ページだけではなく、大学の広報誌等を通じて積極的に情報発信する必要がある。」という改善勧告についても、その後、『熊大通信』等を通じて積極的な情報発信に努める一方で、平成 24 年度にリニューアルされた文学部 HP に新たに「地域貢献」の項目を加えて、教員の地域貢献・社会貢献活動を紹介するなどの改善を行った。

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

組織評価に基づく学長の「改善勧告」に対して、学部長を中心とする運営会議で改善策を検討し、各種委員会を通して具体的対応を行っている。このように、評価結果が適切にフィードバックされ、改善の取り組みがなされており、期待される水準にあると判断する。

分析項目Ⅲ 教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされていること。（教育情報の公表）

観点 3-1 目的（学士課程であれば学部、学科又は課程ごと、大学院であれば研究科又は専攻等ごとを含む。）が適切に公表されるとともに、構成員（教職員及び学生）に周知されているか。

(観点に係る状況)

文学部における教育・研究活動、学生の活動などについての情報は、文学部 HP、複数の刊行物によって提供されている（中期計画番号：K84）：

資料 Z-3-3-1-1：文学部における広報刊行物

刊行物	配布対象
『文学部案内』	高校生
『文学部通信』	在学生及び保護者
『一般入試 学生募集要項』	受験生
オープンキャンパスリーフレット	高校生

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料を基に作成)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

文学部 HP、その他文学部で作成されている刊行物によって、教員及び学生の教育・研究活動等についての情報が適切に公表され、説明責任が果たされている。期待される水準にあると判断する。

観点 3-2 入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針が適切に公表・周知されているか。

(観点に係る状況)

4 学科の「入学者受け入れ方針」が明示され、公表・周知されている（中期計画番号：K12）：

資料 Z-3-3-2-1：4 学科の「入学者受け入れ方針」（前掲資料 A-1-1-1-10 と同一資料）

<総合人間学科>

現代における人間のあり方や社会のあり方を、「人間」「社会」「地域」という三つの角度から、論理的に考えたり、実験によって分析したり、大学の外に出て調査や実習をしたりしながら学んでいく。それによって現代社会や現代に生きる人々が直面するさまざまな問題をどのように分析したらよいか、それに対処するにはどうしたらよいかを自分自身で考え、その考えに基づいて行動できる能力を育むことを目標としている。以上のような観点から、本学科は次のような人を求めている。

1. 人間や人間関係への関心と探究心を持ち、人間に関わる問題に実際に取り組んでいきたいと考えている人。
2. 現代社会の抱える諸問題や日本及び世界各地の社会や文化に関心を持ち、それらを自分で分析する力をつけたいと考えている人。
3. 地域社会や地域文化に関心を持っていて、それらが抱える問題に実際に取り組んでいきたいと考えている人。

<歴史学科>

本学科の教育理念は、自らの生きる「現実」との緊張関係の中で「過去」の歴史を読み解き、混迷する現代社会にあって、常に「人間」や「社会」、そして「時代」の本質を根底から思考する能力を持った人材を育成することにある。こうした観点から、本学科は次のような人を求めている。

1. 歴史を学ぶことを通じて、「人間」の本質と可能性を探求し、新しい時代と社会とを切り開いていこうとする意欲を持ったひと。
2. 国際交流や国際協力等の実践的活動に関心を持ち、歴史という長期的視点から、異文化社会の本質を理解したいと考えている人。
3. 遺跡発掘調査や史料解読といった高度の技能を身につけ、より高い専門性を持って、文化財行政や歴史教育に携わりたいと考えている人。

<文学科>

本学科は、言語及び文学をはじめとするさまざまな言語文化を研究し学ぶ学科です。あるいは、言語と文化を生み育ててきた人間の諸活動の考察を通して、人間の「生」のありようを研究する学科であるとも言えるでしょう。そのような観点から、日本語を含む多様な言語の習得を目指すとともに、鋭い感受性、柔軟な思考力、論理的な理解力を持ち、私たちを取り巻くさまざまな事象を適切に分析し、明快に表現できる人材を育成したいと考えている。以上のような観点から、本学科は次のような学生を求めている。

1. 日本を含むいろいろな国の言語、文学、文化に強い関心を持ち、それらを学ぶことを通じて人類の文化や現代社会に対する理解を深めたいと考えている人。
2. 英語をはじめとする外国語の運用能力と異文化を正しく理解する能力を身につけ、国際的な舞台で活動したいと考えている人。
3. 言語や文学に対する幅広い知識と的確な分析・表現能力を活かし、教育・研究の仕事に従事したいと考えている人。

<コミュニケーション情報学科>

高度な実践的英語力と情報コミュニケーション能力・スキルを習得して、高度情報社会で求められている、実践で力を発揮する情報コミュニケーションのエキスパート兼リーダーを養成したいと考えている。一人ひとりの学生が、自ら問題を発見し、自分の頭で知恵を絞り、言葉を紡ぎ、自主独立でありながらも他人を尊び、そして、互いに協力してアイデアを形にしていく教育を目指す。このような観点から、本学科では次のような人を求める。

1. 理論だけでなく、自らの体験を通して、新聞・放送・広告といったマスメディア、インターネットに代表される情報技術の仕組みと運用など、コミュニケーションと情報に関するさまざまな事象について考えたい人。
2. オーラルコミュニケーションを中心に、英語によるディスカッションやディベート等に対応できる高いレベルの実践的英語運用能力を習得したい人。

(出典：『平成 26 年度一般入試学生募集要項』 pp. 2-3)

平成 25 年度から、各コースの「学位授与方針」が明示され、公表・周知されている：

資料 Z-3-3-2-2：各コースの「学位授与方針」（前掲資料 A-2-2-1-2 と同資料）

【総合人間学科】

<人間科学コース>

本コースは、学士課程教育において、「人間や人間関係についての知見を持ち、目先の利害にとらわれず、教養ある批判的判断のできる人材の育成」を目標とするとともに、それぞれの

履修モデルの特性を活かして、「論理的判断力(認知哲学)、感受力・美的判断力(芸術学)、実証的判断力(認知心理学)を養い、問題解決への柔軟で大胆な発想をすることができ、状況に応じた行動がとれる」人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜社会人間学コース＞

本コースは、学士課程教育において、「社会的存在としての人間」という認識から出発し、現代における人間と人間を取り巻く社会的現象にかかわる人材の育成」を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜地域科学コース＞

本コースは、学士課程教育において、「地域社会の生活主体としての人間」という観点から、人間とその地域的環境(社会文化的・自然的環境)について多面的・有機的に理解を深め、現代の地域社会が抱える諸問題の解決に実践的に取り組む人材の育成」を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

【歴史学科】

＜歴史資料学コース＞

本コースは、学士課程教育において、「文献史料や考古資料を的確な手法・技術で調査・分析する作業を通じて過去の歴史を読み解き、さらに人間や社会について真摯に考察するとともに、現代を含めた時代の本質を正しく理解したうえで現代社会の諸問題に対応し、発言できる」人材の育成を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜世界システム史学コース＞

本コースは、学士課程教育において、「史資料の総合的分析力に依拠した論理実証力を基礎に、それぞれの履修モデルの特性を生かして、東アジア社会(アジア史学)と欧米社会(西洋史学)の歴史展開や両社会相互関与の体系的理解力、日本・欧米における近現代社会思想の批判的・相対的検証力(文化史学)」を養い、「アジアと欧米の歴史展開や社会思想を、確かな専門知識・理論をもとに地域横断的かつ総合的に分析・討論することを通じて、異なる社会や文化に対する理解を深め、広い視野と柔軟な思考力をもって現代社会の諸問題に対応し、発言できる」人材の育成を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

【文学科】

＜東アジア言語文学コース＞

本コースは、学士課程教育において、東アジアの伝統文化や現代的課題に対して幅広い目配りのできる豊かな専門的知識と理解力を習得し、東アジアの言語や文学、文化に関する諸問題について、新たな課題を発見して解決しその成果を的確に表現できる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜欧米言語文学コース＞

本コースは、学士課程教育において、英語、ドイツ語、フランス語の運用能力を高めるとともに、各言語圏の文学、文化、社会についての知見を幅広く獲得し、自国の文化や社会制度に対する相対的な視点を持つことのできる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の

単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜超域言語文学コース＞

本コースは、学士課程教育において、人類の言語文化及びその精華である文学作品の多様な諸相に対する理解力と、その相互作用を複眼的・国際的に考察する視野を持ち、人類の言語や文学に関する専門的な諸問題について新たな課題を発見して解決し、その成果を的確に表現できる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

【コミュニケーション情報学科】

＜コミュニケーション情報学コース＞

本コースは、学士課程教育において、高次のコミュニケーション能力、外国語運用能力、そしてメディア運用能力を養成することで、情報を読み解き、発信できる能力を高め、グローバル化・情報化が進む現代社会において先導的役割を担いうる自発性と創造性に優れた人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

(出典：『平成 26 年度度学生便覧』 pp. 4-12)

平成 25 年度から、各コースの「カリキュラム編成方針」及び「学位授与方針」が明示され、公表・周知されている：

資料 Z-3-3-2-3：各コースの「カリキュラム編成方針」（前掲資料 A-1-1-2-4 と同資料）

- ・総合人間学科人間科学コース
 - 体系性：人間科学（認知哲学・芸術学・認知心理学）の学問体系を基礎として教育課程を編成している。
 - 段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。
 - 個別化（進路への対応）：3, 4 年次には人間科学（認知哲学・芸術学・認知心理学）の専門的な授業科目と卒業論文にいたる課題達成型の授業科目を配置し、進学あるいは専門職への就職の進路に即した科目履修を保証するよう編成している。
- ・総合人間学科社会人間学コース
 - 体系性：社会人間学（倫理学・社会学・文化人類学）の学問体系を基礎として教育課程を編成している。
 - 段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。
 - 個別化（進路への対応）：3, 4 年次には社会人間学（倫理学・社会学・文化人類学）の専門的な授業科目と課題達成型の授業科目を置き、将来の進路に即した科目履修を保証するよう編成している。
- ・総合人間学科地域科学コース
 - 体系性：地域科学（地域社会学・民俗学・地理空間学）の学問体系を基礎として教育課程を編成している。
 - 段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。
 - 個別化（進路への対応）：3, 4 年次には地域科学（地域社会学・民俗学・地理空間学）の専門的な授業科目と卒業論文にいたる課題達成型の授業科目を配置し、進学あるいは専門職への就職の進路に即した科目履修を保証するよう編成して

いる。

・歴史学科歴史資料学コース

体系性：日本史学・考古学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：2年次より、コースを構成する履修モデルに即した基礎的な専門科目を、3・4年次には、より高度な専門的な授業科目を置き、コース内での横断的科目履修に配慮しつつ、将来の進路に即した科目履修を保證するよう編成している。

・歴史学科世界システム史学コース

体系性：アジア史学・西洋史学・近現代社会思想史学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：2年次より、コースを構成する履修モデルに即した基礎的な専門科目を、3・4年次には、より高度な専門的な授業科目を置き、コース内での横断的科目履修に配慮しつつ、将来の進路に即した科目履修を保證するよう編成している。

・文学科東アジア言語文学コース

体系性：日本語日本文学及び中国語中国文学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3・4年次には、日本語日本文学及び中国語中国文学の専門的な授業科目と卒業論文にいたる課題達成型の授業科目を配置し、進学あるいは専門職への就職の進路に即した科目履修を保證するよう編成している。

・文学科欧米言語文学コース

体系性：欧米言語文学（英語英米文学・独語独文学・仏語仏文学）の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3・4年次には、欧米言語文学（英語英米文学・独語独文学・仏語仏文学）の専門的な授業科目と課題達成型の授業科目を置き、将来の進路に即した科目履修を保證するよう編成している。

・文学科超域言語文学コース

体系性：比較文学及び言語学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：3・4年次には、比較文学及び言語学の専門的な授業科目と卒業論文にいたる課題達成型の授業科目を配置し、進学あるいは専門職への就職への進路に即した科目履修を保證するよう編成している。

・コミュニケーション情報学科コミュニケーション情報学コース

体系性：コミュニケーション情報学の学問体系を基礎として教育課程を編成している。

段階性：基礎的な科目から学年進行に沿って応用的・発展的な科目を学修するよう編成している。

個別化（進路への対応）：コースを構成する各教育分野の専門的な授業科目を置き、将来の進路に即した科目履修を保證するよう編成している。

（出典：『平成26年度学生便覧』pp. 4-12）

資料 Z-3-3-2-4：各コースの「学位授与方針」（前掲資料 A-2-2-1-2 と同資料）

＜総合人間学科＞

・人間科学コース

本コースは、学士課程教育において、「人間や人間関係についての知見を持ち、目先の利害にとらわれず、教養ある批判的判断のできる人材の育成」を目標とするとともに、それぞれの履修モデルの特性を活かして、「論理的判断力(認知哲学)、感受力・美的判断力(芸術学)、実証的判断力(認知心理学)を養い、問題解決への柔軟で大胆な発想をすることができ、状況に応じた行動がとれる」人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

・社会人間学コース

本コースは、学士課程教育において、「社会的存在としての人間」という認識から出発し、現代における人間と人間を取り巻く社会的現象にかかわる人材の育成」を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

・地域科学コース

本コースは、学士課程教育において、「地域社会の生活主体としての人間」という観点から、人間とその地域的環境(社会文化的・自然的環境)について多面的・有機的に理解を深め、現代の地域社会が抱える諸問題の解決に実践的に取り組む人材の育成」を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜歴史学科＞

・歴史資料学コース

本コースは、学士課程教育において、「文献史料や考古資料を的確な手法・技術で調査・分析する作業を通じて過去の歴史を読み解き、さらに人間や社会について真摯に考察するとともに、現代を含めた時代の本質を正しく理解したうえで現代社会の諸問題に対応し、発言できる」人材の育成を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

・世界システム史学コース

本コースは、学士課程教育において、「史資料の総合的分析力に依拠した論理実証力を基礎に、それぞれの履修モデルの特性を生かして、東アジア社会(アジア史学)と欧米社会(西洋史学)の歴史展開や両社会相互関与の体系的理解力、日本・欧米における近代社会思想の批判的・相対的検証力(文化史学)」を養い、「アジアと欧米の歴史展開や社会思想を、確かな専門知識・理論をもとに地域横断的かつ総合的に分析・討論することを通じて、異なる社会や文化に対する理解を深め、広い視野と柔軟な思考力をもって現代社会の諸問題に対応し、発言できる」人材の育成を目標とする。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

＜文学科＞

・東アジア言語文学コース

本コースは、学士課程教育において、東アジアの伝統文化や現代的課題に対して幅広い目配りのできる豊かな専門的知識と理解力を習得し、東アジアの言語や文学、文化に関する諸問題について、新たな課題を発見して解決しその成果を的確に表現できる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

・欧米言語文学コース

本コースは、学士課程教育において、英語、ドイツ語、フランス語の運用能力を高めるとともに、各言語圏の文学、文化、社会についての知見を幅広く獲得し、自国の文化や社会制度に対する相対的な視点を持つことのできる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

・超域言語文学コース

本コースは、学士課程教育において、人類の言語文化及びその精華である文学作品の多様な諸相に対する理解力と、その相互作用を複眼的・国際的に考察する視野を持ち、人類の言語や文学に関する専門的な諸問題について新たな課題を発見して解決し、その成果を的確に表現できる人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

<コミュニケーション情報学科>

・コミュニケーション情報学コース

本コースは、学士課程教育において、高次のコミュニケーション能力、外国語運用能力、そしてメディア運用能力を養成することで、情報を読み解き、発信できる能力を高め、グローバル化・情報化が進む現代社会において先導的役割を担いうる自発性と創造性に優れた人材の育成を目指している。このことを踏まえ、コースとして掲げる学習成果を達成すべく編成・実施された教育課程を学修し、所定の単位を取得した者に、本コースの学位を授与する。

(出典：『2014年度学生便覧』 pp. 4-12)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

「入学者受け入れ方針」、「学位授与方針」、「カリキュラム編成方針」とも適切に定められ、公表・周知されている。期待される水準にあると判断する。

観点3-3 教育研究活動等についての情報（学校教育法施行規則第172条に規定される事項を含む。）が公表されているか。

(観点に係る状況)

- 教員及び学生の研究・教育活動その他については、『熊本大学データ集』、『文学部案内』、『授業計画書』、『文学部HP』、『文学部通信』、『熊大通信』等によって公表されている。
- 学校教育法施行規則第172条の9項目についての公表手段・媒体は以下ようになる：
1. 教育研究上の目的に関しては『学生便覧』で公表されている。
 2. 教育研究上の組織については「熊本大学HP」、『文学部案内』で公表されている。
 3. 教員組織については『学生便覧』で公表され、教員の学位及び業績については「熊本大学評価データベース」に掲載され、一部は文学部HPで公表されている。
 4. 入学者受け入れ方針は『一般入試募集要項』で公表されている。入学者数、収容定員、在学生数、卒業生数、進学者数、就職者数、その他進学及び就職等の状況に関することは『熊本大学データ集』で公表されている。
 5. 授業科目、授業の方法・内容、年間の授業の計画に関しては『授業計画書』で公表されている。
 6. 学修の成果に係る評価、卒業の認定に当たっての基準に関しては『学生便覧』で公表されている。

7. 校地、校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関しては『文学部案内』で公表されている。

8. 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関しては『一般入試学生募集要項』及び『学生便覧』で公表されている。

9. 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関することは『学生便覧』で公表されている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. HP、複数の刊行物によって、文学部の教員及び学生の研究・教育活動その他が学内外に発信、公表されている。

2. 学校教育法施行規則第 172 条の 9 項目すべてに関して適切に公表されている。

以上の観点により、期待される水準にあると判断する。

分析項目 I V 教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。(施設・設備)

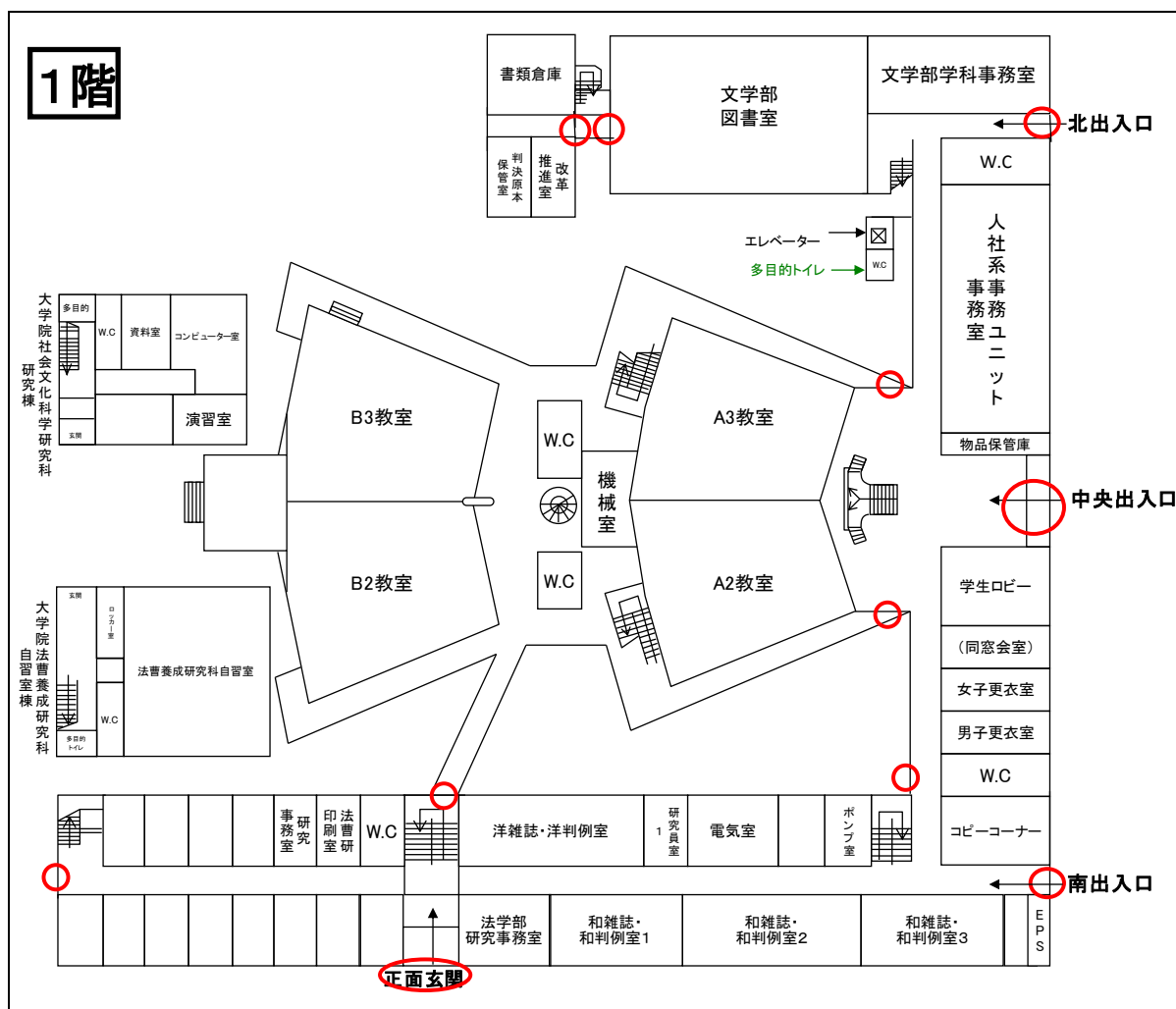
観点 4-1 教育研究活動を展開する上で必要な施設・設備が整備され、有効に活用されているか。また、施設・設備における耐震化、バリアフリー化、安全・防犯面について、それぞれ配慮がなされているか。

(観点に係る状況)

教員研究室、学生研究室、講義室、演習室、実習室、メディア演習室、ロビー学生室、文学部図書室が適切に整備され、有効に活用されている。学長裁量経費、学内営繕費、学部長裁量経費などにより、随時、施設・設備の保全・改善がなされている。

文学部棟のバリアフリー設備は 15 箇所で設置され、障害者用トイレは各階に設置されている：

資料 Z-4-4-1-1：バリアフリー（赤の丸印）・障害者用トイレ（緑の丸印）設置図



(出典：人文社会科学系事務ユニット資料)

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 教員研究室、学生研究室、講義室、演習室、実習室、メディア演習室、ロビー学生室、文学部図書室、文学部図書室が適切に整備され、有効に活用されている。
 2. 学長裁量経費、学内営繕費、学部長裁量経費などにより、随時、施設・設備の保全・改善がなされている。
 3. 学部棟のバリアフリー化設備、障害者用トイレともに整備されている。
 4. 女子学生が多い点を考慮しての夜間の防犯対策が適切になされている。
- 以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

観点4-2 教育研究活動を展開する上で必要な ICT 環境が整備され、有効に活用されているか。

(観点に係る状況)

無線 LAN 整備として、多くのアクセスポイントが棟内に設置されている：

無線 LAN の整備とともに、学生研究室には多くのパソコンが設置され、学生の学習促進の場として機能している：

資料 Z-4-4-2-2：学生研究室設置のパソコンの台数（前掲資料 A-1-1-2-17 と同一資料）

学科（学年定員）	履修モデル	台数	計 ¹	計 ²
総合人間学科（55）	認知哲学	1	49	118
	芸術学	4		
	認知心理学	10		
	倫理学	3		
	社会学	5		
	文化人類学	5		
	地域社会学	4		
	民俗学	5		
	地理空間学	12		
歴史学科（35）	アジア史学	1	10	
	西洋史学	4		
	文化史学	2		
	日本史学	2		
	考古学	1		
文学科（50）	日本語日本文学	4	26	
	中国語中国文学	4		
	英語英米文学	2		
	独語独文学	3		
	仏語仏文学	3		
	比較文学	2		
	言語学	8		
コミュニケーション情報学科（30）	コミュニケーション情報学	33	33	

（出典：文学部自己評価委員会資料：「学科収集資料」を基に作成）

これらパソコン機器の接続状況、また携帯接続状況に関しては、教員及び学生からの要望が出るごとに対応しており、平成 25 年度には、教養棟屋上への携帯接続用アンテナが設置され、また文学部棟での無線 LAN 接続ポイントが増設された。

（水準）

期待される水準にある。

（判断理由）

1. 無線 LAN 環境が整い、継続的な整備が適切になされている。
 2. 学生研究室に十分なパソコンが配備され、大いに活用されている。
 3. 1. と 2. に関して、教員・学生からの継続的な改善要望に適切に対応している。
- 以上のとおり、期待される水準にあると判断する。

観点4-3 図書館が整備され、図書、学術雑誌、視聴覚資料、その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理されており、有効に活用されているか。

(観点に係る状況)

文学部図書室が平成23年度に開設され、各履修モデル専用の書架が設置され、合計約7万冊に及ぶ図書が専門領域に従って配架されている。学生は自分の専門領域の基本的な文献から専門的な文献まで、必要なときに迅速に利用することができる。学部外の閲覧者にも利用されている。

平成25年に、図書室利用者、雑誌室利用者、図書館依頼のデータが取られている：

資料 Z-4-4-3-1：図書室・雑誌室利用者、図書館依頼状況（10月17日～11月30日）

	学生	教員	外部	計
図書室利用者	299	23	11	333
雑誌室利用者	59	10	0	69
図書館依頼	44	0	2	46
計	403	33	13	449

(出典：文学部図書館運営委員会資料)

「学部長と学生代表による懇談会」において、中央図書館及び文学部図書室についての要望が出され、以下のような回答と対応をしている：

資料 Z-4-4-3-2：「学部長と学生代表による懇談会」における要望

・オーパック検索システムで民俗学研究室が文化表象研究室と表示してあるのを訂正してほしい。

【回答】

図書館に確認する。

➔ 図書館に問い合わせ、処理をお願いした。(その後、処理済の連絡が図書館からあった。)

・文学部図書室の本を充実してほしい。特に専門の雑誌類をお願いします。

【回答】

文学部図書室はスペースが限られているので、各学科・コース・履修モデル(分野)で選定した本を入れている。そして、主な雑誌類は各履修モデルの学生研究室に配架してあるはずである。それを利用するように。そのほかについては、中央図書館を利用してほしい。なお、さらに追加してほしい専門雑誌等があったら、それについては、各学科・コース・履修モデル(分野)の担当教員へ要望を出していただきたい。

(出典：人文社会科学系事務ユニット資料：「平成25年度学部長と学生代表による懇談会議事要領」より抜粋)

学生研究室には、学術雑誌を中心とした図書資料が配架され、最新の研究動向・情報を入手する環境も整い、各教員の研究室にも多くの研究書が設置され、学生の利用に対応している。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

1. 平成23年度より文学部専用の図書室が設置され、学生の図書利便性は格段に向上している。

2. 学生研究室には学術雑誌を中心とした図書が配架され、学生が利用している。

3. 各教員研究室にも多くの図書が設置され、学生の利用に応じている。
 4. 図書室の蔵書、利用制度等に関して学生のニーズを調査しており、その対応も適切に行っている。
- 以上の観点から、期待される水準にあると判断する。

観点 4-4 自主的学習環境が十分に整備され、効果的に利用されているか。

(観点に係る状況)

無線 LAN、学生研究室のパソコン環境、文学部図書室のほかにも、以下のような自主学習環境の整備がなされている。

1. 22 の履修モデルごとに、学生研究室が設置され、平日・休日、学生の自主学習の場、交流の場として活発かつ有効に利用されている。
2. その他、実習室、実験室、メディア演習室、ロビー学生室があり、学生に活用されている。
3. 平成 26 年度の「学部長と学生代表による懇談会」での学生からの要望「メディア演習室のメディア機器をもっと充実してほしい。」への対応措置により、メディア演習室は平成 25 年度に 2 室に増設され、映像機器もさらに充実し、視聴覚教材利用の自主学習に最適の環境となっている。
4. 同懇談会での要望「1 階玄関横のロビー学生室を休日も開けてほしい。」に対応して、平成 26 年度から平日・休日ともに開放されることになり、利用度は一段と高くなっている。

(水準)

期待される水準にある。

(判断理由)

上記 1. ～4. のとおり、文学部における自主学習環境は十分に整備され、効果的に利用されており、期待される水準にあると判断する。

4. 質の向上度の分析及び判定

(1) 分析項目Ⅰ 管理運営体制及び事務組織が適切に整備され機能していること。

高い質を維持している。理由は以下のとおり。

1. 教育課程、人事等に係る事項を審議する教授会を置き、その下に学部の基本方針及び重要事項を審議する運営会議を設置し、十分な管理運営体制を取っている。関連する委員会及び事務組織との連携体制も構築している。
2. 管理運営組織及び事務組織は適正な規模・機能を有し、危機管理に対してもコンプライアンス及び災害への備え等に関し組織的に対応している。
3. 事務職員は、種々の研修に積極的に参加し、事務組織が十分な任務を果たすべく努めている。
4. 事務職員が陪席する文学部内の会議数も、平成 25 年度以前の 6 会議から、26 年度には 9 会議に増え、平成 21 年度よりも管理運営体制が向上している。

(2) 分析項目Ⅱ 活動の総合的な状況に関する自己点検・評価が実施されているとともに、継続的に改善するための体制が整備され、機能していること。

高い質を維持している。理由は以下のとおり。

1. 自己点検・評価のための実施要領が明確に定められており、実施体制も十分に整っている。
2. 全学的に実施される法人評価及び認証評価のための自己点検評価も定期的に実施されている。
3. 外部資金申請のための種々の説明会に教職員は積極的に参加し、その申請・運用・管理の改善に努めている。

(3) 分析項目Ⅲ 教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされていること。(教育情報の公表)

改善、向上している。理由は以下のとおり。

1. 文学部 HP、その他文学部発行の刊行物によって、教員及び学生の研究活動、教育活動その他が適切に公表・周知され、説明責任が十分に果たされている。
2. 平成 23 年度以前の『学生便覧』には学部教育目的のみが明示されていたが、24 年度から各学科・コースの教育目的が掲載され、さらに 25 年度から、各学科・コースの学位授与方針、教育編成方針が掲載され、適切に公表・周知されるようになった。平成 21 年度よりも質的に明らかに向上している。

(4) 分析項目Ⅳ 教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されていること。(施設・設備)

重要な質の変化あり。大きく改善、向上している。理由は以下のとおり。

1. 文学部全体としての施設は、教員 62 名(定員 63 名)、学生約 780 名を収容するのに十分なスペースを有し、教員研究室、学生研究室が適正に整備・配置され、高い質を維持している。
2. 学生の自主学習環境として、学生研究室ほか、実習室、実験室、メディア演習室、ロビー学生室などが整備されている。メディア演習室は平成 25 年度に 2 室に増設され、映像機器もさらに整備され、視覚教材を利用した自主学習に最適の学習環境となっている。ロビー学生室には平成 25 年度からコピー機が設置され、26 年度から休日にも開放されることになり、平成 21 年度と比べ、明らかに質的に向上している。
3. 文学部棟における無線 LAN の環境は十分に整備されており、LAN 使用頻度の増加に伴うニーズに対して平成 22～25 年度の間に複数回に分かって整備・改善を行っている。学生が利用可能なパソコンも年度ごとに整備を向上させている。文学部における教育研究活動を展開する上で必要な ICT 環境は平成 21 年度以前よりも明らかに向上している。
4. 平成 23 年度に文学部専用の図書室が設置され、図書環境は平成 21 年度と比べ、飛躍的に向上した。図書室の内容等に関しての学生のニーズ調査も行っており、改善が継続的に行われている。学生研究室には学術雑誌を中心とした図書が配置され、さらに教員研究室の図書も学生は利用できる。